宮城県文化財調査報告書第59集

宇　南　遺　跡

昭和 54 年 3 月

宮城県教育委員会

宇　南　遺　跡

序

本報告書は，宮城県教育委員会が昭和53年度の国庫補助事業として実施した宇南遺跡の発掘調査の結果をとりまとめたものであります。

この遺跡は，県営ほ場整備事業の施行計画と係り合いをもったため，先に遺跡詳細分布調査を行ない，その成果をもとに事業主体の県農政部をはじめ関係者と協議を重ねたところ，大部分のほ場は工法変更等によって遺構の保存ができましたが，一部地区では現状保存の調整がつかなかったため，これは記録保存の調査を行なうこととしたものであります。

今後とも各種開発事業と遺跡とのかかわり合いは増加するものと予想されますが，工事計画との調整に当って，一人でも多くの方々に埋蔵文化財のもつ価値が理解されるよう，この報告書が一助となれば幸いと存じます。

なお，この調査に御理解と御協力をお示しくださった関係の多くの方々に厚く御礼を申しあげる次第であります。

昭 和 54年 3月

宮城県教育委員会

教 育 長 北 村　　潮

例　　言

１．本書は，県営ほ場整備関係，栗原郡志波姫町八樟所在宇南遺跡の発掘調査報告書である。

２．報告書作成に際し，陶磁器類については東北歴史資料館藤沼邦彦氏・名古屋大学樽崎彰一氏の，板碑については尚絅女学院短期大学職員佐藤正人氏の御教示をいただいた。

３．本書における土色は「新版標準土色帳」（小山，竹原：1987），土性は国際土壌学会の粒径区分によるものである。

４．本書の第１図は建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の50,000分の１地形図を複製したものである。（承認番号：昭54東複第252）。

５．整理，執筆・編集は文化財保護課が行なった。担当者は斉藤吉弘である。

調査要項

遺跡名：宇南遺跡（宮城県遺跡地名表には登載番号49020「宇南館跡」として登載）

調査期間：昭和53年8月1日～10月14日，12月2・14・20日

調査面積：約5,000㎡（発掘面積約4,500㎡）

遺跡記号：ＥＵ

調査主体者：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員　斉藤吉弘　佐々木安彦　太田昭夫　小野寺祥一郎　小川淳一　真山悟

調査協力機関：志波姫町教育委員会

目　　次

序
Ⅰ．調査に至る経過 1
Ⅱ．遺跡の位置と周辺の遺跡
１．遺跡の位置 1
２．周辺の遺跡 1
Ⅲ．調査の方法と経過
１．調査の方法 3
２．調査の経過 3
Ⅳ．調査の成果
１．基本層序 6
２．遺構とその出土遺物 6
（１）竪穴住居跡 6
（２）方形周溝 29
（３）掘立柱建物跡 30
（４）焼土遺構 30
（５）焼け面 32
（６）土壙 32
（７）井戸跡 36
（８）溝 40
（９）ピット 43
(10) その他の出土遺物 43
イ．縄文土器 43
ロ．弥生土器 44
ハ．石器 46
ニ．土師器・須恵器 46
Ⅴ．遺構・遺物に関する問題点
１．出土土器の分類 47
２．出土土器の組み合わせとその年代 49
３．竪穴住居跡について 50
４．その他の遺構について 52
Ⅵ．遺跡の構成 54

Ⅰ　調査に至る経過

宇南遺跡は宮城県栗原郡志波姫町八樟地内にある。

志波姫町は，昭和41年度以来，農地1012*ha*を対象とした志波姫Ⅰ期地区の県営ほ場整備事業に着工している。

昭和53年度は宇南Ⅰ区8.8*ha*の面工事が実施されることになったが，この中に宇南遺跡が係り合いをもったため，宮城県教育委員会では次の各期間に遺跡の範囲および遺構確認の調査を実施した。

昭和53年6月1日～7月13日

53年10月2日～10月14日

54年2月5日～2月8日

その後，調査の結果をもとに事業と遺跡の保護について，再三の調整に努めたが，保存措置を講じかねた部分については，事前調査を実施することになった。

調査は，昭和53年度の国庫補助事業として，次の各期間に宮城県教育庁文化財保護課が実施した。

昭和53年8月1日～10月14日

53年12月2日・14日・20日

Ⅱ　遺跡の位置と周辺の遺跡

１．遺跡の位置

宇南遺跡は栗原郡志波姫町八樟宇南に所在し，志波姫町役場から西南約２㎞に位置する。

志波姫町は地形的にみると，奥羽山脈より派生した磐井丘陵と，築館丘陵に囲まれた扇状地性低地（迫川低地）の中にある。町の北側には一迫川によって形成された沖積地が広がっている。南側には，築館丘陵から派生した標高25～30㎜の平坦な台地が北東へのびている。この台地から北側の沖積地に向って数多くの舌状にのびた台地が張り出している。これらの中で，八樟付近から北側の宇南地区に向って張り出す標高25㎜の舌状の台地がある。この舌状台地の先端部は，西側を一迫川の沖積地で，北・東・南側を幅20㎜の湿地（標高18～19㎜）で囲まれている。その囲まれた内側の部分は，一段高い標高24～25㎜の平坦部で北へ傾斜する水田と畑である。遺跡の範囲は湿地とそれに囲まれた平坦面である。

２．周辺の遺跡

本遺跡の立地する平坦な台地や沖積地には現在まで数多くの遺跡が確認されている。時代別

番号	遺跡地名及番号	遺跡名	9	5	城内古墳	19	13	山ノ上遺跡	金成町		
志波姫町			10	8	山王館跡	築館町			28	3	姉歯横穴古墳群
1	20	宇南遺跡	11	12	鞠塚遺跡	20	5	嘉倉貝塚	29	18	上館跡
2	15	鶴ノ丸遺跡	12	4	荒町遺跡	21	6	玉萩台遺跡	30	37	下館跡
3	14	御駒堂遺跡	13	1	竹ノ内遺跡	22	28	照越台遺跡	31	19	姉歯松古墳
4	16	日良館跡	14	11	大門遺跡	23	47	萩沢城跡	32	16	佐野遺跡
5		阿久戸川・古戦場	15	18	八幡館跡	24	18	鰻沢遺跡	若柳町		
6	19	刈敷館跡	16	3	狐塚遺跡	25	37	佐内屋敷遺跡	33	26	平館跡
7	17	刈敷袋遺跡	17	6	蓬田館跡	26	7	伊治城跡	34	8	原貝塚
8	2	刈敷治郎遺跡	18	10	熊谷遺跡	27	44	天神城跡	35	1	敷味貝塚

第1図　周辺の遺跡

にみると，次のような遺跡がみられる。

縄文時代の遺跡には，土壙の発見されている鶴ノ丸遺跡や竹ノ丸遺跡・刈敷治郎遺跡などがある。

弥生時代の遺跡には，西館遺跡がある。

古墳時代の遺跡には，方形周溝墓・円形周溝・竪穴住居跡が発掘されている鶴ノ丸遺跡や竪穴住居跡が発掘されている御駒堂遺跡・山ノ上遺跡・佐野遺跡や城内古墳がある。

奈良～平安時代の遺跡には，竪穴住居跡が発掘されている糠塚遺跡・御駒堂遺跡・大門遺跡や，窯跡の狐塚遺跡がある。

鎌倉時代～江戸時代の遺跡には，堀・掘立柱建物跡・井戸が発掘されている鶴ノ丸館や日良館・刈敷館・堀口館・山王館などの館跡がある。これらの館跡の周囲には中世～近世の板碑が発見されている。

Ⅲ　調査の方法と経過

１．調査の方法

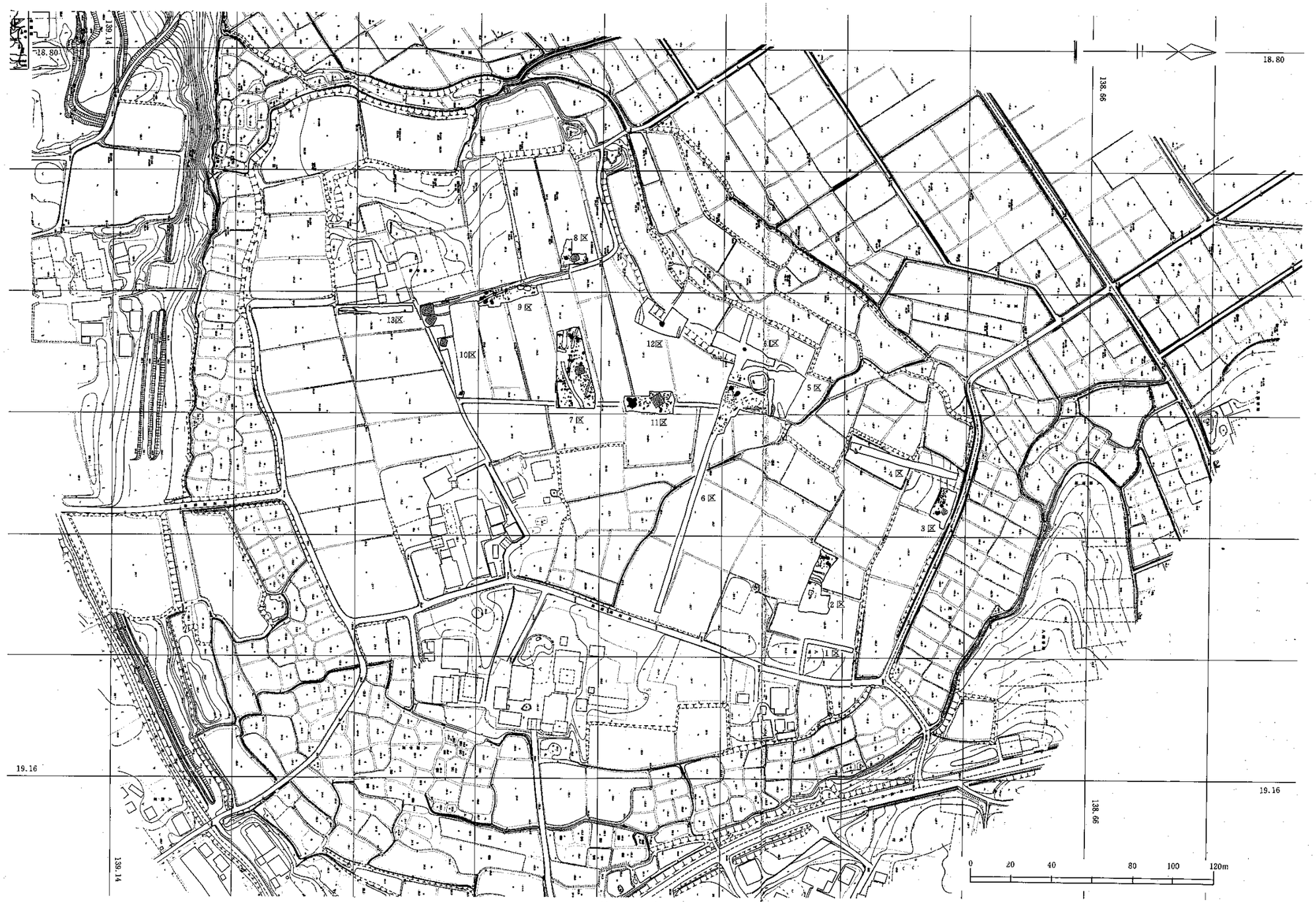
〔調査対象範囲〕６月・７月の範囲確認調査で竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壙などが検出され，平坦部全域に遺構の分布が確認された。それにもとずき，ほ場整備の水路・道路の計画変更が行なわれた。今回の調査は，変更計画案の道路・水路・削平部分にも遺構の存在が予想されたので，計画案の範囲（約5,000㎡）を対象として調査を行なうことになった。

〔調査区の設定〕原点ＡとＢを結ぶ基準線を設け，それをもとにして対象地区に３m単位のグリッドを組んだ。東西方向をアルファベット，南北方向にアラビア数字で示した。なお，東西方向は60mを単位として大きなブロック（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ）とした。調査区は，計画案の水路・道路・削平される各部分を１区～13区として設定した。各区とも計画区域内を全面発掘した。

２．調査の経過

発掘調査は昭和53年8月2日に始まった。調査対象面積は5,000㎡である。調査は，平坦部の南側の水路部分，次に平坦部中央の削平部分と北斜面の水路部分の順で行なった。

その結果，平坦部南側の水路部分は削平を受けており遺構の残りはよくなかったが，竪穴住居跡３軒，井戸跡２基，土壙33基，掘立柱建物跡１棟を検出した。平坦部中央では，第Ⅱ層がわずかに削平を受けているだけで遺構には影響はなかった。その結果，竪穴住居跡２棟，井戸跡２基，土壙17基，掘立柱建物跡２棟，溝８本を検出した。平坦部の北側は削平を受けていた


18.80
139.14
138.66
19.16
1区
2区
3区
4区
5区
6区
7区
8区
9区
10区
11区
12区
13区
0
20
40
80
100
120m

第２図　宇南遺跡地形図

が，平坦部から斜面に移行する部分で，方形周溝１基，井戸２基，焼土遺構２基，土壙３基，ピット群を検出した。北側斜面は開田のため一部破壊を受けているが，旧地形を残しており，第Ⅱ層中で縄文土器を発見した。開田を受けている部分では，地山面で土器棺墓１基，竪穴住居跡２軒・土壙４基・掘立柱建物跡２棟・溝３本を検出した。

最終的には竪穴住居跡８軒，方形周溝１基，土器棺墓１基，土壙57基，掘立柱建物跡３棟，井戸６基，焼土遺構２基などを精査して10月14日調査を終了した。なお，調査の結果を公開する目的で9月16日に現地説明会を行なった。

Ⅳ　調査の成果

１．基本層序

第Ⅰ層は黒褐色土（10ＹＲ$^{2}/_{3}$シルト）であり，全域に分布している。層の厚さは30㎝～40㎝でほぼ一定している。出土遺物には縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・近世の陶磁器などがある。

第Ⅱ層は黒色土（10ＹＲ$^{2}/_{1}$シルト）であり，削平を受けていない地域に分布する。層の厚さは約30㎝である。出土遺物には，土師器・須恵器が多い。

北側斜面のＣＯ－53を中心として約500㎡の範囲に縄文前期の遺物包含層（単層）が形成されている。

２．遺構とその出土遺物

（１）竪穴住居跡

第１号住居跡

〔確認面〕地山面で確認された。

〔平面形・規模〕平面形は正方形で，長軸3.3m，短軸3.2mである。

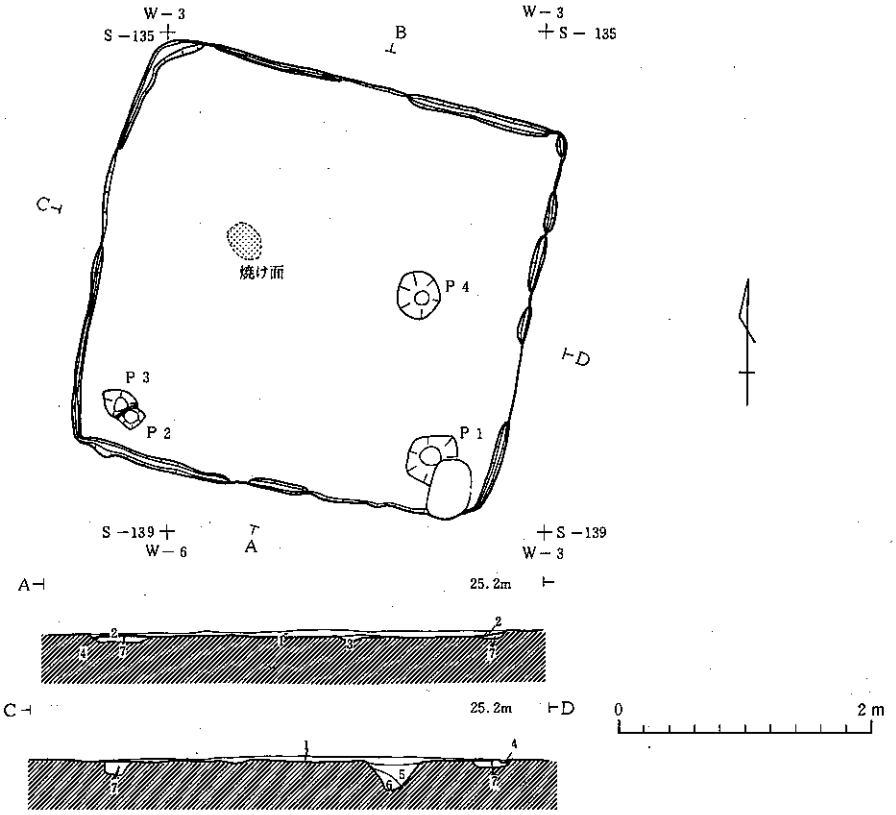
〔堆積土〕３層に分かれる。第１層は住居中央部に堆積している。第２層は壁際に堆積している。第３層は床面上の一部にみられる。

〔壁〕４辺とも残っているが，削平が著しいため壁高は３㎝程度である。

〔床面〕床面はわずかに凹凸がある。壁際にやや汚れた褐色土の貼床があり，中央部は地山を床面としている。貼床の下に，幅10～15㎝，深さ約10㎝の掘り込みがみられ壁に沿ってめぐっている。

〔柱穴〕ピットは４個確認されているが柱痕跡の認められるものはない。堆積土・位置関係などから，ピット１・３が柱穴と考えられる。

〔周溝〕周溝は部分的にとぎれるが，住居の各辺に認められる。幅は約10㎝で床面からの深



層　位	層No.	土　色	土性	備　考
第 1 層	1	黒褐色 10YR 3/3	シルト	地山ローム塊粒子含む
第 2 層	2	暗褐色 10YR 3/4	シルト	地山ローム塊粒子①より多く含む
第 3 層	3	黒褐色 10YR 3/2	シルト	地山ローム粒子含む
周　溝	4	暗褐色 10YR 3/4	シルト	地山ローム粒子含む
ピット	5	黒褐色 10YR 3/2	シルト	炭化物粒子と地山粒子が少し混る
〃	6	黒褐色 10YR 3/2	シルト	地山粒子多く混る
掘り方埋土	7	黒褐色 10YR 3/2	シルト	地山山粒子を含む

第３図　第１号住居跡

さは約４cmである。

〔焼け面〕住居中央の東寄りに長軸60cm、短軸45cmの楕円形の焼け面がある。

〔出土遺物〕本住居跡に伴うと考えられる遺物は床面上出土の土師器坏・甕・甑がある。

住居に伴う遺物（第４図）

土師器坏－１は平底のものである。口縁部は外傾し，頚部がわずかにくびれる。体部はやや丸味をもつ。２は丸底のものである。口縁部は短く外反し，体部は丸味をもち上半が内弯する。

土師器甕－３は口縁部破片である。複合口縁で，外反している。５は底部破片である。

土師器甑－口縁部は肥厚して複合口縁状を呈する。体部上半から口縁部は外傾している（4）

堆積土出土遺物（第４図）

土師器甕－底部破片である（6）。

第２号住居跡

〔確認面〕地山面で確認された。

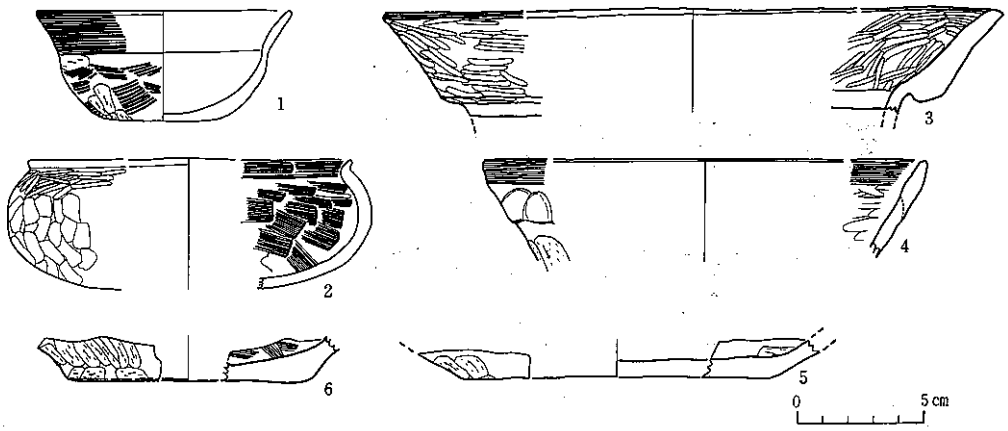
〔重複〕後世の溝やピット，第４号住居跡によって東壁と堆積土の一部が切られている。

〔平面形・規模〕平面形は残存する北壁（6.2m）と西壁（６m）からみて方形基調と思われる。

〔堆積土〕４層に大別できる。第１層は住居全体に堆積する。第２層は西半の一部に堆積する。第３層は壁際をのぞき住居中央に堆積し一部は床面に達している。第４層は壁際に堆積する。

〔壁〕東壁と南・北辺の１部が不明である。残存する壁高は約20cmである。

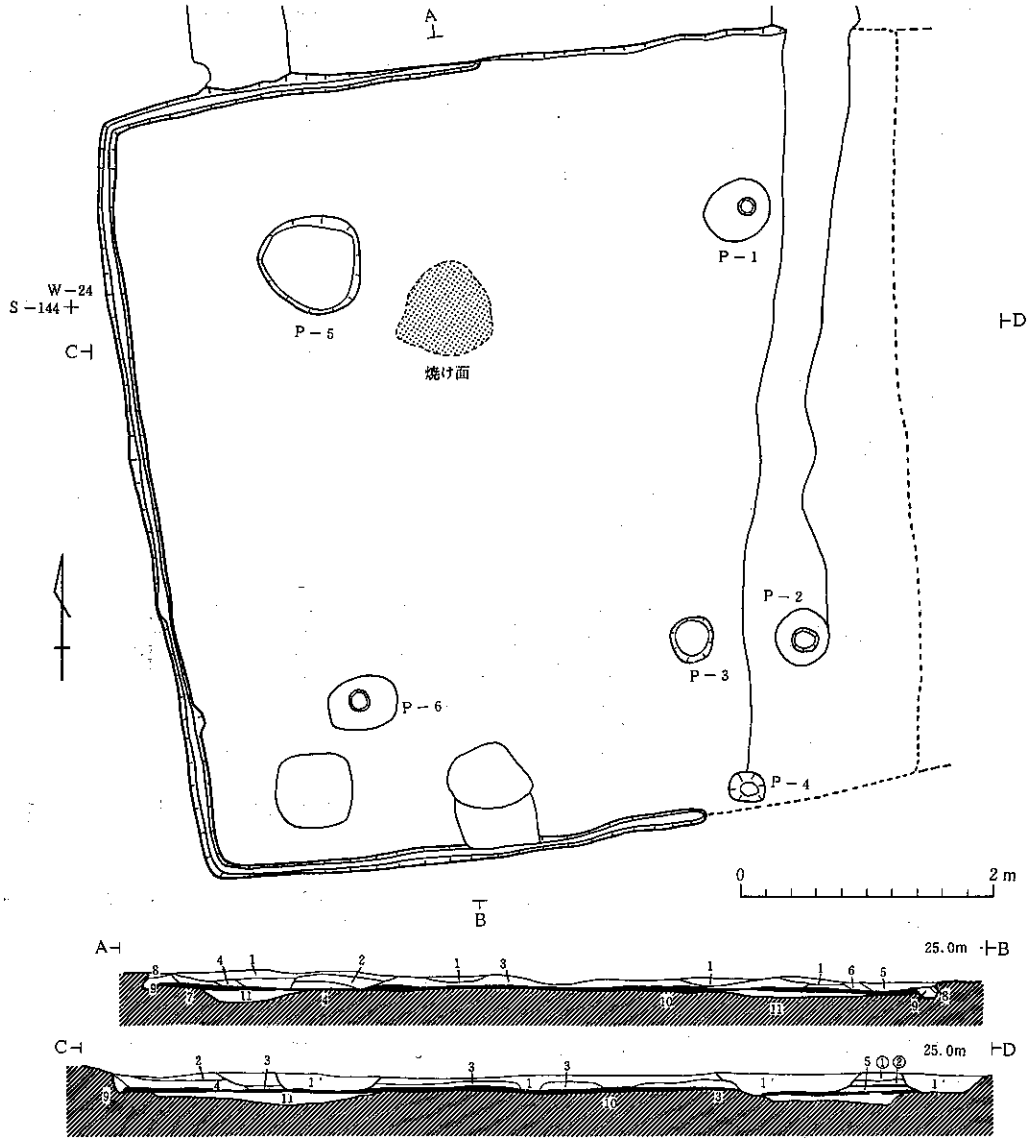
〔床面〕床面はわずかに凹凸があり，全体に硬い貼床である。貼床の下に，幅約１m～1.5m、



観　察　表

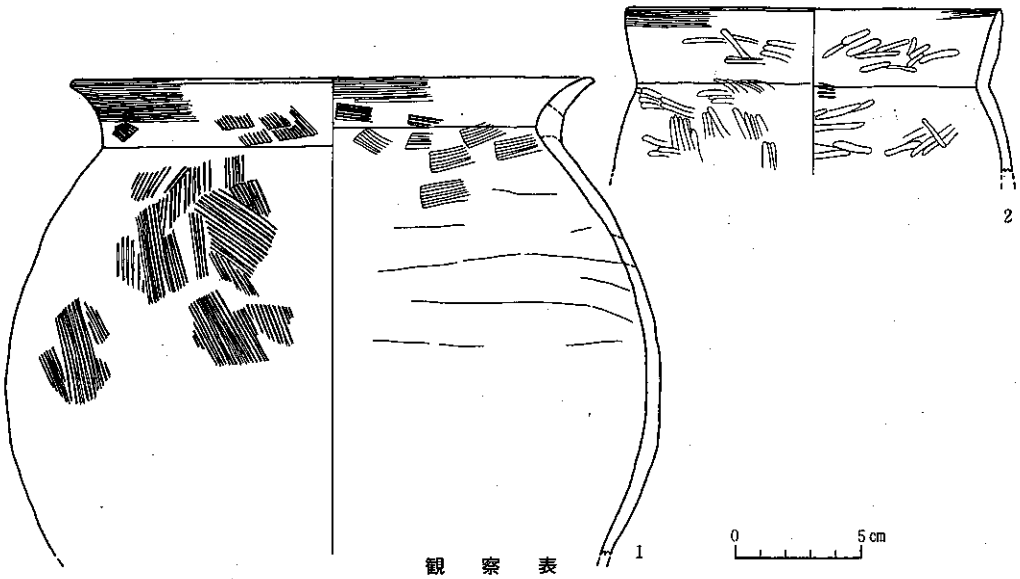
番号	出土層位	種別	調整 内面	調整 外面	底部	器高	口径	体径	底部	分類番号
1	床面	土師器(坏)		ヨコナデ・刷毛目・ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	4.4	10.0		4.4	A I
2	床面	土師器(坏)	ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ・ヘラミガキ	5.2	12.8			A II
3	床面	土師器(甕)	ヘラミガキ	ナデ・ヘラミガキ			24.2			A I
4	床面	土師器(甑)	ヨコナデリ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラケズリ・オサエ			17.4			
5	床面	土師器(甕)	ナデ	ヘラケズリ					12.0	
6	堆積土	土師器(甕)	ナデ	ヘラケズリ					9.8	

第４図　第１号住居跡出土遺物



層位		層No.	土色	土性	備考
攪乱		1'	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山粒子混入
4住	第1層	①	黒褐色 10YR3/2	シルト	
	第2層	②	暗褐色 10YR3/3	シルト	
2住	第1層	1	黒褐色 10YR3/3	シルト	
	第2層	2	黒褐色 10YR3/2	シルト	焼土粒子、炭化物含む
	第3層	3	暗褐色 10YR3/3	シルト	焼土粒子、炭化物遺物を含む
	第4層	4	黒褐色 10YR3/1	シルト	
	〃	5	黒褐色 10YR3/2	シルト	
	〃	6	褐色 10YR4/4	シルト	
	〃	7	暗褐色 10YR3/4	シルト	地山粒子、焼土混入遺物を含む
周溝		8	褐色 10YR4/4	シルト	
		9	黒褐色 10YR3/2	シルト	地山粒子混入
貼床		10	褐色 10YR4/4	シルト	しまりあり、地山粒子混入
掘り方埋土		11	暗褐色 10YR3/4	シルト	地山粒子

第5図　第2号住居跡



観　察　表

番号	出土層位	種　別	調整 内面	調整 外面	底　部	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	床	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目・ヘラナデ	ヨコナデ・刷毛目			20.4	26.0		AⅡa
2	掘り方埋土	土師器(壺)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラミガキ						AⅡb

第６図　第２号住居跡出土遺物

深さ約10cmの掘り込みが住居の壁際をめぐっている。

〔柱穴〕床面からピットは６個確認されている。柱痕跡が認められること，配置関係などから，ピット１・２・５・６が柱穴と考えられる。

〔周溝〕西壁と南・北壁の一部に認められる。幅は約10cmで床面からの深さは約７cmである。

〔焼け面〕焼け面は楕円形で長軸80cm・短軸70cmであり，住居の北西寄りにある。

〔出土遺物〕住居に伴うと考えられる遺物は床面より出土の土師器甕である。

土師器甕ー体部に最大径が位置する。１は口縁部が厚く外反し，体部は球形を呈する。２は口縁部が外傾し，体部は丸味をもつ。

第３号住居跡

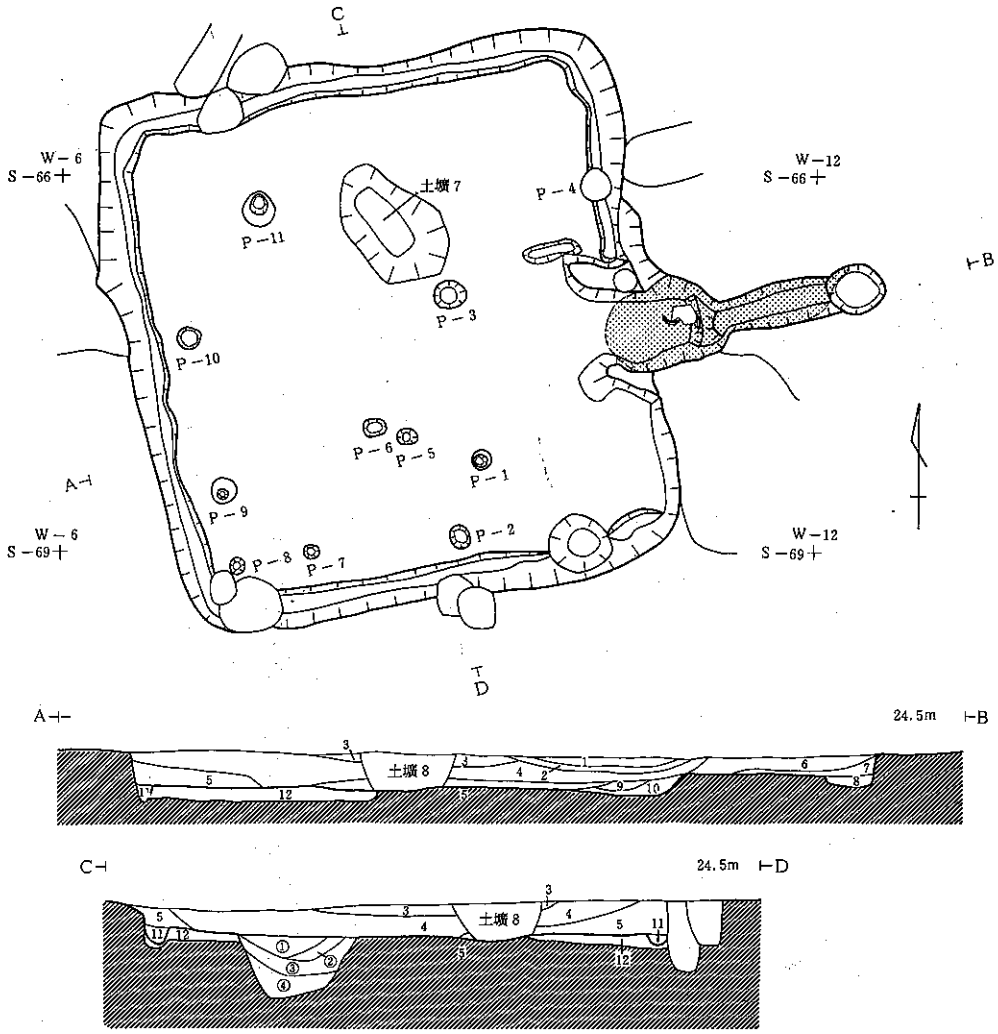
〔確認面〕地山面で確認された。

〔重複〕掘立柱建物跡と土壙に切られている。

〔平面形〕平面形は隅丸方形で長軸4.1m，短軸3.8mである。

〔堆積土〕４層に大別できる。第１層は北壁寄りに堆積している。第２層は住居中央部に堆積する。第３層は壁際をのぞいて住居全体に分布する。第４層は壁際に分布する。

〔壁〕４辺ともに残っており，壁の立ち上りは比較的急である。壁高は約30cmである。



第3住居跡堆積土観察表

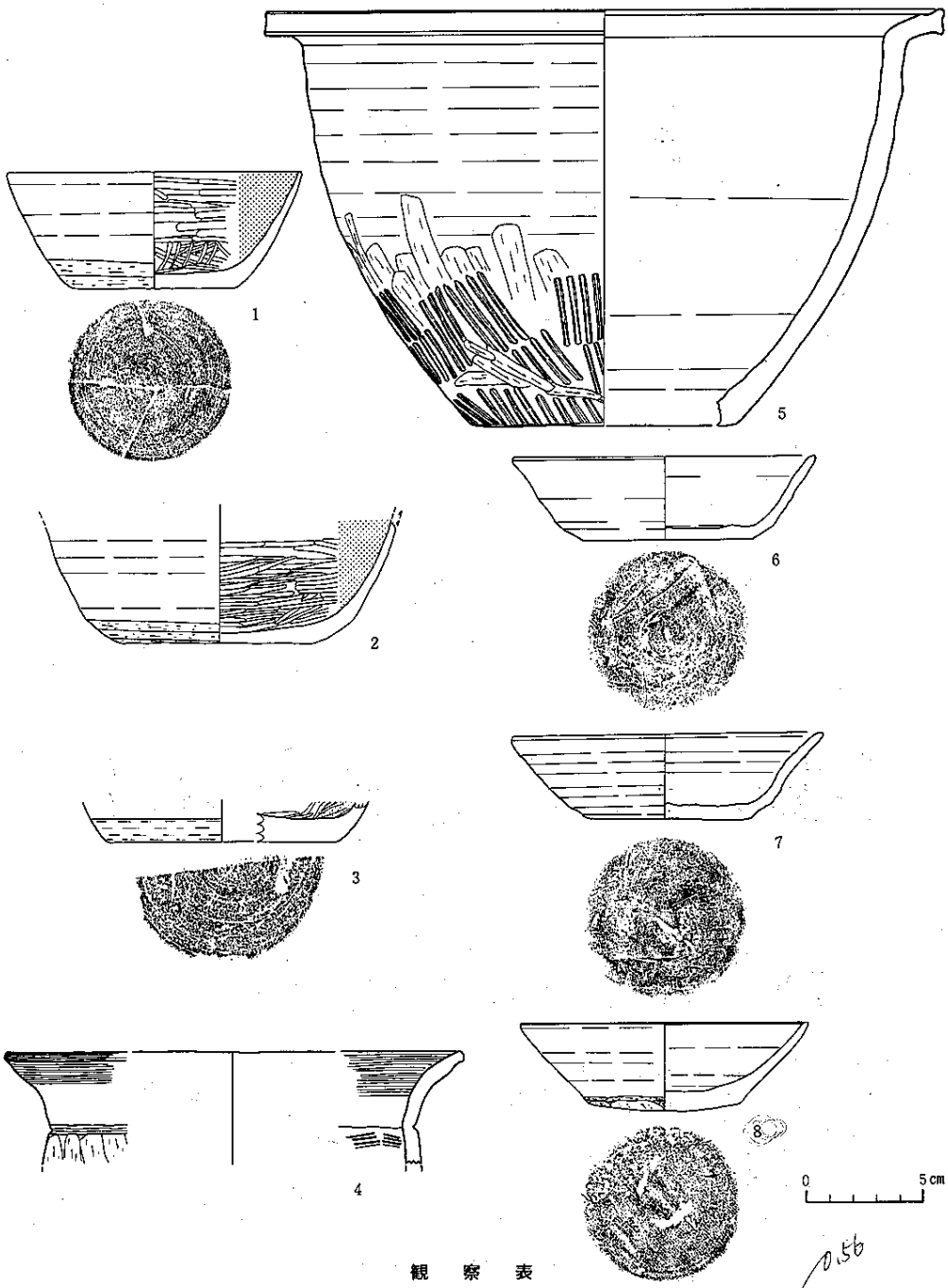
層位	層No.	土層	土性	備考
第1層	1	極暗赤褐色 5YR 3/4	シルト	炭化物混入
〃	2	黒褐色 5YR 3/2	シルト	炭化物を含む
第2層	3	極暗褐色 7.5YR 2/3	シルト	わずかに灰白混入
第3層	4	暗褐色 7.5YR 3/3	シルト	地山粒子含む
第4層	5	暗褐色 7.5YR 3/4	シルト	地山粒子含む（3層より多く）
カマド堆積土	6	極赤褐色 5YR 3/4	シルト	焼土多く含む
〃	7	赤褐色 5YR 4/6	シルト	焼土多く含む
〃	8	明褐色 7.5YR 5/6	シルト	地山多く含む
〃	9	黒褐色 10YR 2/3	シルト	白色粘土含む。焼土含む
〃	10	黒褐色 10YR 3/3	シルト	焼土やや含む
周溝	11	暗褐色 10YR 3/4	シルト	地山ローム粒子多く含む
掘り方埋土	12	黄褐色 10YR 5/6	シルト	地山ローム塊を含む

土壙7　堆積土観察表

層No.	土層	土性	備考
1	黒褐色 10YR 3/2	シルト	
2	暗褐色 10YR 3/3	シルト	
3	黄褐色 10YR 5/6	シルト	地山ロームに近い
4	褐色 10YR 4/4	シルト	

0　2m

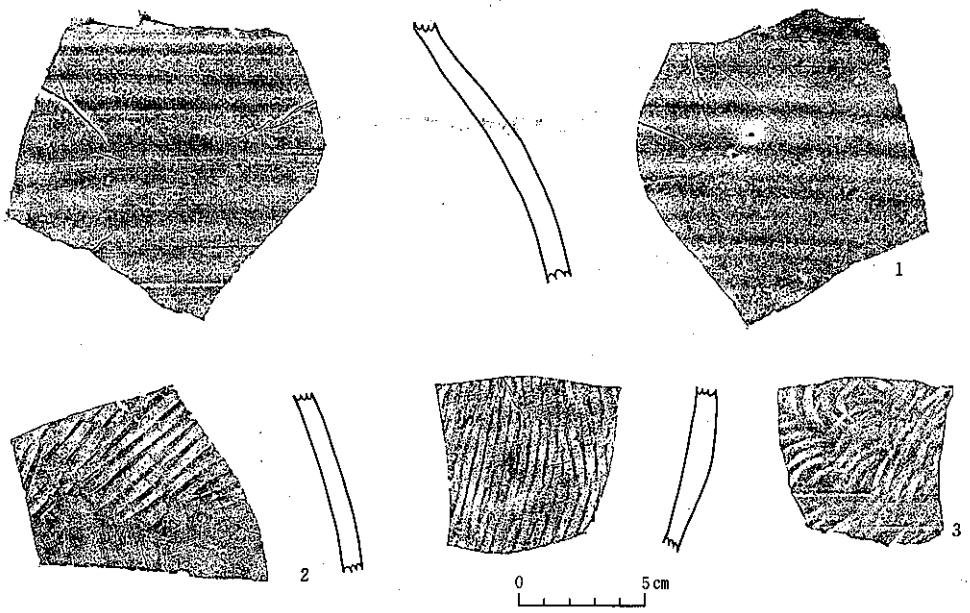
第7図　第3号住居跡



観　察　表

番号	出土層位	種　別	調　整		底　部	器高	口径	体径	底径	分類番号
			内　面	外　面						
1	カマド内	土師器(坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ロクロ・回転ヘラケズリ	回転糸切り→回転ヘラケズリ	5.0	12.5		7.0	C Ⅰ e ①
2	カマド内	土師器(坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ロクロ・回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ				8.2	C Ⅲ e ①
3	カマド内	土師器(坏)	ヘラミガキ・黒色処理	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ				9.8	C Ⅲ e ①
4	カマド内	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・沈線・ヘラケズリ			19.4			A Ⅲ a
5	カマド底面	須恵器(甕)	ヨコナデ・ロクロ	ロクロ・タタキ→ヘラケズリ	不　明	17.9	28.8	23.0	11.4	
6	カマド内	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	3.6	12.8		7.2	Ⅱ
7	カマド内	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	3.8	13.2		6.5	Ⅱ
8	カマド内	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	3.8	12.2		6.2	Ⅱ

第8図　第3号住居跡出土遺物（Ⅰ）



観　察　表

番号	出土層位	種　別	調　整		底　部	器高	口径	体径	底径
			内　面	外　面					
1	床　面	須恵器(甕)	ロクロ	ロクロ					
2	床　面	須恵器(甕)	ロクロ平行タタキ	平行タタキ目					
3	床　面	須恵器(甕)	青海波文	平行タタキ目					

第９図　第３号住居跡出土遺物（２）

〔床面〕比較的平坦で硬い。住居の中央は地山を床としているが，周囲には貼床がある。貼床の下に，幅50cm～１mで深さ10cmの掘り込みが住居の壁沿いをめぐる。

〔周溝〕カマドと南東隅の部分を除いてめぐっている。幅は15cm，深さは床面から６cmである。

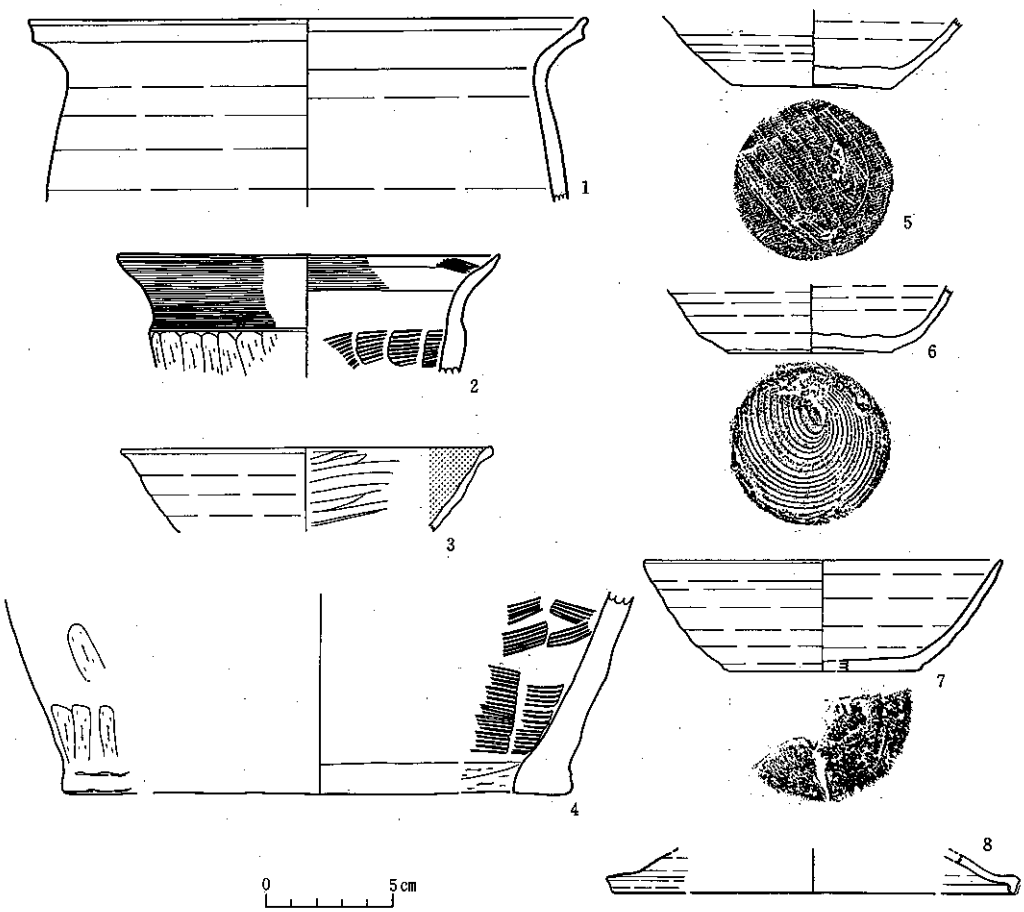
〔カマド〕全長2.5m，最大幅1.1mのカマドが東壁のほぼ中央部にとりつけてある。燃焼部は地山掘り込みの部分と白色粘土を積み上げて構築している部分からなっている。燃焼部内の幅は50cm，奥行は100cmである。燃焼部奥壁の段を境にして煙道部が掘りぬかれている。先端はピット状になっており，その底面は煙道部の底面より５cm深い。燃焼部側壁・底面と煙道部側壁は赤褐色に焼けている。

〔貯蔵穴〕南東隅に円形で直径48cm，深さ19cmのピットがある。

〔出土遺物〕住居に伴う遺物としては床面上およびカマド内出土遺物がある。

住居に伴う遺物（第８・９図）

土師器坏ーいずれも製作にロクロを使用している。底部の切り離しは回転糸切り技法による



観　察　表

番号	出土層位	種　別	調整 内面	調整 外面	底　部	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	第 2 層	土師器(甕)	ロクロ	ロクロ			22.0			B Ⅰa
2	第 3 層	土師器(甕)	刷毛目・ナデ	ナデ・ヘラケズリ			15.0			A Ⅲb
3	〃	土師器(坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ロクロ			14.7			C
4	第 1 層	土師器(甑)	刷毛目・ヘラケズリ	ヘラケズリ					17.7	
5	第1・2層	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り→手持ちヘラケズリ				6.2	Ⅱ
6	第 2 層	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り				6.4	Ⅰ
7	〃	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	4.4	14.0		7.4	Ⅱ
8	第 3 層	須恵器(蓋)	ロクロ	ロクロ			16.4			

第10図　第３号住居跡出土遺物（３）

もの（１・２）と，再調整のため不明のもの（３）とがある。両者とも体部下端から底部にかけてヘラケズリが加えられている。

土師器甕ー最大径は口縁部に位置している。口縁部は外反し，頚部に沈線状の段がつく（４）。

須恵器坏ー底部の切り離しはいずれもヘラ切り技法によるものである。８は体部下端から底部に，６・７は底部にのみ手持ちヘラケズリが加えられている。７の底部に「大」の墨書がある。

須恵器甕ー口縁部は外反し端部は上下方につまみ出されている。体部は丸味をもつて外傾し

底部は平底である（5）。第９図１～３は体部破片である。

堆積土出土遺物（第10図）

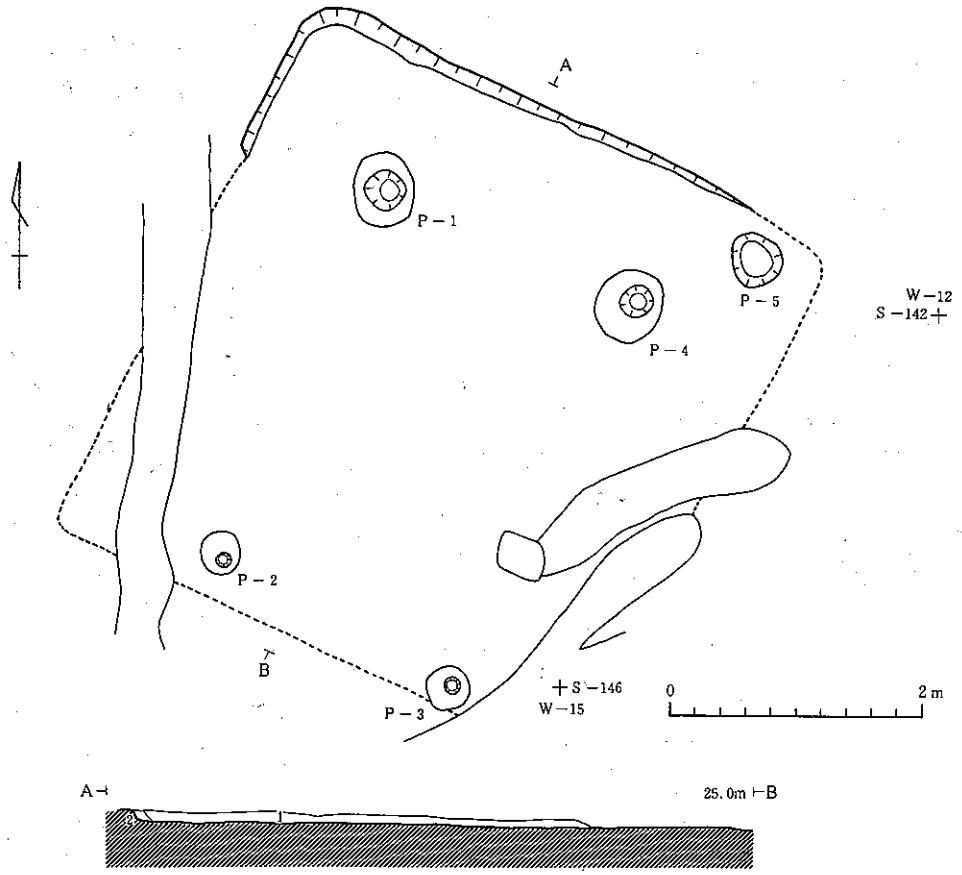
土師器坏ー底部を欠く。製作にロクロを使用している（3）。

土師器甕ー製作にロクロを使用するものと使用しないものがある。いずれも最大径は口縁部に位置している。前者は口縁部がゆるやかに外反し端部が上方につまみ出されている（1）。後者は口縁部が外反し頸部に段がつく（2）。

土師器甑ー無底式の甑である。底部は肥厚する（4）。

須恵器坏ー底部の切り離しはヘラ切り技法によるものと回転糸切り技法によるものとがある。前者は底部に手持ちヘラケズリが加えられており（5・7），後者は再調整がみられない（6）。

須恵器蓋ー口縁部破片である。口縁部は外反し端部が下方に折れ曲がる（8）。



第11図　第４号住居跡

層　位	層No.	土　色	土性	備　考
第　1　層	1	暗褐色　10YR 3/4	シルト	炭化物粒子地山粒子混入
第　2　層	2	暗褐色　10YR 3/4	シルト	地山粒子混入（①より多い）

第４号住居跡

〔確認面〕地山面で確認された。

〔重複〕第２号住居跡・溝と重複している。溝によって東側が切られており，南東隅で第２号住居の堆積土を切っている。

〔平面形〕残存している北壁（3.7m），西壁（1.2m）から方形基調と考えられる。

〔堆積土〕２層に分かれる。第１層は住居全体に堆積している。第２層は壁際に堆積している。

〔壁〕壁は立ち上りがゆるやかで，壁高は約10cmである。

〔床面〕南西部の床がやや汚れている。

〔柱穴〕床面上で５個のピットが確認された。柱痕跡のあること，配置関係からピット１・２・３・４が柱穴と考えられる。

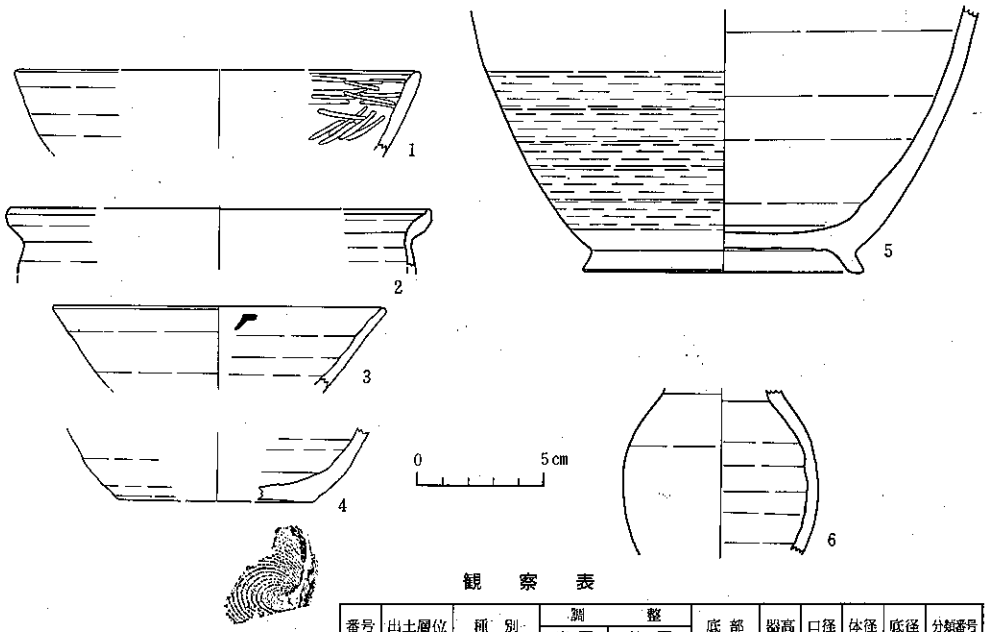
〔出土遺物〕住居に伴う遺物としては床面出土のものがある。（第12図）

土師器坏ー製作にロクロを使用している。底部を欠く（１）。

土師器甕ー製作にロクロを使用し，最大径は口縁部に位置する。口縁部は外反する（２）。

須恵器坏ー口縁部を欠く。底部は回転糸切り技法で切り離され，再調整はみられない（４）。

須恵器壺－５は体部下半と底部が残存している。長頸壺と思われる。高台が付いている。６は小形の壺である。口縁部と底部を欠く。



観　察　表

番号	出土層位	種別	調整 内面	調整 外面	底部	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ	ロクロ			15.9			C
2	床面	土師器(甕)	ロクロ	ロクロ			16.7			B Ib
3	床面	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ			13.3			
4	床面	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り				7.5	I
5	床面	須恵器(壺)	ロクロ	回転ヘラケズリ					11.0	
6	床面	須恵器(壺)	ロクロ	ロクロ				7.7		

第12図　第４号住居跡出土遺物

第５号住居跡

〔確認面〕地山面で確認した。

〔重複〕第８土壙と掘立柱建物跡に切られている。

〔平面形・規模〕正方形で，長軸5.5m，短軸5.4mである。

〔堆積土〕５層に大別できる。第１・２層は壁際をのぞいて全体に堆積する。第３層は中央部に堆積している。第４層は壁際より中央にかけて堆積し，壁際が厚い。第５層は壁際に堆積している。

〔壁〕四辺ともに残っている。西壁・北壁の一部が内側にせり出しており，壁の立ち上りは比較的急である。壁高は約50cmである。

〔床面〕全体的に硬く平坦である。西壁と南壁に沿ってやや汚れた貼床がみられるが他は地山を床としている。貼床の下に幅１m～50cm，深さ約10cmの掘り込みがある。

〔柱穴〕床面で確認されたピットは15個である。柱穴と考えられるものはない。

〔周溝〕カマドの部分をのぞきめぐっている。幅は10～20cmで床面からの深さは約10cmである。

〔カマド〕全長2.4m，最大幅１mのカマドが東壁のやや南寄りにとりつけてある。燃焼部は，白色の粘土及び暗褐色土（シルト）の積み上げによって構築されている。両側壁端には，倒立した状態の土師器甕を芯として埋めこんでいる。燃焼部内の幅は0.9m，奥行１mである。燃焼部から奥壁の段を境にして煙道部が住居外に掘りぬかれている。先端はピット状になっており，煙道部の底面より約30cm深い。煙道部の長さは約1.4mである。燃焼部側壁・底面と煙道部側壁は赤褐色に焼けている。燃焼部の中央には支脚として使用したと思われる土師器甕の底部が倒立して出土している。

〔貯蔵穴〕南東隅に楕円形で長軸70cm，短軸45cm，深さ10cmのピット（Ｐ－１）がある。

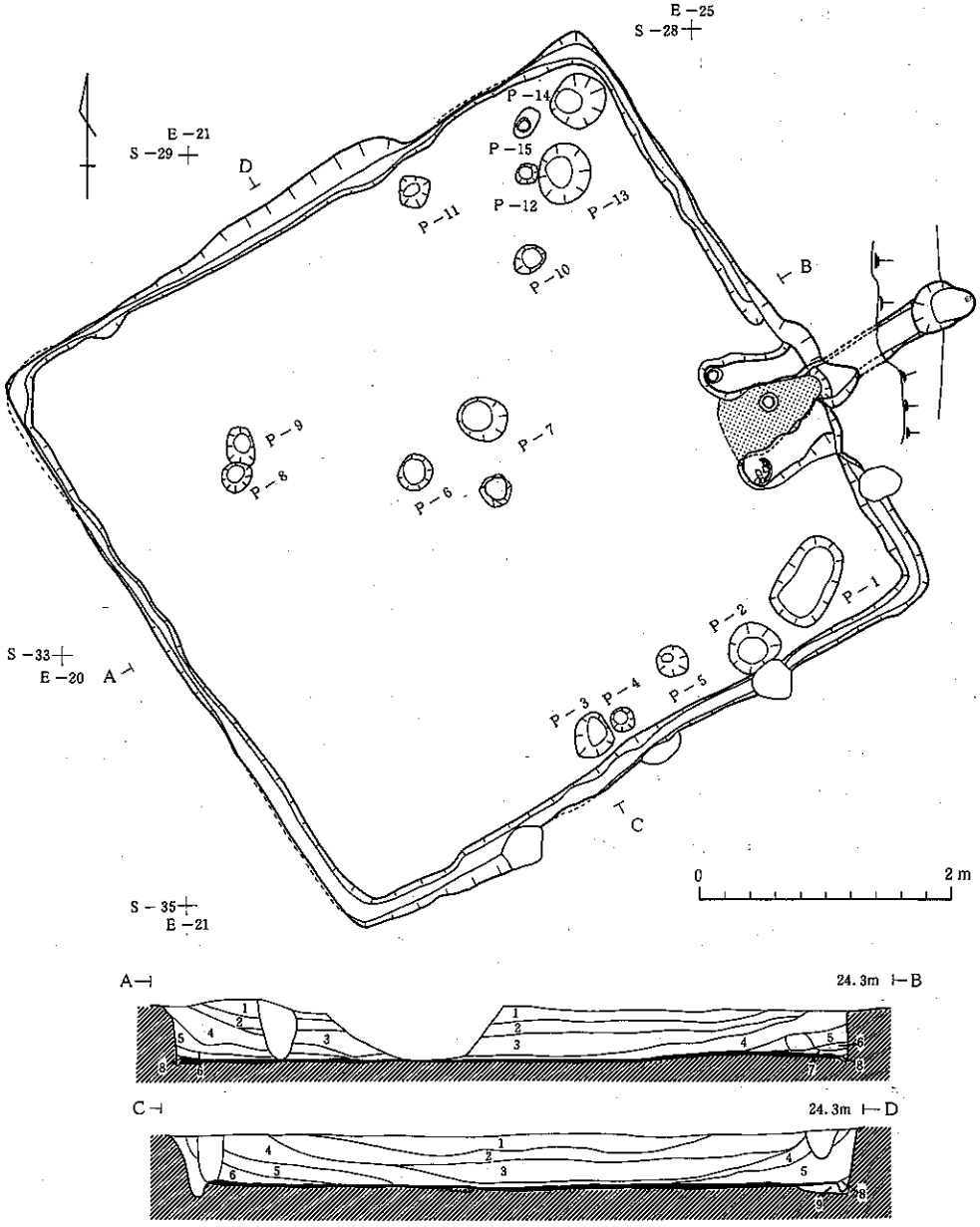
〔出土遺物〕住居に伴う遺物としては床面上，カマド内，ピット１内出土の遺物がある。

住居に伴う遺物（第14・15・16図）

土師器坏ーいずれも製作にロクロを使用している。底部の切り離しは，回転糸切り技法によるもの（３）と再調整が加えられて不明なもの（１・２・４）とがある。前者には再調整がみられない。後者には体部下端から底部にかけて（２・４）あるいは底部（１）に手持ちヘラケズリが加えられている。なお１の体部外面には判読できないが墨書がみられる。

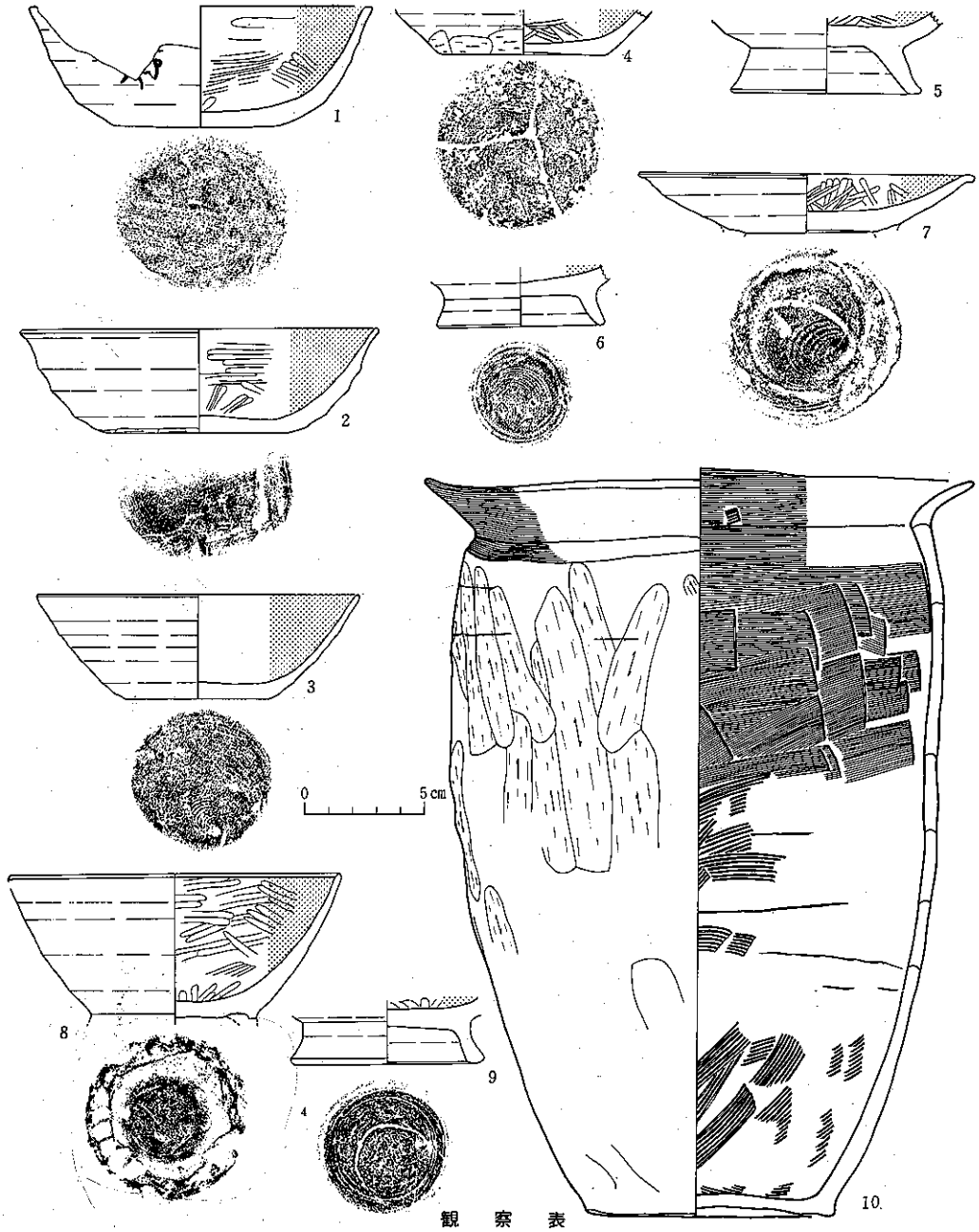
土師器高台付坏ーいずれも製作にロクロを使用している。口縁部から体部にかけ外傾するが深いもの（８）と浅いもの（７）とがある。坏底部には回転糸切り痕を残すもの（６・７・９）とヘラ切り痕を残すもの（８）がある。

土師器甕ー製作にロクロを使用していない。最大径は口縁部に位置するものと体部に位置す



層位	層No.	土　色	土性	備　考
第1層	1	黒褐色 10YR 3/2	シルト	小円レキを少量含む。しまりよい
第2層	2	暗褐色 10YR 3/3	シルト	ローム粒及び焼土粒もわずかに含む。しまりよい
第3層	3	にぶい黄褐色 10YR 7/2	ナレff	粘性なし
第4層	4	暗褐色 10YR 3/4	シルト	火山灰の小ブロック及び粒子かなり含む。ローム粒子含む
第5層	5	褐　色 10YR 4/4	シルト	微砂ローム粒子多量に含む。しまりわるい
〃	6	黒褐色 10YR 3/2	シルト	粘性あり、ローム塊、木炭含む
〃	7	褐　色 10YR 4/4	シルト	ローム粒、微砂を多量に含む。しまりわるい
周　溝	8	褐　色 10YR 4/4	シルト	ローム塊及び微砂含む。しまりよい
掘り方埋土	9			

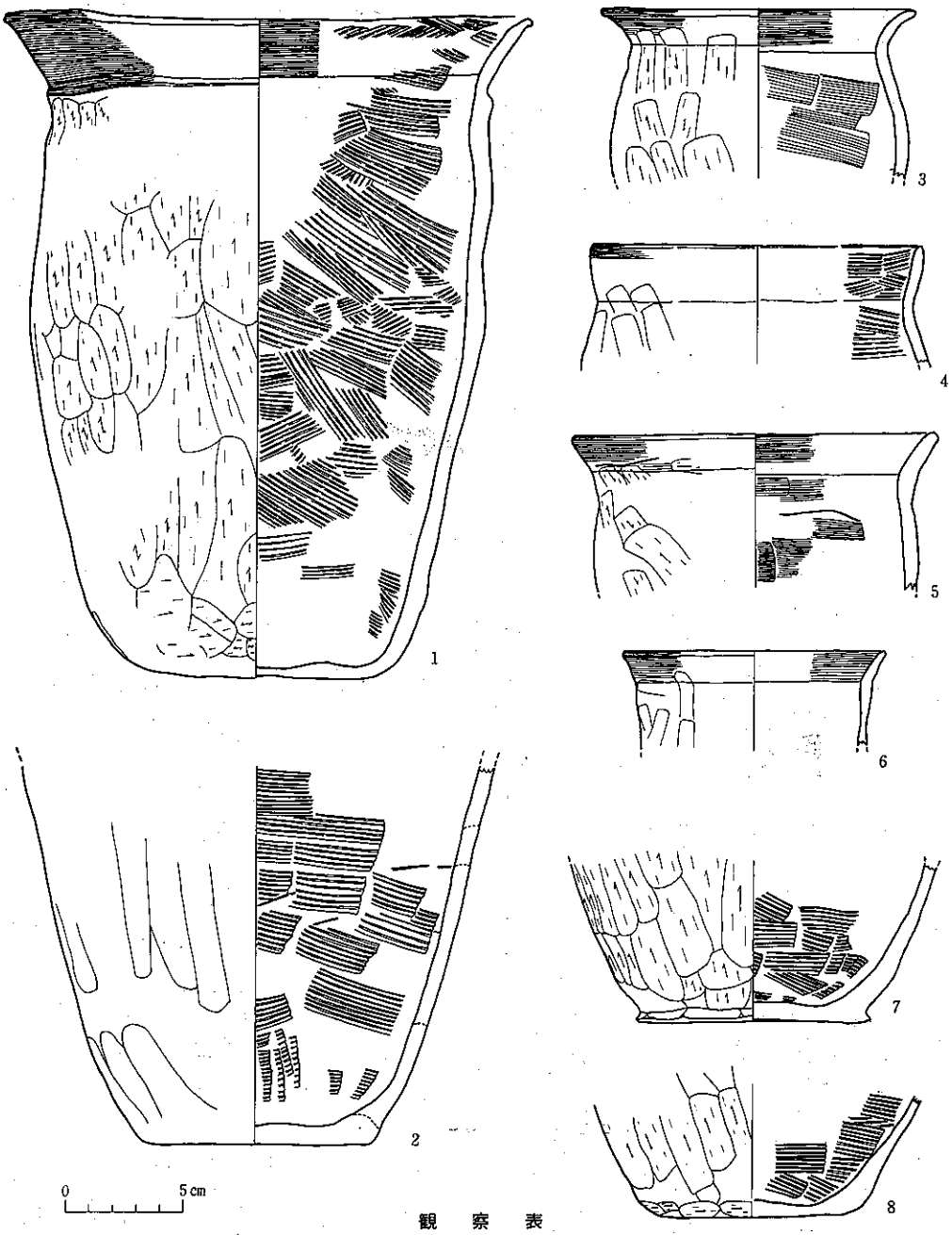
第13図　第5号住居跡



観　察　表

番号	出土層位	種別	調整 内面	調整 外面	底部	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ロクロ	手持ちヘラケズリ	5.1	14.2		7.2	C Ⅲb
2	カマド内	土師器(坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ロクロ	手持ちヘラケズリ	4.4	14.8		7.1	C Ⅲc
3	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ロクロ	回転糸切り	4.4	13.4		6.0	C Ⅰa
4	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ロクロ	手持ちヘラケズリ				6.8	C Ⅲc
5	床面	土師器(高台坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ロクロ	不明　ナデ				6.4(8.0)	Ⅲb
6	床面	土師器(高台坏)	黒色処理	ロクロ	回転糸切り				6.3(7.0)	Ⅰ
7	床面	土師器(高台坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ロクロ	回転糸切り		14.0		5.3	Ⅰ
8	床面	土師器(高台坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ロクロ	ヘラ切り		14.0		6.8	Ⅱ
9	ピット1	土師器(高台坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ロクロ	回転糸切り				7.0(8.1)	Ⅰ
10	カマド芯	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラケズリ	31.5	22.9	20.4	10.3	A Ⅲa

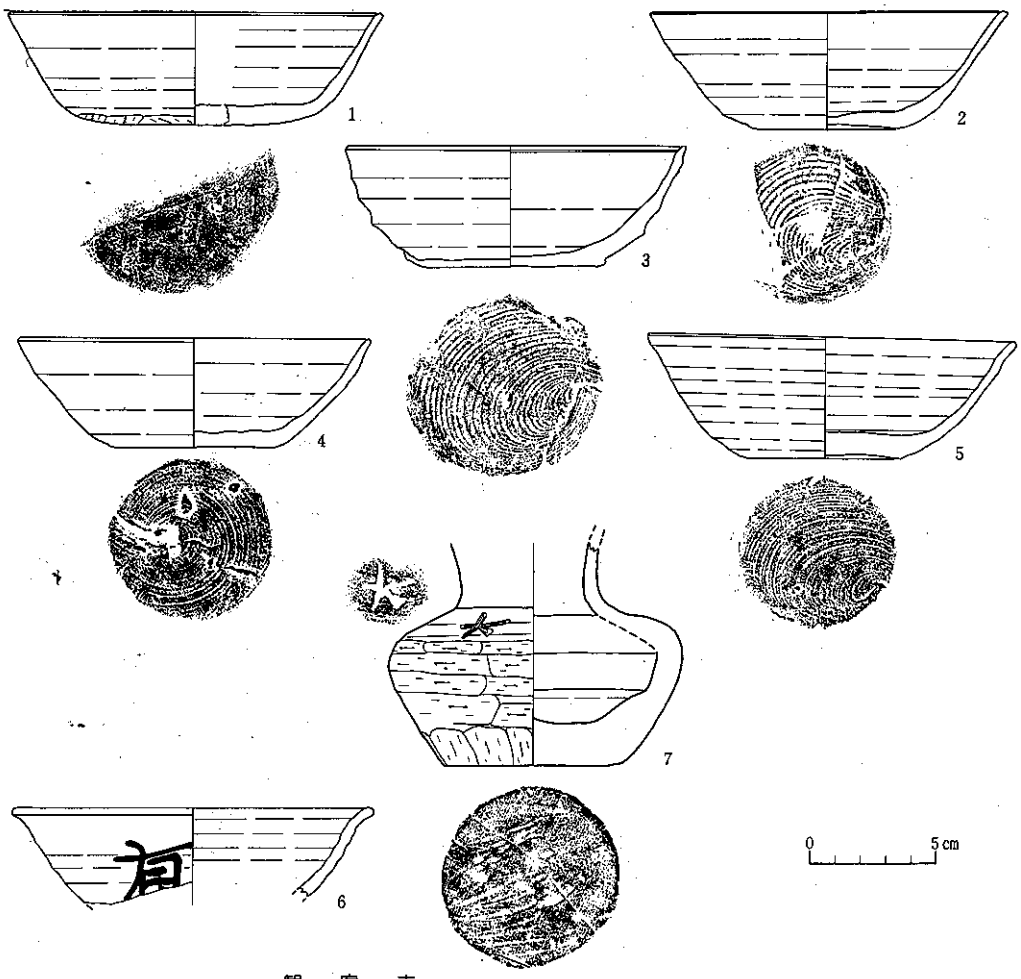
第14図　第5号住居跡出土遺物（Ⅰ）



観　察　表

番号	出土層位	種　別	調整 内面	調整 外面	底　部	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	床　面	土師器(甕)	刷毛目・ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	木葉・ナデ	28.3	22.0	19.1	9.8	A Ⅲa
2	カマド芯	土師器(甕)	刷毛目	ヘラケズリ	木葉・ヘラケズリ				9.8	
3	床　面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ			13.2	12.5		A Ⅲb
4	床　面	土師器(甕)	刷毛目	ヨコナデ・ヘラケズリ			13.9			A Ⅱb
5	カマド芯	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ			15.0			A Ⅲb
6	ピット1	土師器(甕)	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ			11.0			A Ⅲb
7	カマド支脚	土師器(甕)	刷毛目	ヘラケズリ	木葉・ヘラケズリ				9.8	
8	床　面	土師器(甕)	刷毛目	ヘラケズリ	ヘラケズリ				7.8	

第15図　第5号住居跡出土遺物（2）



観　察　表

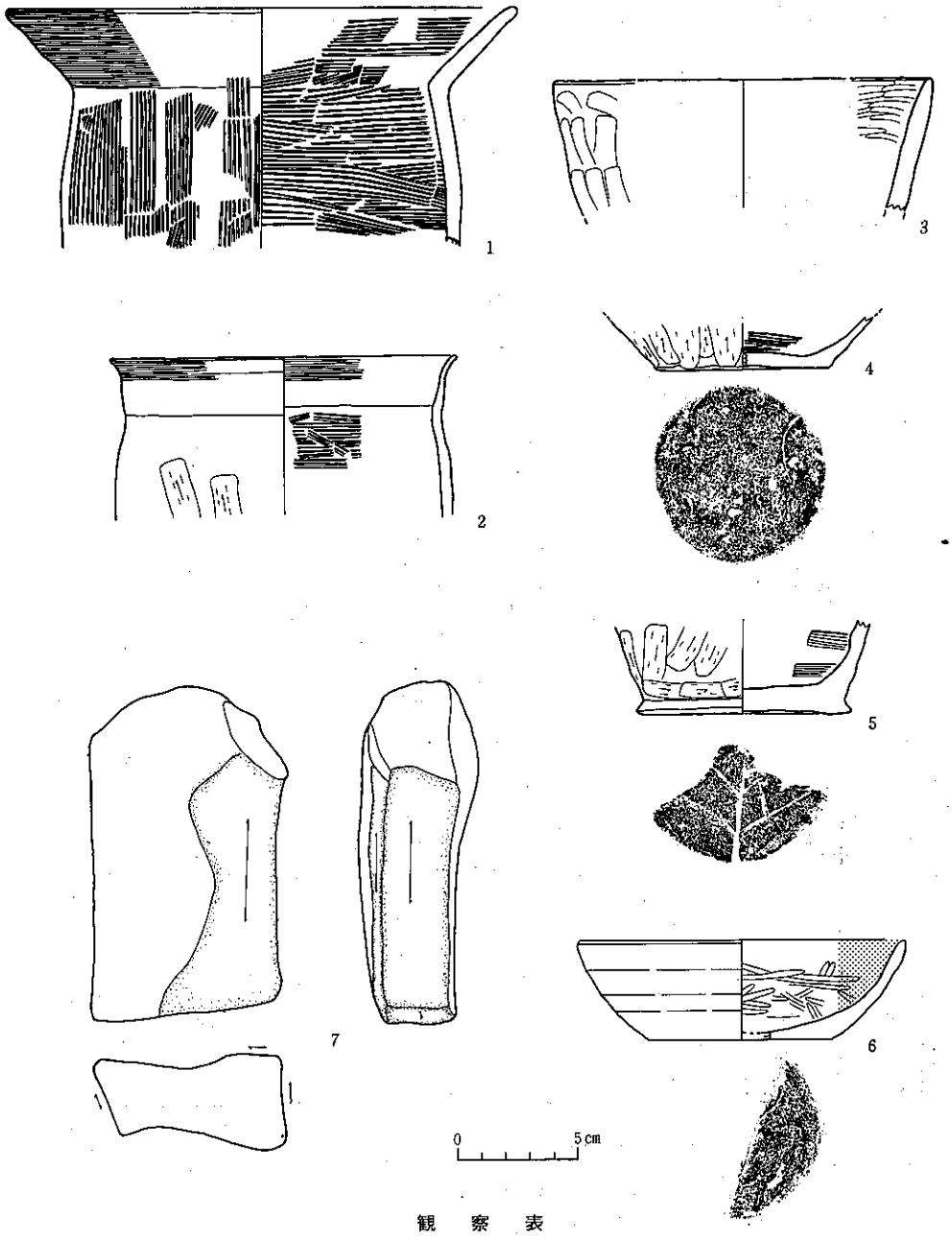
番号	出土層位	種　別	調整 内面	調整 外面	底　部	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	カマド内	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	手持ちヘラケズリ	4.5	14.6		5.0	Ⅲ
2	床　面	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.7	14.0		6.0	Ⅰ
3	床　面	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.8	13.3		7.4	Ⅰ
4	床　面	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.4	13.9		6.5	Ⅰ
5	ピット1	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	5.0	14.4		6.0	Ⅰ
6	ピット1	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ			14.2			
7	床　面	須恵器(壺)	ロクロ	ロクロ・回転ヘラケズリ	ヘラミガキ			11.6	7.0	

0.34
0.43
0.56
0.47
0.42
0.444

第16図　第５号住居跡出土遺物（３）

るものとがあるが，後者は破片から実測したものであり正確ではない。前者には大形と小形がある。口縁部は外反あるいは外傾し，体部はわずかに丸味をもつものが多い。２・７・８は体部下半から底部が残存する。

須恵器坏－底部の切り離しは，回転糸切り技法によるもの（２～５）と再調整が施されて不明なもの（１）とがある。前者には再調整はなく，後者には体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが加えられている。また，６は底部を欠くが，体部外面に「有」の墨書がみられる。



観　察　表

番号	出土層位	種　別	調整 内　面	調整 外　面	底　部	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	第 5 層	土師器(甕)	刷毛目	ヨコナデ・刷毛目			21.0	16.6		A Ⅲa
2	第 4 層	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・ヘラケズリ			14.2			A Ⅲb
3	第 4 層	土師器(甕)	ヘラミガキ	ヘラケズリ			15.6			A Ⅳ
4	第 4 層	土師器(甕)	刷毛目	ヘラケズリ	ヘラケズリ				7	
5	第 3 層	土師器(甕)	ヘラナデ	ヘラケズリ	木葉				8.8	
6	第 2 層	土師器(坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ロクロ	ヘラ切り・回転ヘラケズリ	4.2	13.4		7.5	C IId
7	床　面	砥　石								

第17図　第5号住居跡出土遺物（4）

須恵器壺－口縁部を欠く。頚部はわずかに外傾する。体部は肩が残る。外面に「大」のヘラ書きがみられる（７）。

砥石－特に整形は加えない板状の自然礫を利用している。１板面および両側縁の計３面が使用されているが，板面の磨面は部分的なものであり，主な使用は側縁であったと考えられる。

堆積土出土遺物（第17図）

土師器坏－製作にロクロを使用している。底部はヘラ切り技法で切り離され，底部に回転ヘラケズリが加えられている。

土師器甕－製作にロクロは使用していない。口頚部が屈折して外傾するもの（１・２）と，屈折しないもの（３）とがある。いずれも最大径は体部に位置する。４・５は体部下端から底部が残存している。

第６号住居跡

〔確認面〕地山面で確認された。

〔重複〕（８区－第１）土壙が住居跡の堆積土を切っている。

〔平面形〕平面形は長方形で長軸3.8m，短軸2.9mである。

〔堆積土〕堆積土は２層に分かれる。第１層は住居全体に堆積し，第２層は壁際に堆積する。

〔壁〕４辺とも残っているが削平を受けている。壁の立ち上りはゆるやかであり，壁高は10cm前後である。

〔床面〕西壁と南壁に沿って貼床がある。他は地山を床面としており，比較的軟かくほぼ平坦である。貼り床下の西壁と南壁に幅１m～50cm，深さ約10cmの掘り込みがある。

〔柱穴〕床面から５個のピットが確認された。配置関係・深さなどからピット３・４・５が住居跡に伴う柱穴と考えられる。

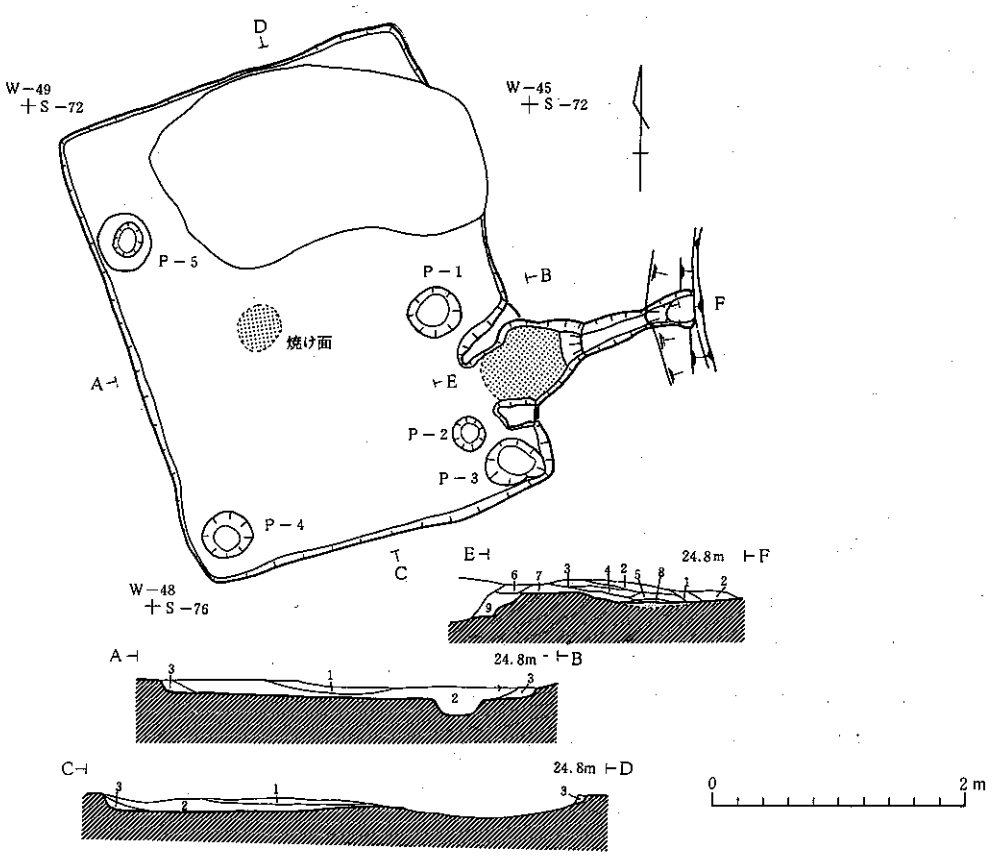
〔カマド〕全長2.8m，最大幅0.9mのカマドが西壁中央にとりつけられている。燃焼部は地山掘り込みの部分とにぶい黄橙色土（シルト）・褐色土（シルト）を互層に積み上げて構築している部分からなっている。燃焼部内の幅は0.5m，奥行は1.5mである。燃焼部奥壁のゆるやかな段を境にして住居外に煙道部がのびている。煙道部の先端はピット状になっており，煙道部の底面より約20cm深い。煙道部の長さは1.4mである。燃焼部側壁・底面と煙道部側壁が赤褐色に焼けている。

〔焼け面〕焼け面は直径65cmであり，住居中央南寄りにある。

〔出土遺物〕住居に伴う遺物としては，床面上・カマド内出土のものがある。（第19図）

住居に伴う遺物

土師器甕－製作にロクロを使用している。口縁部は外傾し，端部は丸くおさまる（１）。



層　位	層No.	土　色	土　性	備　考
第1層	1	黒褐色　10YR3/3	シルト	地山ロームの粒子含む(30%)
〃	2	黒褐色　10YR3/3	シルト	地山ロームの粒子含む(15%)
第2層	3	暗褐色　10YR3/3	シルト	地山ロームのブロック(30%)

カマド内堆積土

No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色　10YR3/3	シルト	白色粘土の粒・ブロック20%含む、ぼそぼそ
2	褐色　7.5YR4/3	シルト	白色粘土の粒10%含む、粘性あり
3	暗褐色　7.5YR3/4	シルト	白色粘土粒3%含む
4	暗褐色　7.5YR3/4	シルト	5YR3/4の焼土ブロック15%含む、木炭わずかに含む
5	にぶい黄橙　10YR7/2	シルト	白色粘土
6	黒褐色　10YR3/2	シルト	ロームブロック、焼土わずかに含む
7	黒褐色　10YR3/2	シルト	ロームブロック、焼土ブロック20%含む
8	褐色　7.5YR4/4	シルト	焼土10%含む
9	暗褐色　10YR3/3	シルト	ロームブロック30%、焼土、木炭10%含む、ぼそぼそ

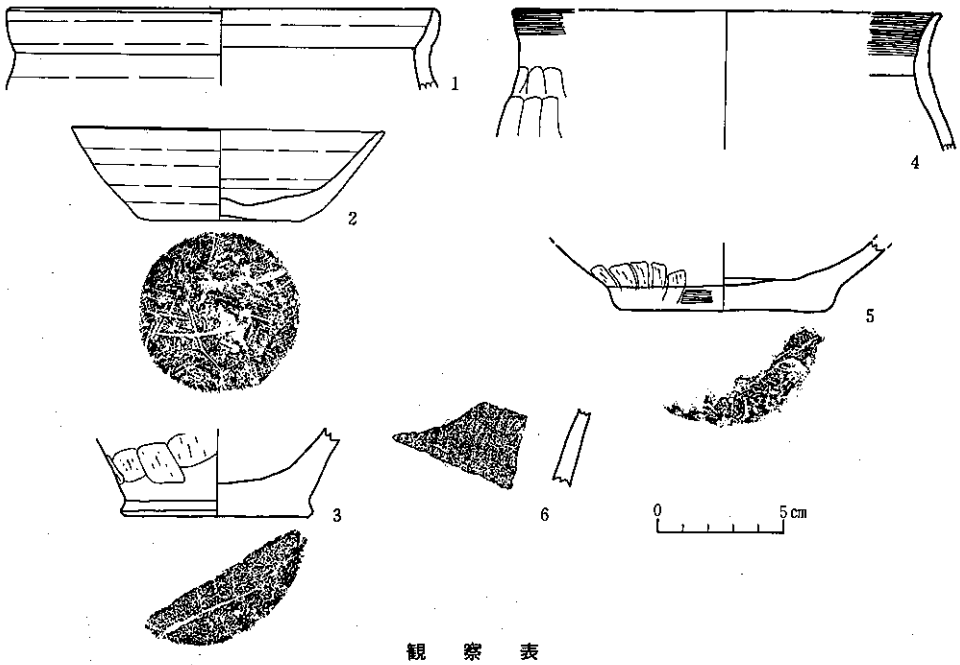
第18図　第6号住居跡

須恵器坏ー底部はヘラ切り技法によって切り離され，手持ちヘラケズリが加えられている（2）。

堆積土出土遺物

土師器甕ー製作にロクロを使用するもの（1）と，しないもの（4）とがある。いずれも体部に最大径をもつ。3・5は底部破片である。

須恵器甕ー体部破片である（6）。



観　察　表

番号	出土層位	種　別	調　整		底　部	器高	口径	体径	底部	分類番号
			内　面	外　面						
1	カマド内	土師器(甕)	ロクロ	ロクロ			17			BⅡa
2	床　面	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	3.8	12.2		6.0	Ⅱ
3	第２層	土師器(甕)	不　明	ヘラケズリ	木　葉				7.3	
4	第１層	土師器(甕)	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ			16.8			AⅡb
5	第１層	土師器(甕)	不　明	ナデ・ヘラケズリ	ヘラケズリ				8.2	
6	カ マ ド	須恵器(甕)	不　明	平行タタキ目						

第19図　第６号住居跡出土遺物

第７号住居跡

〔確認面〕地山面で検出された。

〔平面形〕住居のほとんどが削平されており，残存する南壁（1.8m）と西壁（2m）から平面形は方形と推定される。

〔堆積土〕壁際に３層認められる。

〔壁〕南壁と西壁の１部が残っており，壁の立ち上りはややゆるやかである。壁高は約30cmである。

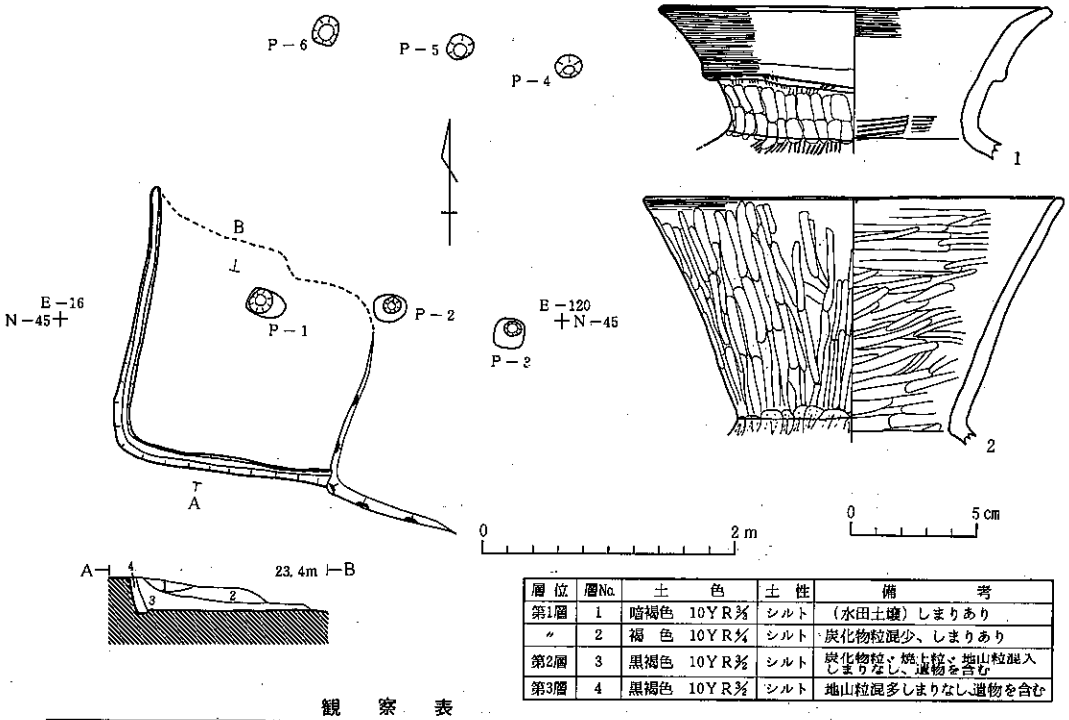
〔床面〕地山を床面としている。

〔柱穴〕残存する床より検出されたピット１と配置関係で対をなすと思われる６個のピットが住居跡に伴う柱穴と考えられる。

〔周溝〕残存する壁の部分にめぐる。幅10cmで床面よりの深さが２cmである。

〔出土遺物〕本住居跡に伴う遺物は床面から土師器が出土している。（第20図）

土師器甕ー口縁部は外反している。外面に段がつき複合口縁である。体部以下を欠く（１）。



層位	層No.	土色	土性	備考
第1層	1	暗褐色 10YR3/4	シルト	（水田土壌）しまりあり
〃	2	褐色 10YR4/4	シルト	炭化物粒混少、しまりあり
第2層	3	黒褐色 10YR3/2	シルト	炭化物粒・焼土粒・地山粒混入 しまりなし、遺物を含む
第3層	4	黒褐色 10YR3/2	シルト	地山粒混多しまりなし、遺物を含む

観　察　表

番号	出土層位	種別	調整 内面	調整 外面	底部	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目・ヘラミガキ			15.6			AⅠ
2	床面	土師器(壺)	ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ			16.6			

第20図　第７号住居跡

土師器壺一口頸部は長く外傾している。体部以下を欠く（２）。

第８号住居跡

〔確認面〕第Ⅱ層中で確認された。

〔平面形・規模〕南西部が削平されており，残存する東壁（2.4m）・南壁（1.2m）の状況から平面形は方形と推定される。

〔堆積土〕削平のため残っているのは１層だけである。

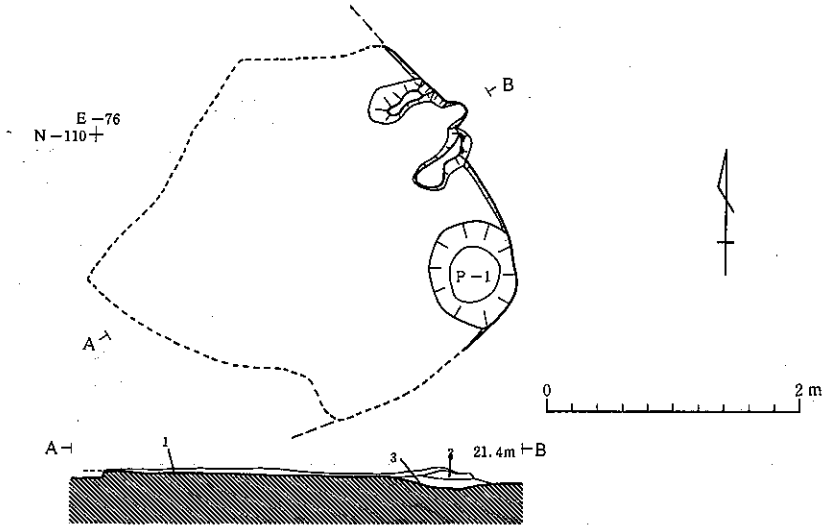
〔壁〕東壁と南壁の一部が残っている。壁高は２cmである。

〔床〕２層を床としており比較的軟かい。

〔カマド〕削平のため煙道部が不明である残存するカマドは長さ80cm，幅90cmであり，東壁壁にとりつけてある。側壁は灰黄褐色土（シルト）を積み上げて構築している。燃焼部幅は60cm，奥行70cmである。煙道部は，ゆるやかな傾斜で立ち上がり，現存長は約10cmである。

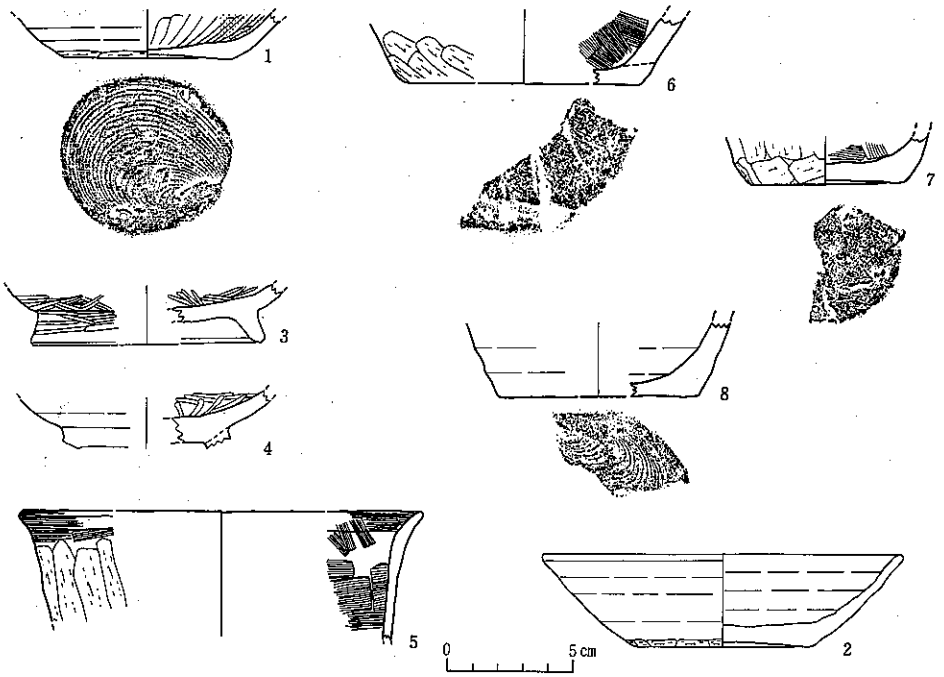
〔貯蔵穴〕南東隅に楕円形で長軸90cm，短軸70cm，深さ20cmのピットがある。

〔出土遺物〕本住居跡に伴なう遺物はカマド・床面から土師器・須恵器が出土している。



第21図　第８号住居跡

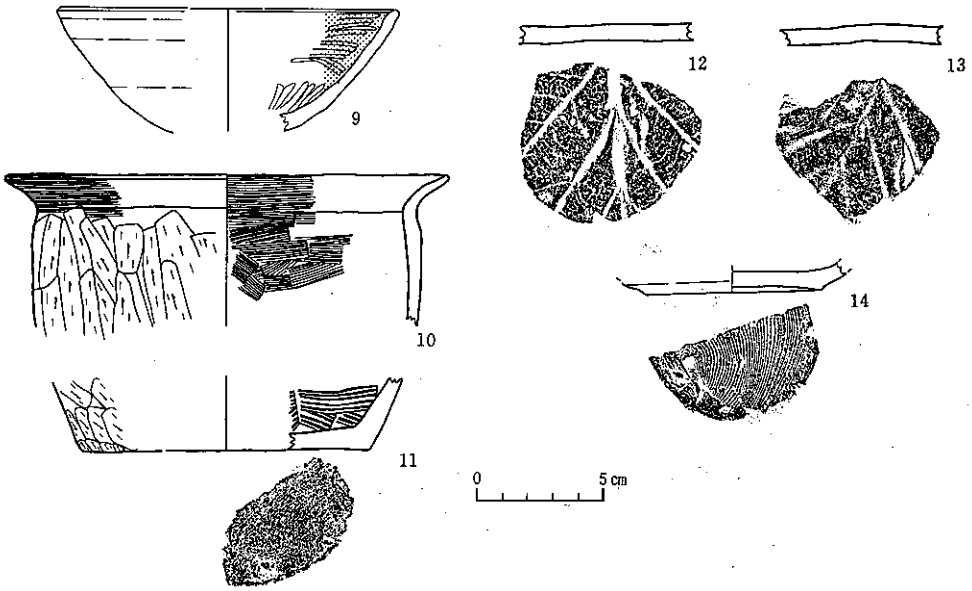
層　位	層No.	土　色	土 性	備　考
第 1 層	1	黒褐色 7.5YR3/2	シルト	ほぼほぞ焼土粒子わずか含む
カマド内堆積土	2	暗赤褐色 5YR3/4	シルト	焼土ブロック、カマド袖の崩壊土か
〃	3	黒褐色 5YR3/2	シルト	木炭多く含む、焼土粒子多く含む



観　察　表

番号	出土層位	種　別	調　整		底　部	器高	口径	体径	底径	分類番号
			内　面	外　面						
1	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ロクロ	回転糸切り				6.6	CⅠa
2	床面	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	手持ちヘラケズリ	33.7	14.4		7.0	Ⅲ
3	カマド内	土師器(高台坏)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ					Ⅲa
4	カマド内	土師器(高台坏)	ヘラミガキ	ロクロ	回転糸切り					Ⅰ
5	カマド内	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラナデ	ナデ・ヘラケズリ			16.0			AⅢb
6	カマド内	土師器(甕)	ナデ	ヘラケズリ					9.4	
7	カマド内	土師器(甕)	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ				6.0	
8	第１層	赤焼土器(甕)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り					

第22図　第８号住居跡出土遺物（Ⅰ）



観　察　表

番号	出土層位	種　別	調整 内面	調整 外面	底　部	器高	口径	体径	底部	分類番号
9	第1層	土師器(坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ロクロ			13.5			C
10	第1層	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ			17.5	15.5		A Ⅲb
11	第1層	土師器(甕)	刷毛目	ヘラケズリ	ヘラケズリ				11.4	
12		土師器(甕)			木葉					
13		土師器(甕)			木葉					
14		須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り					Ⅰ

第23図　第８号住居跡出土遺物（２）

住居に伴う遺物（第22図）

土師器坏ー底部は回転糸切り技法で切り離され，体部下端にのみ手持ちヘラケズリが加えられてられている。

土師器高台付坏ー製作にロクロを使用している。坏底部は回転糸切り技法で切り離されているもの（４）と，不明のもの（３）とがある。３は内外面ともヘラミガキが施されている。

土師器甕ー５は口縁部がわずかに外反し体部は直線的である。最大径は体部に位置する。６・７は底部破片である。

須恵器坏ー底部はヘラ切り技法によって切り離され，体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが加えられている（２）。

堆積土出土遺物（第22図・第23図）

土師器甕ー５は口縁部が外反し体部は直立する。最大径は口縁部にある。６・７は底部破片である。

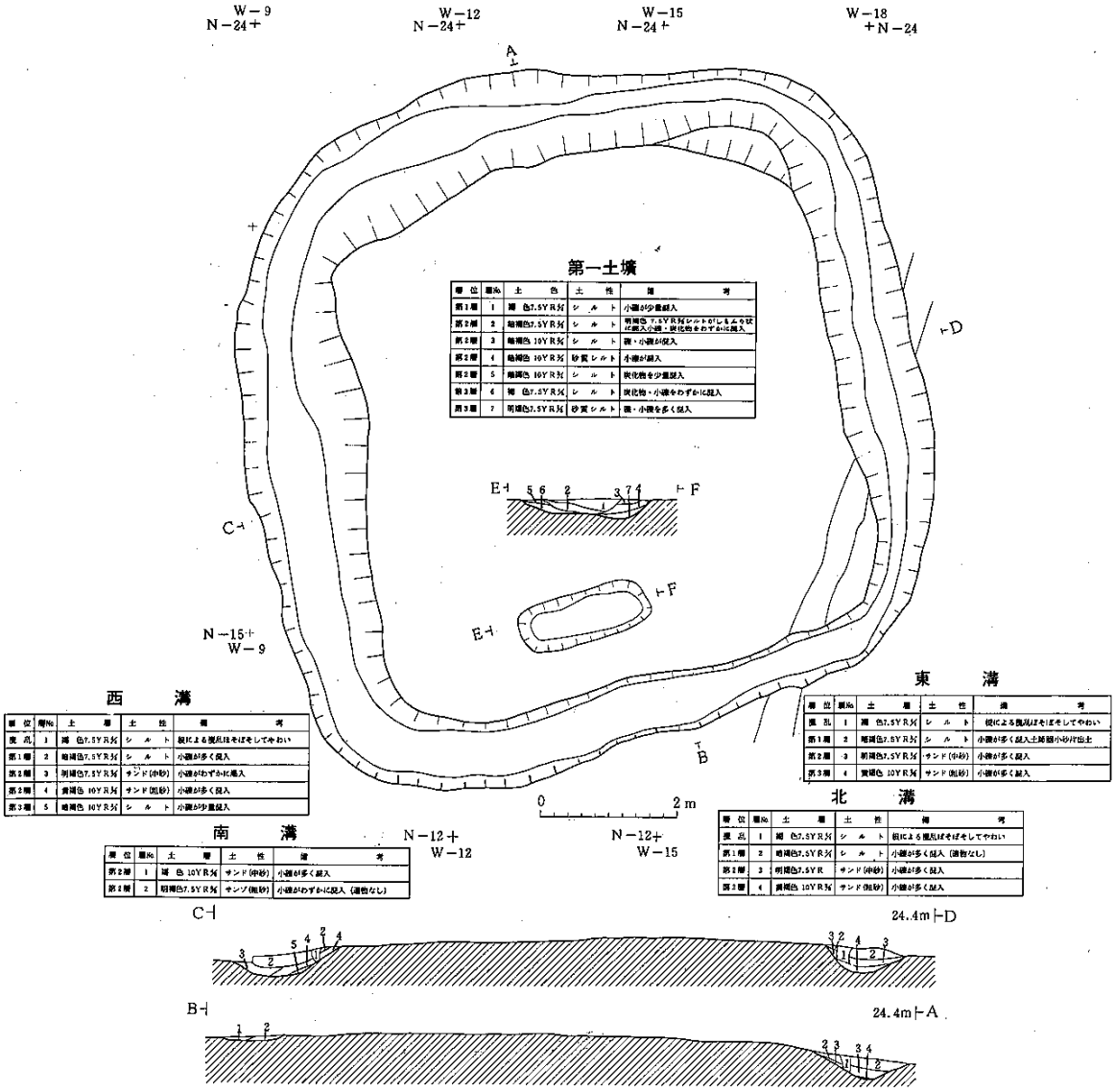
赤焼土器甕ー底部破片である。底部は回転糸切り痕を残し、体部は内外面ともロクロ調整されている（８）。

（2）方形周溝

方形周溝が発見されたのは，平坦面より緩斜面に移行する部分である。

〔確認面〕地山面で確認した。

〔平面形・規模〕溝が四方にめぐり，各辺の隅は丸味がみられる。中央部がやや張り出す。長軸10.2m，短軸9.9mである。各辺の長さは北辺９m，東辺8.5m，南辺9.5m，西辺8.5mである。溝幅は北辺1.3m，東辺1.2m，南辺0.9m，西辺1.7mである。溝の深さは東・北・西で30～50cm，南で10cmである。溝の幅と深さは各辺によっていくぶん違いがある。



第24図　方形周溝

〔溝の堆積土〕３層に大別される。

〔台状部〕長軸８m，短軸７mで南から北へゆるやかに傾斜している。台状部に積土は確認できなかった。

〔土壙〕台状部の南側に隅丸長方形の土壙がある。規模は長軸２m，短軸70cm，深さ35cmである。土壙内の堆積土は３層に分かれるが，人為的なものかどうか不明である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

（３）掘立柱建物跡

掘立柱跡は２区，５区，11区，７区，８区，９区の６地点で確認されている。これらはすべて地山面で検出した。この内で，柱の組合せの考えられる掘立柱建物跡は，９区で１棟（９区－１号掘立柱建物跡）・７区で２棟（７区－１号掘立柱建物跡・２号掘立柱建物跡）の３棟である。各建物の間面・間尺は次のようになる。

９区－１号掘立柱建物跡は，南側に庇のつく桁行３間，梁間２間の南北に長い建物である。桁行は4.3m，梁間3.1mである。柱間寸法は，桁行1.49m，梁間は1.5m～1.8mと少し異なる。

７区－１号掘立柱建物跡は，北側に庇のつく桁行２間，梁間２間の南北に長い建物である。桁行は4.9m，梁間4.5mである。柱間寸法は，桁行が2.2m～2.5m，梁間が2.1m～2.2mである。

７区－２号掘立柱建物跡は，桁行２間，梁間２間の東西に長い建物である。桁行は４m，梁間は3.8～3.9mである。柱間寸法は，桁行1.7～2.2m，梁間は1.85m～2.5mである。

いずれも柱間寸法は一定でない。また遺物は出土していない。

（４）焼土遺構

焼土遺構は５区で２基検出されている。確認面はいずれも地山面である。

第１焼土遺構

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形で，長軸120cm，短軸70cmである。

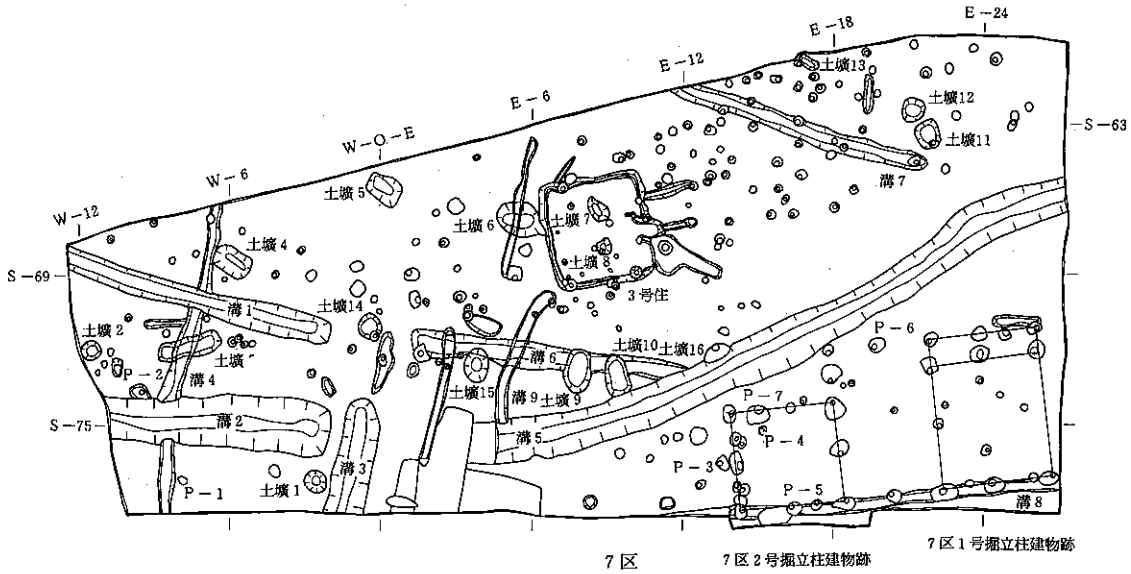
〔底面・壁〕底面は平担であるが中央より南側が深く，北側が１段高となって浅くなっている。壁は底面よりゆるやかに立ち上る。

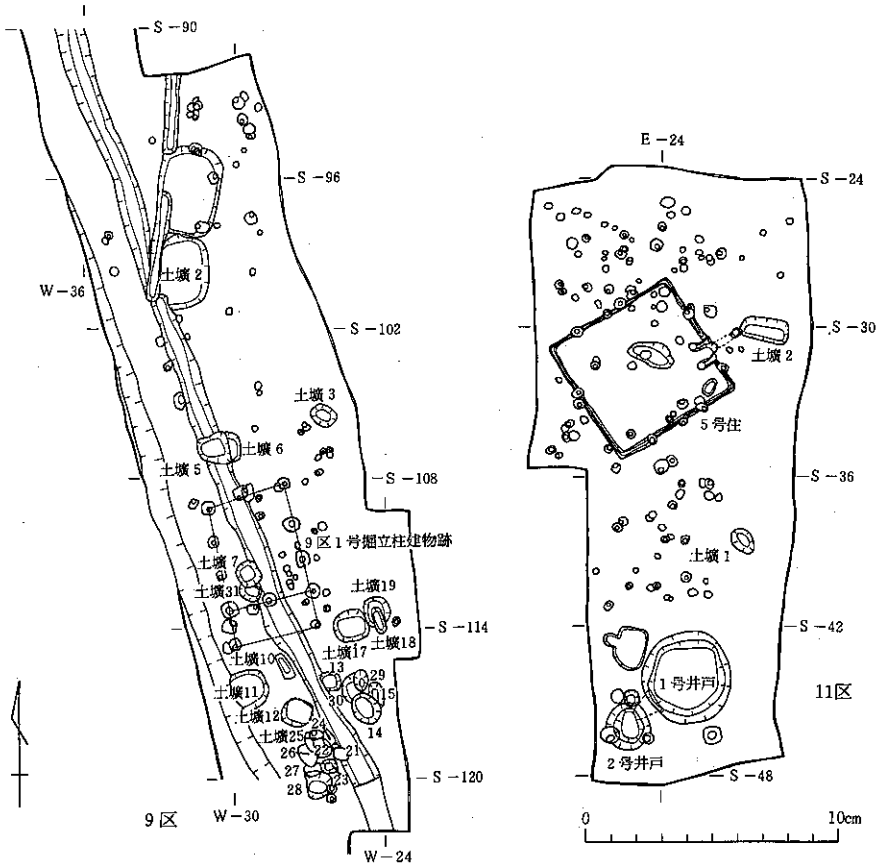
〔使用痕跡〕底面と側壁が火熱を受けており，特に南側の深い部分の側壁が焼けている。北側の浅い部分は，立ち上りの側壁に焼け面がみられる。

〔堆積土〕９層に分かれ，第４・５層は多量の炭化物や焼土を含む層である。

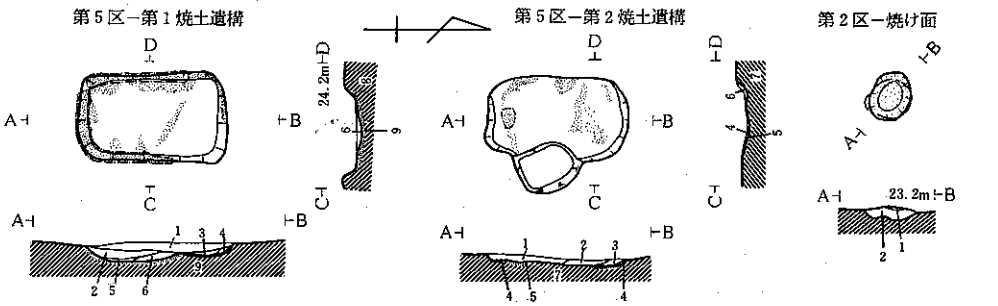
〔遺物〕遺物は出土していない。

第２焼土遺構





第25図　第7・9・11区遺構配置図



第１焼土遺構

層No	土色	土性	備考
1	褐色7.5YR5/4	シルト	明褐色7.5YR5/6シルトのブロックがしもふり状に，また炭化物少量混入
2	暗褐色10R 5/4	シルト	明褐色7.5YR5/6シルトのつぶつぶがしもふり状に，また炭化物小塊が混入
3	暗褐色7.5YR5/4	シルト	炭化物が多く混入
4	極暗赤褐色5YR5/4	シルト	炭化物・明赤褐色2.5YR5/6シルトの焼土粒が多量に混入
5	暗赤褐色5YR5/6	シルト	炭化物が多量に，明赤褐色2.5YR5/6シルトの焼土粒がわずかに混入
6	黒色7.5YR5/1	サンディシルト	小礫混入
7	黒褐色10YR5/2	シルト	炭化物，焼土がしもふり状に混入
8	赤褐色2.5YR5/6	シルト	
9	明褐色7.5YR5/6	サンディシルト	礫，小礫が多量に混入

第２焼土遺構

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色7.5YR5/6	シルト	明褐色7.5YR5/6シルトのつぶつぶがしもふり状に，また炭化物が少量混入
2	褐色7.5YR5/4	シルト	明褐色7.5YR5/6シルトのブロックと炭化物がわずかに混入
3	褐色7.5YR5/4	シルト	明褐色7.5YR5/6シルトのブロックが多くしもふり状に混入
4	黒色7.5YR5/1	シルト	
5	赤褐色2.5YR5/6	シルト	
6	黒褐色7.5YR5/1	シルト	焼土，炭化物がしもふり状に混入
7	明褐色7.5YR5/6	クレイシルト	

焼　面

層No	土色	土性	備考
1	明石褐色5YR5/6	シルト	焼土
2	極暗褐色7.5YR3/3	シルト	炭化物，焼土物松混入

第26図　焼土遺構・焼け面

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形で長軸110cm，短軸65cmである。

〔底面・壁〕底面は平担で，壁はゆるやかに立ち上る。

〔使用痕跡〕底面と側壁が部分的に火熱を受けている。

〔堆積土〕７層に分かれ，第６層に炭化物が多く混る。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

（５）焼け面（第２区－１）

焼け面は第２区で検出されている。確認面は地山面である。

〔平面形・規模〕平面形は円形で長軸40cm，短軸35cmである。

〔底面・壁〕底面は丸味をもち，壁はゆるやかに立ち上る。

〔使用痕跡〕堆積土上面が火を受けた焼け面である。

〔堆積土〕堆積土は２層あり，２層に木炭・焼土を含む。

〔遺物〕遺物は出土していない。

（６）土　　壙

第２区ー土壙１

〔確認面〕地山面で確認された。

〔平面形・規模〕平面形は長方形で長軸1.6m，短軸70cmである。

〔堆積土〕堆積土は１層だけである。

〔出土遺物〕（第30図）

土師器蓋ー口縁部は丸味をもち，端部がわずかに下方に折れ曲がる。天井部を欠く（１）。

第２区ー土壙３

〔確認面〕地山面で確認された。

〔平面形・規模〕平面形は長方形で長軸2.4m，短軸90cmである。

〔床面・壁〕底面は平坦でゆるやかに立ち上る。深さは10cmである。

〔堆積土〕堆積土は１層である。

〔出土遺物〕（第30図）

青磁椀一体部から底部にかけての破片である。高台部は断面四角形で高台部端面および内面を除いて釉が施されている。釉は青味を帯びた緑色を呈する。底部の器厚は体部下半のそれに比して厚い。体部内面，内底見込みはヘラ状の工具によって文様が描かれているが，その全容は明らかでない（4）。現在，県内にその類例は少い。太宰府出土の龍泉窯青磁椀Ｉ類（横田，森田，1978）に近似するものがあり，その年代については12Ｃ～14Ｃ中葉と考えたい。

注1

第２区ー土壙５

〔確認面〕地山面で検出された。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形で，長軸78cm，短軸76cmである。

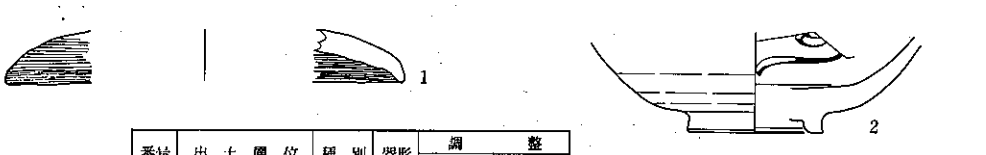
〔堆積土〕６層に細別される。６層は底面の上に約２cmの厚さに堆積している。土器の周囲の１層～５層は水平な堆積状況を示している。

〔底面・壁〕底面は，ほぼ平坦である。壁は底面よりゆるやかに立ち上り，底面より７cmのところで段がつき，さらにゆるやかに立に上る。壁高は14cm～16cmである。

〔出土状況〕土器は土壙のほぼ中央にあり，斜めになっているが，底部が底面についており上方に口縁部がみられる。口縁部上半はほとんど失なわれていた。

〔出土遺物〕土壙に伴なう遺物は，弥生土器の壺である。（第29図）

壺ー体部中央に最大径をもち，頸部でせまくなり，口縁部にむかって広がっていく。底部は平底である。また，口縁部と体部に撚糸文，口縁部に原体の結束部での刺突がみられ，頸部と体部下端には磨消しがある。



番号	出土層位	種別	器形	調整	
				内面	外面
1	2区1号土壙1層	土師器	蓋	ヨコナデ	ヨコナデ
2	2区3号土壙底面	青磁	椀		

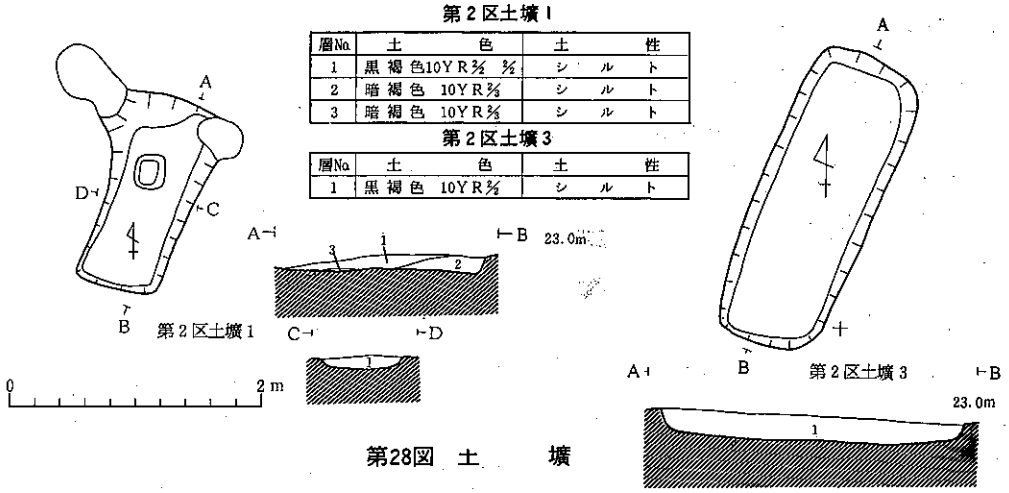
第27図　土壙出土遺物

第２区土壙１

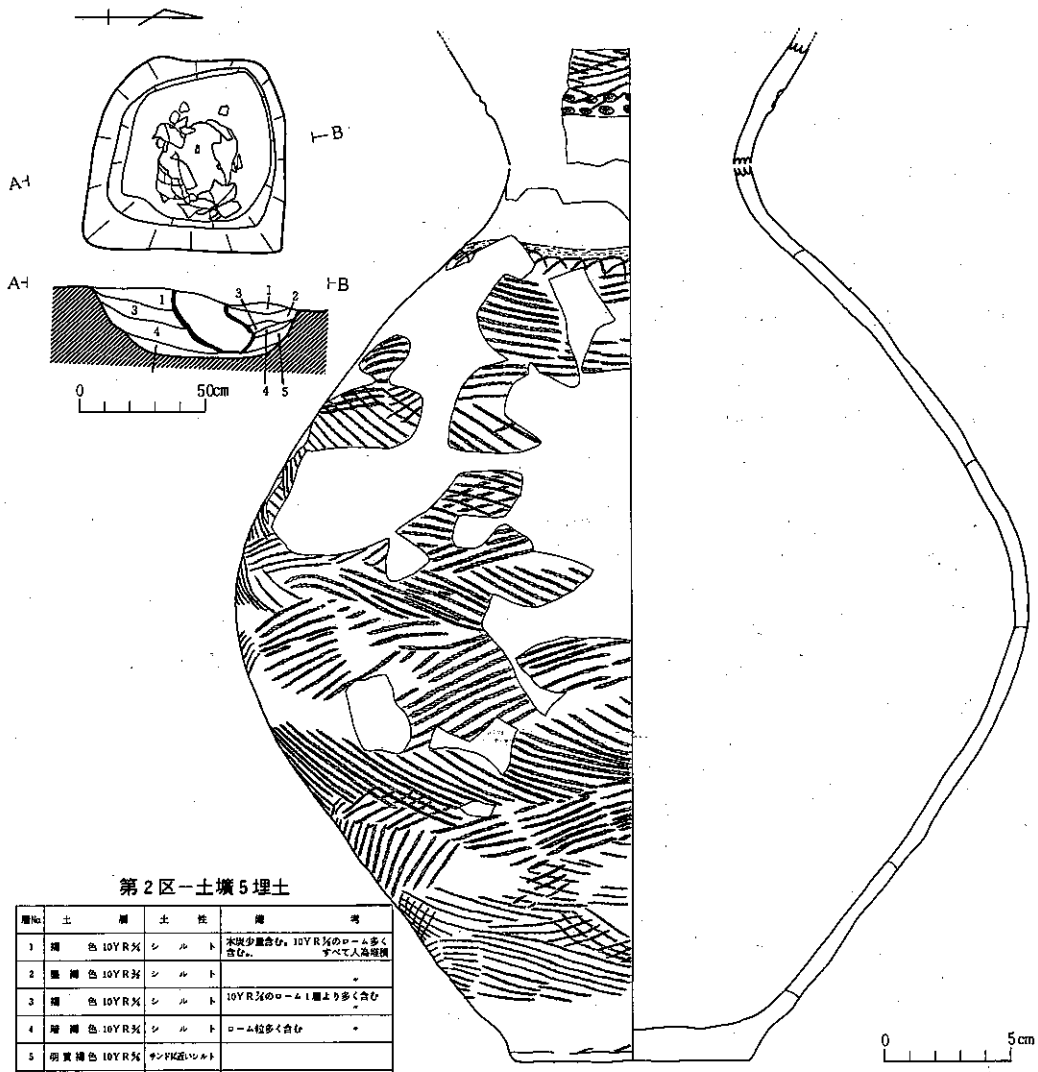
層No.	土　　色	土　　性
1	黒 褐 色10YR3/2　3/2	シ　ル　ト
2	暗 褐 色　10YR3/3	シ　ル　ト
3	暗 褐 色　10YR3/3	シ　ル　ト

第２区土壙３

層No.	土　　色	土　　性
1	黒 褐 色　10YR3/2	シ　ル　ト



第28図　土　　壙



第２区ー土壙５埋土

層No.	土　　層	土　　性	備　　考
1	褐　　色 10YR4/4	シ　ル　ト	木炭少量含む。10YR3/4のローム多く含む。すべて人為堆積
2	暗 褐 色 10YR3/4	シ　ル　ト	〃
3	褐　　色 10YR4/4	シ　ル　ト	10YR3/4のローム1層より多く含む 〃
4	暗 褐 色 10YR3/4	シ　ル　ト	ローム粒多く含む 〃
5	明 黄 褐 色 10YR6/6	サンド気味シルト	
6	暗 褐 色 10YR3/4	シ　ル　ト	木炭少し含む。6層上面に土師 〃

第29図　第２区ー土壙５

第５区－土壙５

〔確認面〕地山面で確認された。

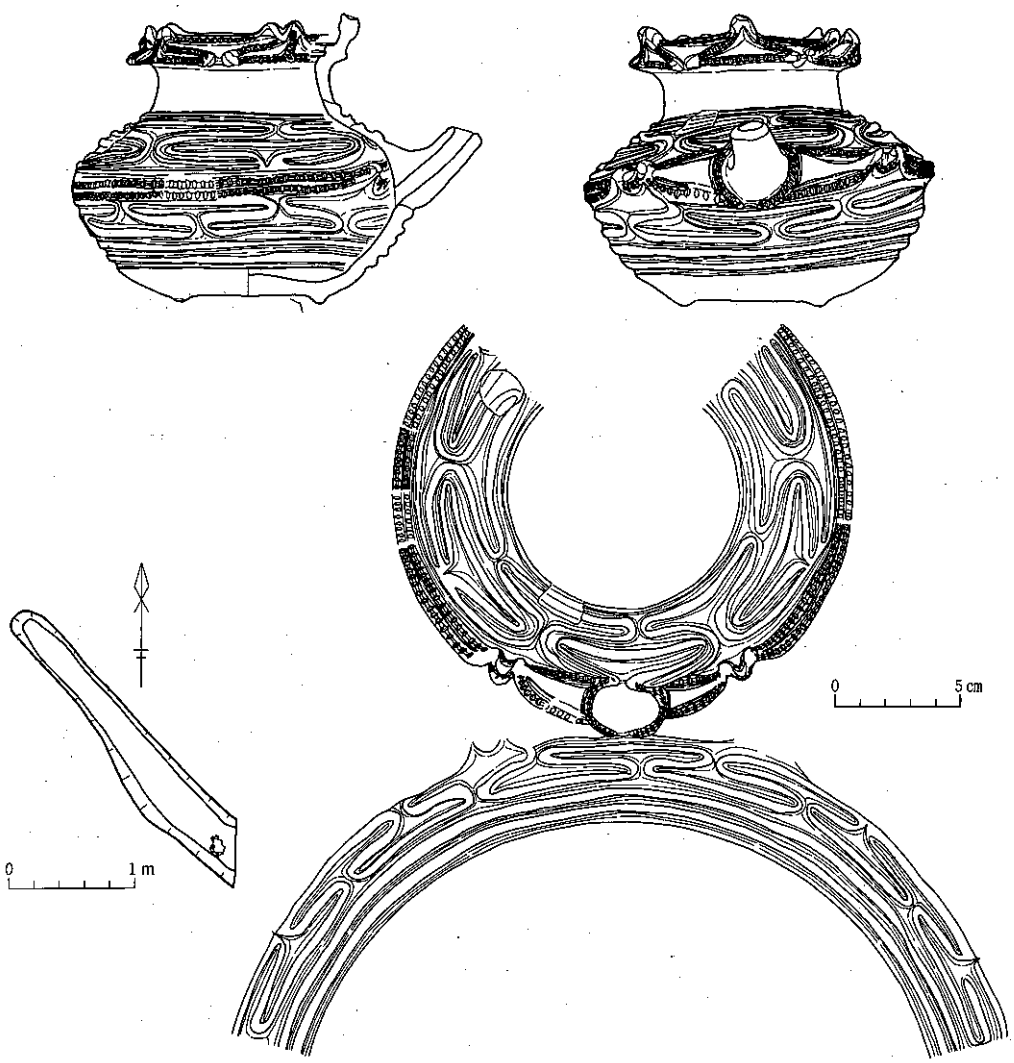
〔平面形・規模〕南東側が削平されて不明である。現存長2.6m，幅0.5mである。

〔底面・壁〕底面は平担で幅約25cmである。壁は底面より急に立ち上り，底面から20cmのところでわずかに開きぎみに立ち上る。深さは45cmである。

〔出土遺物〕土壙に伴なう遺物は縄文土器（注口土器）で土壙の底面近くで出土している。

注口土器（第30図）

肩部が張り出し，胴部からせまくなって底部となる壺形土器に直立した口縁部のつくものである。底部は平底で４つの小突起がある。肩部に注口が付いている。肩部と胴部には点付によ



第30図　第５区－土壙５

るエ字状文がみられる。口縁端には，１つの小突起と４つの山形突起をもつ王冠状の突起がある。肩部には注口をはさんで２つの山形突起と刻目のある隆帯がめぐる。

第７区ー土壙８

〔確認面〕第３号住居跡の堆積土上面で確認された。

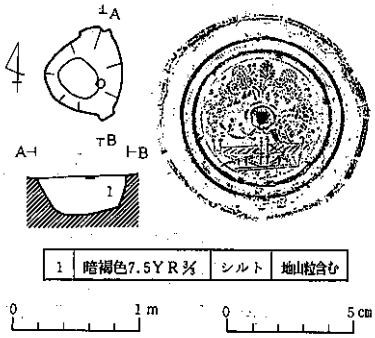
〔確認面〕第３号住居跡の堆積土上面で確認された。

〔平面形・規模〕平面形は楕円形で長軸70cm・短軸65cmである。

〔床面・壁〕底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上る。深さは30cmである。

〔堆積土〕堆積土は１層である。

〔出土遺物〕堆積土上面より和鏡が出土している。菊花桧垣双雀鏡である。



第31図　第７区ー土壙８

（７）井戸跡

井戸跡は６基検出されている。第６区で２基，第８区で１基，第10区で１基，第11区で２基検出されている。６基とも素掘りの井戸である。

（第６区ー１）井戸跡

〔平面形・規模〕平面形は円形で，長・短軸約1.5mである。

〔底面・壁〕底面は平担で，壁は比較的急に立ち上り，上端近くで開く。底部幅0.8m，深さ1.8mである。

〔堆積土〕２層に分かれる。

〔出土遺物〕第２層の底面近くから３枚の板碑が出土している。（第33図）

４は，頂部の１部のみが残存している破片である。梵字は，アーンク（胎蔵界大日）であり金泥がわずかに付着している。年号銘は欠けて年代については不明であるが，梵字の彫り方，構図上から室町時代のものと考えられる。３は，頂部と基部を欠く破片である。梵字は，キリーク（阿弥陀）かタラーク（虚空蔵）ともみられるが，下の梵字（ハラバリタヤ）は，光明真言で四行に分けたうちの最後の行に該当する。光明真言の最後の行の上にある種子は，位置的に考えて三尊種子と考えられ，その左下に位置するのは，キリークと考えられる。梵字には，わずかに金泥が付着している。年号銘の部分は欠損して年代については不明であるが，彫り方構図上から南北朝の頃のものと思われる。２は，頂部と基部を欠く破片であり，施趣等は明らかでない。梵字については欠けている部分が多く不明である。貞治七年紀年（西暦1368年）の文字が刻まれている。

（第６区－２号）井戸跡

〔平面形・規模〕平面形は楕円形で長軸1.75m，短軸1.5mである。

〔底面・壁〕底面はやや丸味をもち，壁はゆるやかに立ち上がりながら上端部まで開いていく。深さは0.9mである。

〔堆積土〕４層に分かれる。

〔出土遺物〕なし

（第８区－１号）井戸跡

〔平面形・規模〕平面形は円形で，長軸1.2m，短軸1.1mである。

〔底面・壁〕底面は平担で，壁は底面から１mの高さまで奥へえぐられており，途中から真上に立ち上っていく。底部幅1.1m，深さ3.1mである。

〔堆積土〕堆積土は14層に分けられた。

〔出土遺物〕なし。

（第10区－１号）井戸跡

〔平面形・規模〕平面形は円形で，長・短軸1.5mである。

〔底面・壁〕底面は丸味をもち，壁はゆるやかに立ち上り，上端近くでわずかに開く。深さは2.35mである。

〔堆積土〕10層に分かれる。

〔出土遺物〕板碑が１枚出土している。（第33図）

１は，堆積土９層から出土したものである。基部を欠く破損品であるが，銘文は，ほぼ残存している逆修碑である。梵字は，バン（金剛大日）である。応永廿一年十一月紀年（西暦1414年）の文字が刻まれている。

（第11区－１号）井戸跡

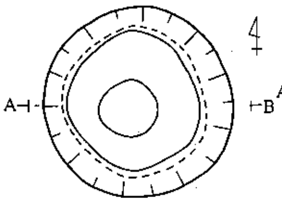
〔平面形・規模〕平面形は円形で長軸3.7m，短軸3.6mである。

〔底面・壁〕底面は平担でゆるやかに立ち上り上端でわずかに開く。底部幅は2.4m，深さは2.5mである。

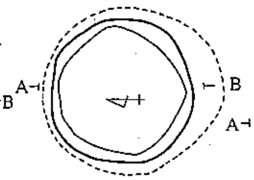
〔出土遺物〕（第32図）

砥石　破損しているため形状は不明である。横断形からみると正方体状を呈していると考えられる。現存する側面４面が使用されている。一端は端面がほとんど残存しないまでかなり使用されている（10）。

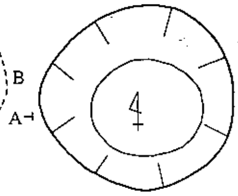
石臼　底部片２点，体部片１点の計３点が出土している。底部片は広縁が体部外面の傾きに対し，台状につくり出されるもの（11）と，傾斜で変換で，体部と底部が区画されるもの（12）とがある。前者の臼尻径は約19cmである。体部片は小片である。



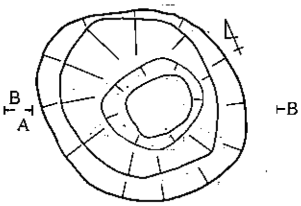
第10区－1号井戸



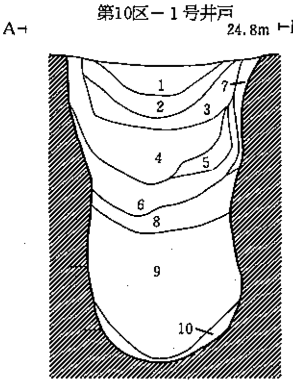
第８区－１号井戸

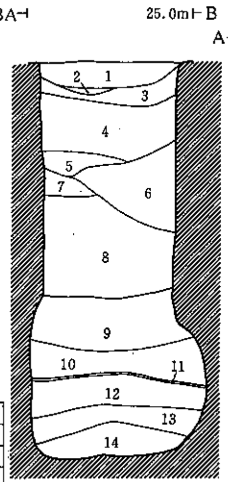


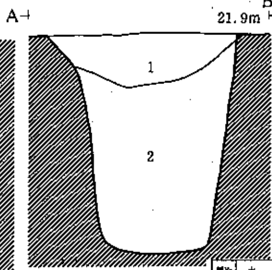
第６区－１号井戸

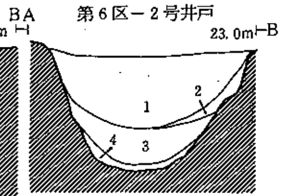


第６区－２号井戸









10区－１号井戸

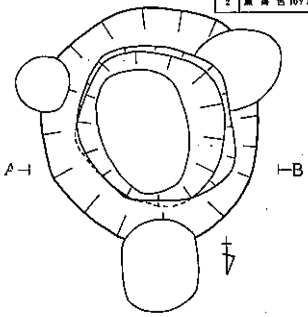
層No.	土　　層	土　性	備　　考
1	黒褐色 10YR3/2	シルト	しまりなし
2	黒褐色 10YR3/2	シルト	地山粒混入しまりなし
3	黒褐色 10YR3/2	シルト	しまりなし
4	黒褐色 10YR3/2	シルト	地山粒ブロック状に混入しまりなし
5	黒　色 10YR2/1	シルト	しまりなし
6	黒褐色 10YR3/2	シルト	しまりなし
7	黒褐色 10YR3/2	グライ化層	地山粒混多
8	黒褐色 10YR3/2	シルト	地山粒ブロック状に混入
9	暗青灰 5BG4/1	シルト	スモク混在　白色粒土混少
10	青灰色 5BG5/1	サンド	

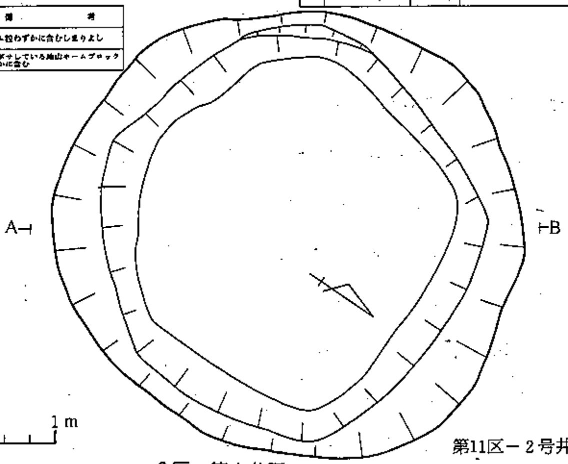
6区－２号井戸

層No.	土　　層	土　性	備　　考
1	暗褐色 10YR3/3	シルト	木炭粒，焼土粒を含む　かなり腐蝕を含む
2	褐　色 10YR4/4	シルト	焼土，ロームブロックわずかに含む
3	黒褐色 10YR3/2	粘質シルト	グライ化している層　ロームブロックわずかに含む
4	褐　灰 10YR4/1	粘質シルト	グライ化している層　ロームブロックわずかに含む

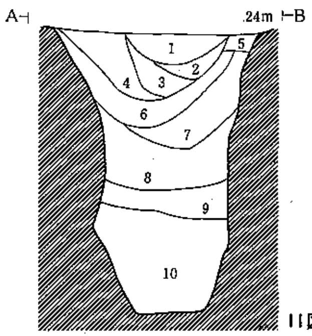
6区－１号井戸

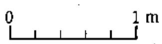
層No.	土　　層	土　性	備　　考
1	暗褐色 10YR3/3	シルト	ローム粒わずかに含むしまりよし
2	黒褐色 10YR3/2	シルト	ボサボサしている地山ローブロックわずかに含む





第11区－２号井戸



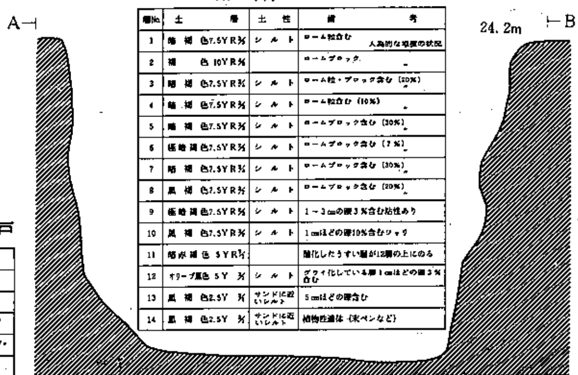


11区－１号井戸

層No.	土　　層	土　性	備　　考
1	暗褐色 10YR3/3	シルト	木炭粒わずか含む。しまりよい
2	暗褐色 10YR3/3	シルト	木炭粒＋ローム粒わずか含む しまりよい
3	暗褐色 10YR3/3	シルト	径1～2cmの小円礫地山ロームブロクわずか含む
4	暗褐色 10YR3/3	シルト	ロームブロック，小円礫わずか含む。3層よりややしまり悪い
5	不　明		
6	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山ロームブロック多量に含む。しまりよい
7	暗　色7.5YR3/2	シルト	地山ロームブロックわずか含む。やや湿気を含む
8	黒　色7.5YR2/1	シルト	地山ロームブロックわずか含む（8層より少い）やや湿気を含む
9	暗　色 10YR3/3	シルト	地山ロームブロック多量に含むやや湿気を含む
10	オリーブ黒色 10Y 3/2	サンド	木製品が存在。湿気を含みどろどろするグライ化

8区－第１井戸

層No.	土　　層	土　性	備　　考
1	暗褐色7.5YR3/3	シルト	ローム粒含む　人為的な埋積の状況
2	褐　色 10YR4/4		ロームブロック　〃
3	暗褐色7.5YR3/3	シルト	ローム粒＋ブロック含む（20%）〃
4	暗褐色7.5YR3/3	シルト	ローム粒含む（10%）〃
5	暗褐色7.5YR3/3	シルト	ロームブロック含む（30%）〃
6	極暗褐色7.5YR2/3	シルト	ロームブロック含む（7%）〃
7	暗褐色7.5YR3/3	シルト	ロームブロック含む（30%）〃
8	黒褐色7.5YR3/2	シルト	ロームブロック含む（20%）〃
9	極暗褐色7.5YR2/3	シルト	1～3cmの礫3%含む粘性あり
10	黒褐色7.5YR3/2	シルト	1cmほどの礫10%含むシャリ
11	暗赤褐色 5YR3/2		酸化したうすい層が12層の上にのる
12	オリーブ黒色 5Y 3/2	シルト	グライ化している層1cmほどの礫3%含む
13	黒褐色2.5Y 3/2	サンドに近いシルト	5cmほどの礫含む
14	黒褐色2.5Y 3/2	サンドに近いシルト	植物性遺体（木ペンなど）



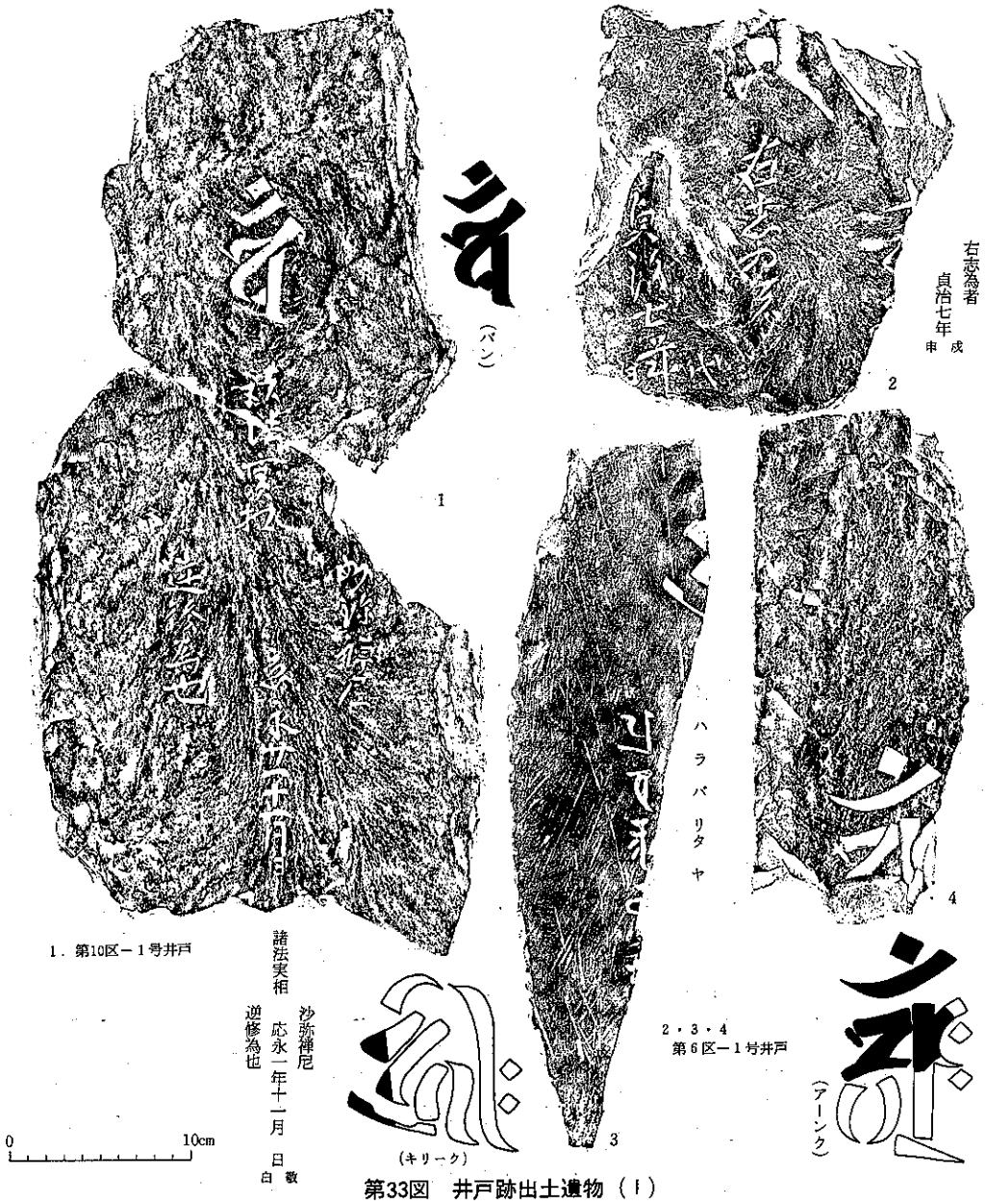
第32図　井　戸　跡

３点とも，内面には粗い敲打痕が認められ，磨面は全く観察されないことから搗臼と考えられる。古銭ー紹聖元宝である。

（第11区－２号）井戸

〔平面形・規模〕平面形は楕円形で長軸1.9m，短軸1.7mである。

〔底面・壁〕底面は平担で，ゆるやかに立ち上り，下から70cmのところで真上に立ち上っていき，上端で開く。底部幅は2.5cm，深さは2.2mである。



第33図　井戸跡出土遺物（Ⅰ）

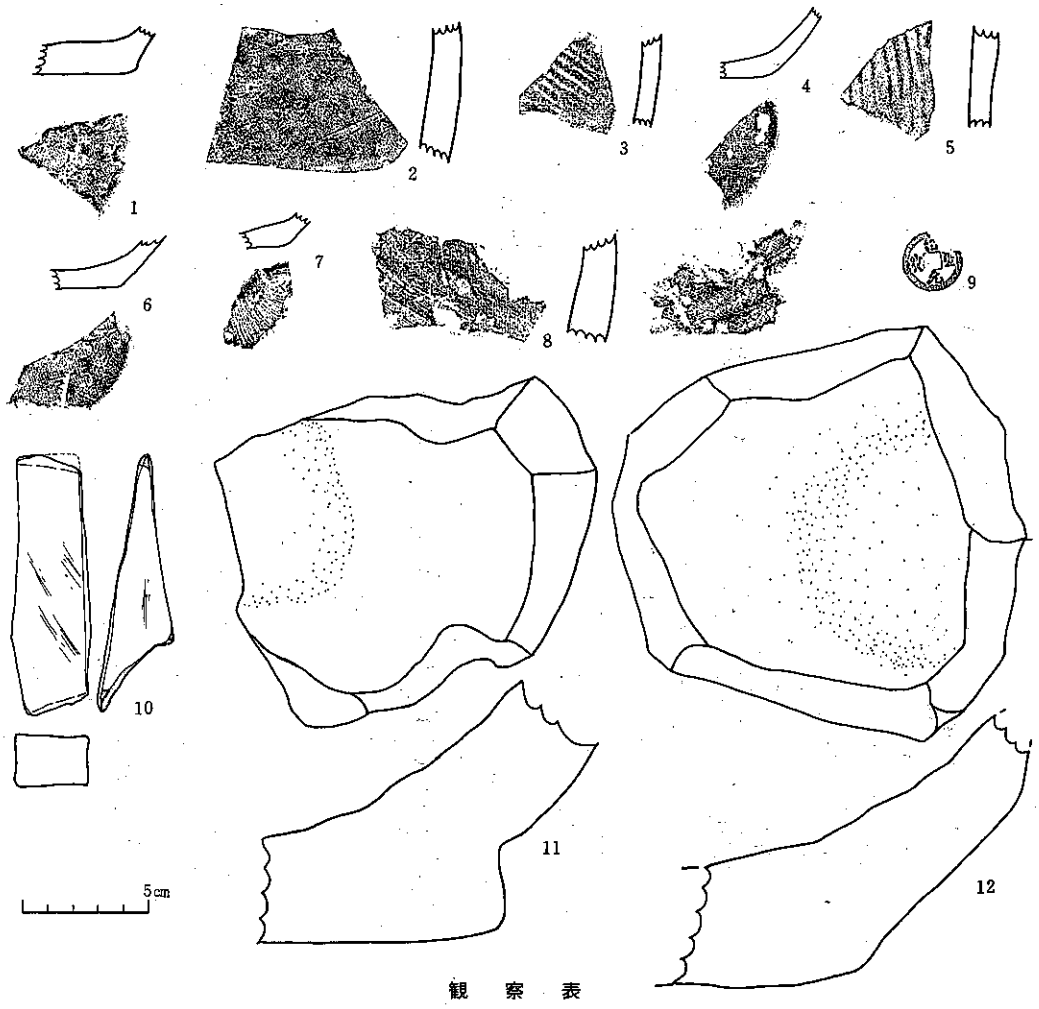
〔堆積土〕10層に分かれる。

〔出土遺物〕なし

（8）溝

溝は各区で確認されている。この中で２区・５区・７区以外の地区で確認されている溝は，表土から掘られていることが判明しているものである。２区・５区・７区の各溝の長さ，幅，深さについては表１に示した。

〔出土遺物〕（第35図）



観　察　表

番号	出土層位	種　別	調　整		底　部	番号	出土層位	種　別	調　整		底　部
			内　面	外　面					内　面	外　面	
1	第３層	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	ヘラケズリ	5	第３層	須恵器(甕)	不　明	平行タタキ目	
2	第３層	須恵器(甕)	ロクロ	ロクロ		6	第３層	土師器(甕)	ナ　デ	ナ　デ	ヘラケズリ
3	第１層	須恵器(甕)	ロクロ	平行タタキ目		7	第１層	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り
4	第３層	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	ヘラケズリ	8	不　明	中世陶器(甕)	ロクロ	ロクロ	

第34図　井戸跡出土遺物（２）

第６区溝２

須恵器甕－口縁部破片である。口縁部は外反し，端部は上下端につまみ出されている（2）。

赤焼土器坏－口縁部から体部にかけて丸味をもって強く外傾し浅い。底部に回転糸切り痕を残し，再調整はみられない（3）。

中世陶器鉢－体部破片である（1）。

第７区溝１

土師器甕－底部破片である（14）。

須恵器甕－体部破片である。櫛目状沈線が２例描かれている（9）。

須恵器大甕－口縁部破片がある。外傾し口縁部は上・下につまみ出されている（12）。

石器－18は有茎の石鏃である。基部は丸味をもつ，両面全体に細かな調整が加えられ，薄い。17は石篦である。先端がわずかに細まる。背面は全体に調整が加えられ，腹面は一部に調整がみられる。

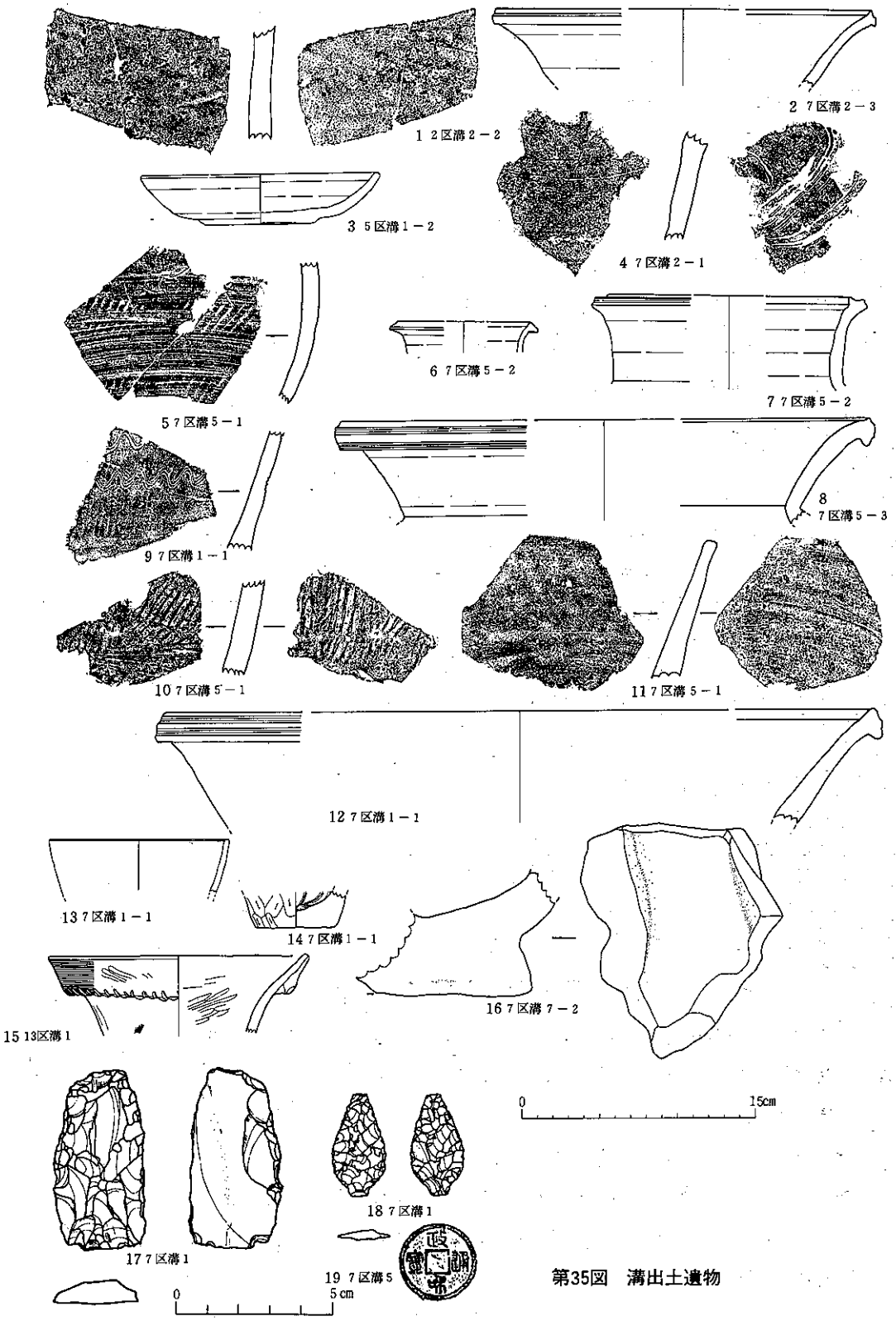
表１　溝計測表

区	溝	長さ(m)	上　幅(m)	底面幅(m)	深　さ(m)	備　　考
2	1	6	0.6	0.15～0.55	0.06～0.1	
	2	7	1.1～2	0.3 ～0.6	0.5 ～0.7	
	3	7	1.1～1.2	0.25～0.6	0.3	
5	1	18	1　～2	0.4 ～0.85	0.3	赤　焼
	2	6	0.6～0.7	0.15～0.6	0.2	
	3	8	2　～2.3	0.4 ～0.7	0.6 ～0.7	
7	1	11	1	0.3 ～0.5	2.5	4より新しい
	2	9	1.5～2	0.25～0.55	1	4より新しい
	3	4.8	1.5	0.3 ～0.5	0.5	
	4	12.5	0.5～0.8	0.2 ～0.3	0.6	
	5	25	1.8～2	0.3 ～0.7	0.6	6より新しい
	6	11	1	0.4 ～0.6	0.4	9よりも5よりも古い
	7	10	0.7～0.8	0.25～0.4	0.15	
	8	5.6	0.3～0.55	0.18～0.48	0.1	
	9	5.5	0.5	0.25～0.45	0.2	6より新しく5より古い

磁器椀－口縁部破片である。口縁部はやや外傾するが，器高の高いもので飯茶碗形のものと思われる。内外に淡黄緑色の釉がかけられ，貫入現象が認められる（13）。生産地・年代共に明らかでないが，年代については大きく江戸時代以降と思われる。

第７区－溝２

摺鉢体部下部の破片である。燃焼は堅緻である。内外にナデ調整が認められ，内面には粗く雑な節目が施されている。また，内面下部はほ用のため器面が磨り減っている（4）。整形・節目の状況からみて大まかに，中世に属するものと考えられるが，細かな年代・生産地については不明である。


1 2区溝2－2
2 7区溝2－3
3 5区溝1－2
4 7区溝2－1
5 7区溝5－1
6 7区溝5－2
7 7区溝5－2
8
7区溝5－3
9 7区溝1－1
10 7区溝5－1
11 7区溝5－1
12 7区溝1－1
13 7区溝1－1
14 7区溝1－1
15 13区溝1
16 7区溝7－2
0
15cm
17 7区溝1
18 7区溝1
19 7区溝5
0
5cm

第35図　溝出土遺物

第７区溝５

須恵器甕－７は口頸部破片である。わずかに外反し，端部は上方につまみ出される。５・10は体部破片である。

須恵器壺－口縁部破片である。外反し，端部は下方につまみ出される（６）。

中世陶器摺鉢－体部から口縁部まで直線的に立ち上がり，端部は角ばる。底部を欠く（11）

須恵器大甕－口縁部破片である。外反し，端部は上・下方につまみ出される（８）。

古銭－「政和通宝」である（19）。

第７区溝７

石臼－磨臼の下臼の破片である。底部外縁はやや張り出し臼尻径は役26㎝である。粉受用の皿部上面は粗く磨かれている（16）。

第13区溝

土師器甕の口縁部破片である。外面に段のつく複合口縁で，段から上は外反し，段には縦位の刻目が施されている。（15）

（９）ピット

ピットは２区・５区・11区・７区・８区・９区の６地点で確認されている。これらはすべて地山面で検出している。柱痕跡の認められるものと認められないものがある。これらの中で，組合って掘立柱建物跡の柱穴となるもの以外は，ほとんど組合せの不明なピットである。

（10）その他の出土遺物

（イ）縄文土器（第36図１～18）

第３区の基本層位第２層を中心として約70点の縄文土器片が出土している。図示したのは18点であるが，地文以外に文様をもつものはなく，すべて胎土に繊維を含んでいる。しかし，内面に条痕文や縄文，擦痕などが施されるものはない。

１～３：口縁部破片である。いずれもやや丸味をおびた端部をもち，平縁になると思われる。１の外面にはＬＲの縄文が，２には撚糸圧痕文（Ｌ）が施され，３には細かで密な撚糸文（Ｌ）が施されている。

４～７：体部破片である。４には１段（Ｌ）の原体を使用した組紐が回転施文されている。５も０段の原体を使用した組紐回転文の可能性がある。６は不整ではあるがＲＬの単節斜行縄文と思われる。７には結束のない複節羽状縄文（ＲＬＲ・ＬＲＬ）が施されている。

８～17：体部破片で，綾絡文や撚糸文が施されるものである。８には無節（Ｌ）の斜行縄文と綾絡文（ℓ）が，９にはループ状文と綾絡文（ℓ）が施されている。10～12には撚糸文（Ｌ）

が施されるもので，10・11はいわゆる葺互状撚糸文となっている。13〜17は０段の原体を使用した撚糸文でℓとｒとがあり，不整撚糸文に近いものもある。15・16は同一個体である。

18：平底の底部破片である。外面には原体不明の回転文が施文されている。組紐回転文の可能性がある。

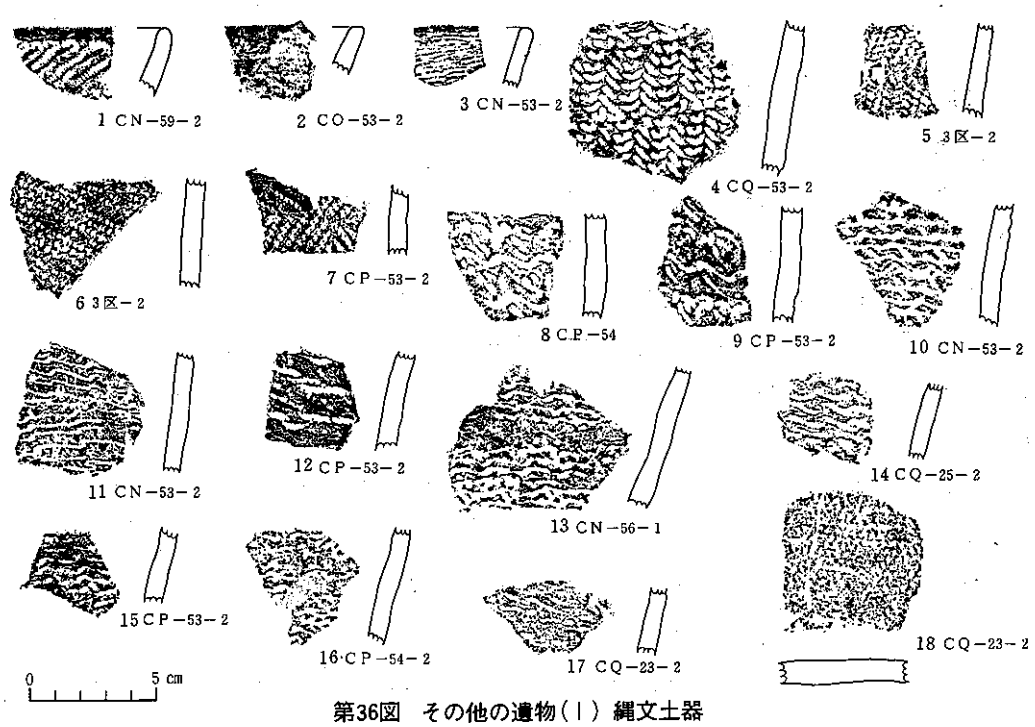
以上のような特徴をもつ土器群のうち，綾絡文・撚糸文をもつものは平田原貝塚（宮城県塩釜女子高：1969）や大木囲貝塚（興野：1968）から出土し，大木２式とされている土器に類似している。しかし，金山貝塚（鳴瀬町教委：1977）では，本遺跡出土土器群に類似するものが，上川名Ⅱ式〜大木２式のいずれの諸型式にも件って，出土することが指適されており，本遺跡出土の土器群も縄文時代前後期初頭の上川名Ⅱ式〜大木２式の間に位置付けられるものと，幅をもって考えておきたい。

（ロ）弥生土器（第37図）

弥生土器は45点出土している。第１層と２号住居跡の堆積土及び掘り方より出土している。口縁部７点，体部37点，底部１点である。この中で文様のわかる口縁部・体部と底部をあげた。

A．口縁部には次のようなものが出土している。

１は口縁部の外面に指頭状の押圧がされ，内面に縄文（L・R）が施文されている。口唇上



第36図　その他の遺物（Ⅰ）縄文土器

端にも縄文（L・R）が施文されている。

２～４はヘラ描きによる沈線と磨消しがあるものである。２は斜行の沈線と山型の沈線があり，口唇上端に縄文の押圧がある。３は３本の平行沈線があり，口唇上端に縄文の押圧がある。

４は外面に２本の平行沈線・内面に１本の沈線があり，口唇上端にも沈線がある。

５は５本のヘラ描きによる平行沈線があり，沈線の間に刺突が入る。

６～７は口縁部に綾絡の縄文がある。

B．体部には次のようなものが出土している。

８～12は縄文（L・R）を地文としヘラ描きによる沈線で区画され，磨消し（ミガキ）があるものである。８と９は平行沈線と斜行の沈線である。10は継位と弧線である。11は平行沈線と弧状の沈線である。12，13は平行沈線である。

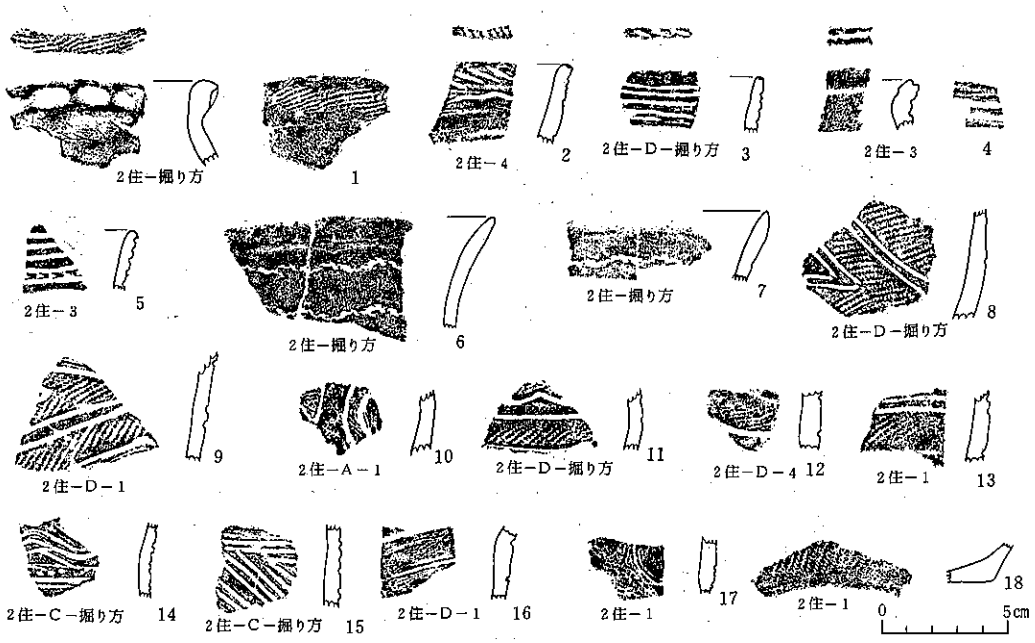
14はヘラ描きによる山形沈線と平行沈線があり，その間に刺突がされている。

15・16はヘラ描きによる沈線があり，沈線の間にミガキが施されているものである。15は平行線と斜行沈線による「く」の字状をしている。

17は細い沈線による縦位の弧線がある。

C．底部　18は縄文（L・R）を施文している。

出土している弥生土器の口縁部は，①口縁部外面に指頭状ものによる押圧のもの，②ヘラ描きの沈線のあるもの，③ヘラ描きの沈線の間に刺突が入るもの，④綾絡縄文があるものの４種



第37図　その他の遺物（２）弥生土器

類がみられた。

体部は，①縄文を地文としヘラ描きの沈線で区画され，磨消しのあるもの，②ヘラ描きの沈線の間に刺突が入るもの，③ヘラ描きの沈線で沈線の間がミガキのあるもの，④細い沈線による縦位の弧線のあるものの４種類がみられた。

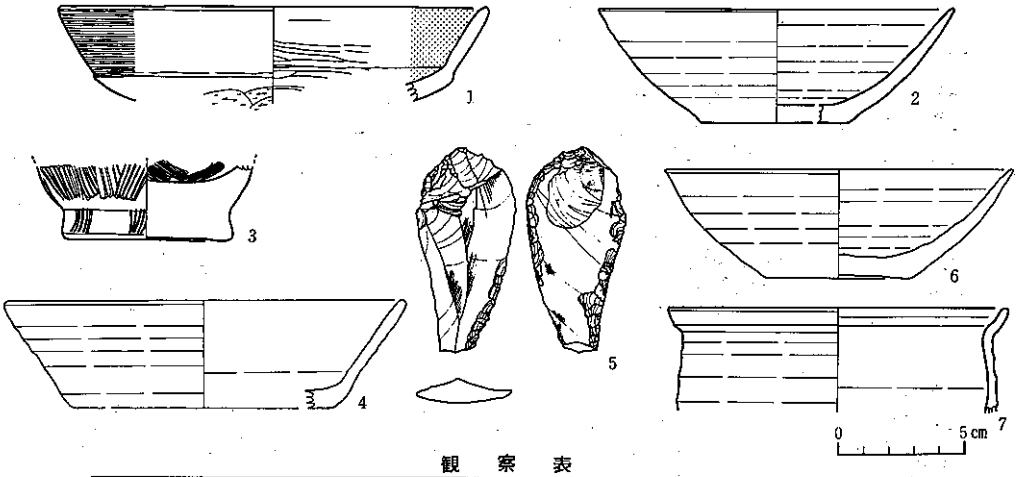
体部の①は宮城県内で大泉遺跡（伊東：1957），山王遺跡（須藤：1973）・青木畑遺跡（興野：1976）などで出土している例がある。これらは大泉式として位置づけられている。その他土器については，宮城県北部の天王山式系とされているものに近似した例がみられる。（興野：1976・佐藤：1978）

第38図は基本層序第Ⅰ・Ⅱ層および遺構確認だけで精査を行なわなかった住居跡出土の遺物である。

（ハ）石器（第38図・５）横長剥片を使用した不定形石器である。背面石側辺の一部と腹面両側辺に調整が施されている。

（ニ）土師器１は坏である。体部内外面に段がつき，段から上は外傾する。３は甕の底部破片である。ロクロを使用していない。７はロクロを使用した甕である。口縁部は外傾し端部は丸い。

（ホ）須恵器２・４・６は坏である。いずれも底部は回転糸切り技法で切り離されている。



観　察　表

番号	出土層位	種別	調整 内面	調整 外面	底部	器高	口径	体径	底部	分類番号
1	CK68　第2層	土師器(坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ヨコナデ・ヘラケズリ			17.0			B
2	CN53~56　第2層	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.6	14.0		5.8	I
3	DB54~60　第2層	土師器(甕)	ナデ	刷毛目	回転糸切り				6.9	
4	2区表土	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.3	16.0		10.6	I
6	CN55　住居跡埋1	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.4	13.8		5.8	I
7	CN57　住居跡埋1	土師器(甕)	ロクロ	ロクロ			13.5			BⅡb

第38図　その他の遺物（３）土師器・須恵器・石器

Ⅴ　遺構・遺物に関する問題点

１．出土土器の分類

〔土師器〕

竪穴住居跡・各遺構・２層・１層より出土している土師器の坏と甕の分類と組合せを考えてみたい。

坏：坏には製作にロクロを使用していないものと，ロクロを使用しているものとがある。それぞれ体部および口縁部の器形により（A）－（C）までに分類できる。

Ａ　ロクロを使用せず口縁部がくびれて外反するもの

Ｂ　ロクロを使用せず体部に段がつくもの

Ｃ　ロクロを使用し体部から口縁部まで外傾するもの

以上の各類はさらに器形の特徴，切り離し技法，器面調整の特徴から次のように細分される

〔A類〕A類は器形により次の２種類に細分できる。

ＡⅠ類　体部が丸く平底で頸部がくびれて口縁部が外反して長いもの

ＡⅡ類　体部が丸く丸底で頸部がくびれてわずかに外反するもの

〔B類〕

B類は体部がくびれて段がつき，段から上が外反する。

〔C類〕C類は切り離し技法によってＣⅠ類～ＣⅡ類に細分される。

ＣⅠ類　切り離しが回転糸切り技法によるもの

ＣⅡ類　切り離しが回転ヘラ切り技法によるもの

ＣⅢ類　切り離しが不明のもの。

以上のＣⅠ類～ＣⅢ類には外面の体部下端，底部に再調整が加えられているものが多く，その有無および，再調整の種類，部位と内面調整の組み合せには次のようなものがみられる。

ａ．再調整が加えられずに，内面ヘラミガキと黒色処理のあるもの

ｂ．底部だけ手持ヘラケズリのあるもので内面ヘラミガキと黒色処理のあるもの

ｃ．底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリのあるもので内面ヘラミガキと黒色処理のあるもの

ｄ．底部だけ回転ヘラケズリのあるもので内面ヘラミガキと黒色処理のあるもの

ｅ①底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリのあるもので内面ヘラミガキと黒色処理のあるもの

②底部から体部下部にかけて回転ヘラケズリのあるもので内面ヘラミガキだけのもの

C類は，これらの切り離しと器面調整の組合せから次のような種類がみられる。

ＣⅠ	a	ＣⅡ	a	ＣⅢ	b
	b		d		c
	c		e②		
	d				
	e①				
	e②				

高台坏：いずれも製作に際してロクロを使用したものである。切り離し技法によってⅠ類～Ⅲ類に分かれる。

Ⅰ類　糸切り技法によるもの

Ⅱ類　ヘラ切り技法によるもの

Ⅲ類　切り離しの不明なもの

Ⅲ類には内外面にヘラミガキが施されているもの（ａ）と，内面にヘラミガキ・黒色処理のれているもの（ｂ）とがある。

甕：甕には（A）製作に際しロクロを使用していないもの（B）ロクロを使用しているものがある。さらにA類では口縁部形態や体部の器形から，Ｂ類では口縁端部の形態から次のように細分できる。

A類

ＡⅠ類　複合口縁のもの

ＡⅡ類　単純口縁で口縁部が外反し口径が体径より小さいもの

ＡⅢ類　単純口縁で口縁部が外反し口径が体径より大きいもの

AⅣ類　単純口縁で口縁部が直立するもの

ＡⅡ類とＡⅢ類にはさらに法量から，（ａ）大きいもの，（ｂ）小さいものとがある。

Ｂ類

ＢⅠ類　口縁端部が上方につまみ出されるもの

ＢⅡ類　口縁端部が丸くおさまるもの

ＢⅠ類とＢⅡ類には法量から，（ａ）大きいもの，（ｂ）小さいものとがある。

〔須恵器〕

須恵器坏の分類

竪穴住居跡，他の遺構，第２層より出土している須恵器坏を分類すると次の種類に分けられる。

坏はすべてロクロ使用のものである。切り離しと調整の技法から，次のように細分できる。

Ⅰ類　回転糸切り技法のもの

Ⅱ類　回転ヘラ切り技法で底部に手持ちヘラケズリが加えられるもの

Ⅲ類　切り離し技法は不明で，底部に手持ちヘラケズリのもの

２．出土土器の組み合わせとその年代

土師器には，坏・高台付坏・甕・甑があり，坏は６種類，高台付坏は３種類，甕は６種類に細分できた。これらの出土状況をみると第２表のようになる。各住居の坏と甕の組合せから，坏，甕ともにロクロ不使用の土器を出土する住居跡（１，２，７）と，坏や甕のいずれかにロクロを使用した土器を含む住居跡（３，４，５，６，８）に分けられる。

１住，２住，７住についてみると，甕ＡⅠ類だけ出土する１住と７住のグループと甕ＡⅡ類だけ出土する２住に分けられる。３住，４住，５住，６住，８住については，甕A類とＢ類が混存した状況を示している。

このことから土師器は，１住と７住のグループ（Ⅰ群），２住（Ⅱ群），３住・４住・５住・６住・８住のグループ（Ⅲ群）の３群に分かれる。

年代

土師器については３群に分けられた。Ⅰ群は西野田遺跡（第１住～第11住居）出土のものに類例をみるもので，土師器型式編年において「塩釜式」とされているものとしておきたい。第Ⅱ群土器は器形的に塩釜式と南小泉式にみられるが，調整にみられる刷毛目は南小泉式にはみられない。よってここでは「塩釜式」に入れておきたい。第３群土器は西野田遺跡（第12住居～第14住居），岩切鴻ノ巣遺跡，第Ⅳ群土器に類例をみるもので，土師器型式編年において「表杉ノ入式」とされるものにしておきたい。

以上のことから，第Ⅰ群，第Ⅱ群は「塩釜式」期（古墳時代），第Ⅲ群は「表杉ノ入式」期（平安時代）に属するものと考えられる。

須恵器坏の出土状況と年代

須恵器坏の住居跡での出土状況は第２表のようになり，３住，５住，６住，８住から出土している。このことから土師器第３群に共伴するものといえ，平安時代のものとされる。

表２　出土土器の組み合わせ

	土師器				須恵器	
	坏	高台付坏	甕	その他	坏	その他
1 住	AⅠ　AⅡ		AⅠ	甑		
2 住			AⅡa　AⅡb			
3 住	CⅠe①　CⅢe①		AⅢa		Ⅱ	甕
4 住	C		BⅠb		Ⅰ	
5 住	CⅠa　CⅢb　CⅢc	Ⅰ　Ⅲb	AⅡb　AⅢa　AⅢb		Ⅰ・Ⅲ	壺
6 住	C		BⅡa		Ⅱ	
7 住			AⅠ			
8 住	CⅠa	Ⅰ　Ⅲa	AⅢb		Ⅲ	

３．竪穴住居跡について

（1）年　　代

確認調査で19軒の住居跡を確認した。今回はその中の８軒の住居跡を調査した。８軒の住居跡に伴出した土師器は，形態，技法の特徴などから古墳時代の塩釜式と平安時代の表杉ノ入式の２形式に分けられた。この結果から，１号住・２号住・７号住の３軒が古墳時代前半に，３号住・４号住・５号住・６号住・８号住の５軒が平安時代に属するものと考えられる。遺構確認だけで終った11軒の住居跡についての年代は不明である。

（2）竪穴住居跡の形態と構造

本遺跡から検出された住居跡について２時期にわけた。次に時期別に平面形，規模，床面，柱穴，周溝，カマドなどについてふれてみたい。

古墳時代前半：

〔平面形〕平面形は３軒とも方形を基調とする隅丸方形である。

〔規　模〕１号住居（3.3×3.2m）以外は削平のため不明である。

〔床　面〕床面の構築方法をみると①地山を床面としているもの（７住），②貼床をしているもの（１，２住）の２タイプがある。

〔周　溝〕３軒とも周溝が認められる。

〔柱　穴〕６本（７号住），４本（２号住），２本（１号住）のものが認められる。

〔　炉　〕２軒（１号住・２号住）に床面に炉跡が認められるが，７号住は削平のためか不明である。

平安時代：

〔平面形〕５軒とも方形を基調としており，２軒（３・５号）が略正方形で１軒（６住）が長方形である。

〔規　模〕平面形のわかるものではいずれも大きさにまとまりを示さない。

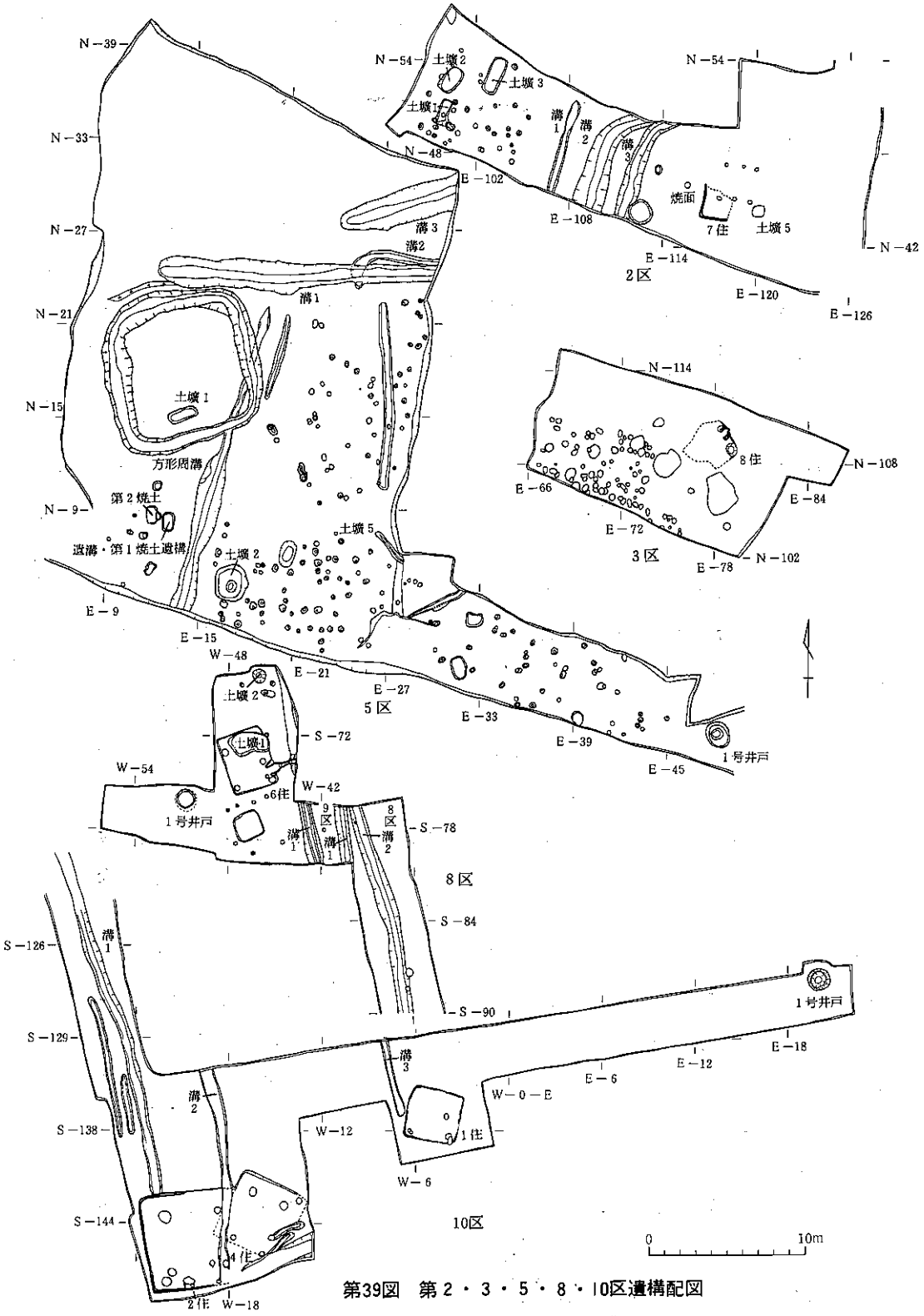
〔床　面〕床面の構築方法をみると貼床をしているもの，地山を床としているものの２タイプがある。

〔周　溝〕周溝の有るものと，無いものがある。

〔柱　穴〕柱穴の有るものと，無いものがある。

〔カマド〕４軒はカマドが有るが，１軒は不明である。カマドはいずれも壁にとりつけられているもので煙道が認められる。カマドの位置は北壁に位置するもの（８号住）と東壁に位置するもの（２・３・５・６号）の２タイプがある。燃焼部の構築方法をみると粘土の種み上げによるもの，粘土積み上げと共におさえに土器を使用するものの２タイプがある。

２時期の住居跡についてそれぞれふれたが，各時期ともに住居の形態構造にばらつきがみら



第39図　第2・3・5・8・10区遺構配図

れ，まとまりをみせないが，内部施設としてのカマドの有無が，１・２・７と３・５・６・８の相違点として出てくるだけである。

４．その他の遺構について

（1）方形周溝

〔年代について〕形態的にみると，四方に溝がめぐり，台状部の南側中央に長方形の土壙がみられるものである。台状部については，削平を受けていたため，台状部に封土が盛られていたかどうか不明である。このような，形態的特徴をもつ遺構は，志波姫町鶴の丸遺跡・高清水町東館遺跡・名取市今熊野遺跡で確認されている方形周溝墓に例がみられる。これらの遺跡の周溝からは，供献された状態を示す土師器などが出土しており，年代も「塩釜式・南小泉式」期のものと考えられている。

本遺跡からは，供献用の土器や塩釜式や南小泉式の土師器などは検出できなかったが，周辺からは，「塩釜式」期の住居跡も確認されており，形態的特徴からも古墳時代の方形周溝墓としての可能性が考えられる。

（2）掘立柱建物跡

いずれの建物跡も遺物は出土しておらず，建物の年代は不明であるが柱穴の規模や柱間隔等から中世以降にくだる可能性もある。

（3）焼土遺構

５区－１・２の焼土遺構は，平面形が長方形を呈するものである。いずれも壁面と底面が焼けて赤変しており，土壙の中で火を使用したことを示している。

このような遺構は色麻町上新田遺跡・宮前遺跡など県内各地に類例がみられるが，その性格や年代については明らかにされていない。本遺跡の場合も遺物の出土はなく，また具体的性格を検討できるような資料も得られなかった。

（4）焼け面

２区－１の焼土遺構は，焼面がありその下に掘り方状の凹みがみられるもので，その状況は，住居跡でみられる炉跡等の遺構に近似している。ただし本遺構の場合，周囲にもこれに関するような遺構等はみられず，また遺物も出土しないことから年代，性格ともに不明である。

（5）土　　壙

第２区－第１土壙

土壙堆積土中より，平安時代の土師器が出土しているが，遺構の年代を決定できる資料はない。

第２区－第３土壙

土壙の底面より，12～14世紀と考えられる青磁の椀が出土している。したがって土壙の年代も同時期と考えられる。性格は不明である。

第２区－第５土壙

土壙中の土器の出土状況を観察すると，土器は土壙のほぼ中央にあり，斜めになっているが，底部の一部は土壙底面についており，上方が口縁部となっている。又，土器の周辺の堆積土がほぼ水平であることは，人為的に埋設した様子を示しているといえる。このことから，この土壙は壺形土器を埋設するための土壙と考えられる。埋設されている土器は，弥生時代後期の天王山式系（器形や羽状様の撚糸文の施文等から，北関東地方の後期の土器の影響を看取することができる）の壺形土器であり，この遺構は，土器棺墓と考えられる。

東北地方南部における弥生時代の基本的な埋葬形態の変遷は，再葬墓・土壙墓 ⟶ 土器棺墓（壺棺墓・甕棺墓）・土壙墓であり，土器棺墓は弥生時代中期後半から盛行すると把握されている。宮城県で土器棺墓の発見された遺跡には，仙台市西台畑遺跡（合口壺棺－桝形囲式），同南小泉遺跡（合口壺棺－桝形囲式），七ヶ浜町清水洞窟（壺棺－桜井氏）があるが，弥生時代後期のものは皆無であった。本遺跡の土器棺墓は，この空白を埋める貴重な資料である。宮城県周辺での該期の土器棺墓発見の遺跡としては，岩手県水沢市常盤広町遺跡（合口甕棺－常盤式），山形県村山市河島山遺跡（甕棺－河島山式）が知られている。また，該期の土壙墓としては，福島県安達郡破橋（間尺）遺跡がある。

第７区－第８土壙

土壙堆積土上面より，室町時代と考えられる和鏡が出土しているが，遺構の年代を決定できる資料はない。

（６）井戸跡

井戸跡は６基検出した。いずれも素掘りの井戸である。これらの井戸跡から出土した遺物は既に示した通りである。その種類は，土師器・須恵器・中世陶器・板硯・古銭等である。いずれも堆積土中から出土したものであり，井戸の使用期間等を考慮すると井戸の年代を正しく示すものとはいえない。ただし，出土した遺物の組み合せからみると，10区－１号井戸は中世には使用されていたものと考えられる。これらの井戸から出土遺物で年代を検討してみた。

11区－１号井戸は土師器・須恵器が13層と３層と１層から，中世陶器が１層から，紹聖元宝が３層から出土している。出土した土師器は表杉入してふくまれる形式のものである。又他の時期の遺物はみられない。このことから本遺構の年代は中世以前に位置づけられる。

10区－１号井戸では，最下層から応永21年の（1414）板碑が出土している。６区－１号井戸では底面近くから貞治７年の板碑が出土している。この二つの井戸からは，他の時期の遺物は含まれないので，この時期に近い年代があたえられる。

他の８区－１号井戸・６区－２号井戸・11区－２号井戸は遺物もなく不明である。

（7）溝

年代：各溝の出土遺物を検討すると，２区－１溝と７区－１溝からは須恵器・土師器が出土している。さらに７区－５溝からは第１層より中世陶器片と古銭（政和通宝）が出土している。２区－２溝からは底面で中世陶器が出土している。しかし，いずれも溝の年代を限定できる資料ではない。また，溝の性格は不明である。

Ⅵ　遺跡の構成

遺跡の構成を検討するにあたって，遺構確認調査・東北自動車道（宇南遺跡）の調査の成果を含めて考えてみたい。

縄文時代：

縄文時代の遺構・遺物をみると，ＣＯ－53区の包含層から縄文時代前期の土器片と石器が出土している。５区－５号土壙から縄文時代晩期の注口土器（大洞C_2式）が出土している。縄文時代の前期や晩期の竪穴住居などは確認されなかったが，この頃の人々が何らかの活動をしていたことがうかがえる。

弥生時代：

弥生時代の遺構・遺物をみると，２区から天王山式の壺を埋設した土壙（壺棺墓と考えられる）が検出されている。又，住居跡の掘り方や堆積土から大泉式・天王山式の土器片が出土している。弥生時代後期の竪穴住居跡などは確認されなかったが，墓壙が検出された。このことで，弥生時代後期には，人々が宇南遺跡で生活を営んでいた可能性をうかがわせる。

古墳時代前半：

古墳時代の遺構・遺物をみると，３軒の竪穴住居跡と土師器の坏・壺・甕などが出土している。遺構の配置をみると，２軒が平坦部の南側に，１軒が北側の斜面に立地している。また，東北自動車道の発掘調査で，この台地の南西部にも古墳時代前半の住居跡が１軒調査されている。このことから，台地上に集落が営まれていたものと考えられる。方形周溝もこの時期の可能性がある。

平安時代：

平安時代の遺構・遺物をみると，５軒の竪穴住居跡と土師器の坏・高台付坏・甕，・須恵器の坏・高台付坏・甕・壺・蓋・砥石などが出土している。さらに土壙や井戸なども検出されている。遺構の配置をみると，４軒が平坦部の中央から南側に，１軒が北側の斜面に立地する。また，東北自動車道の発掘調査で，この台地の西側で住居跡が３軒調査されている。このことから，この時期には台地上に古墳時代よりも住居跡の分布が密になってきたといえる。

中　世：

中世の遺構・遺物としては，井戸・土壙が検出されており中世陶器・板碑などが出土している。遺構の配置をみると，平坦部や北斜面に立地する。東北自動車道の発掘区からもこの時期の遺物が出土している。また，周囲の水田の調査では，１部人為的に改変された落ち込みが確認されている。この結果から，古代～中世にかけては現在より低い湿地であったと推定された。このことは，周囲を湿地に囲まれた台地に中世の遺構が立地していたと考えられる。

今回の調査で，平安時代～中世の時期と考えられた掘立柱建物跡・溝・土壙・井戸も，ある時期には，この１段低くなった湿地に囲まれた台地に立地する遺構群の一部であったとも考えられる。

平安時代～中世にかけて，このような遺構群が台地上に立地し，周囲を湿地に囲まれる遺跡について考えるならば，ある程度，自然地形を利用した防禦的な施設である館跡であった可能性もある。

注１

２区－土壙３出土青磁埦は，竜泉窯の流れをくむ中国南部（福建・広東周辺）産の青磁蓮花文埦で，13世紀と思われる。

（名古屋大学・樽崎彰一氏による）

引用・参考文献

伊東信雄（1957）：「古代史」「宮城県史」第１巻

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」歴史14輯

興野義一（1968）：「大木式土器理解のために（Ⅱ）」考古学ジャーナル№16

〃　〃（1976）：「一迫町の歴史－原始期」一迫町史

佐藤信行・他（1978）：「上の原Ａ遺跡」宮城県一迫町発掘調査報告書第３集

白鳥良一・加藤道男（1974）：「岩切鴻ノ巣遺跡」東北新幹線関係遺跡報告書Ⅰ・宮城県文化財調査報告書第35集

須藤隆（1973）：「土器組成論」考古学研究19巻－４号

東北学院大学栗遺跡調査団（1975）：「栗遺跡発掘調査略報」

鳴瀬町教育委員会（1977）：「亀岡遺跡・金山貝塚」鳴瀬町文化財調査報告書第１集

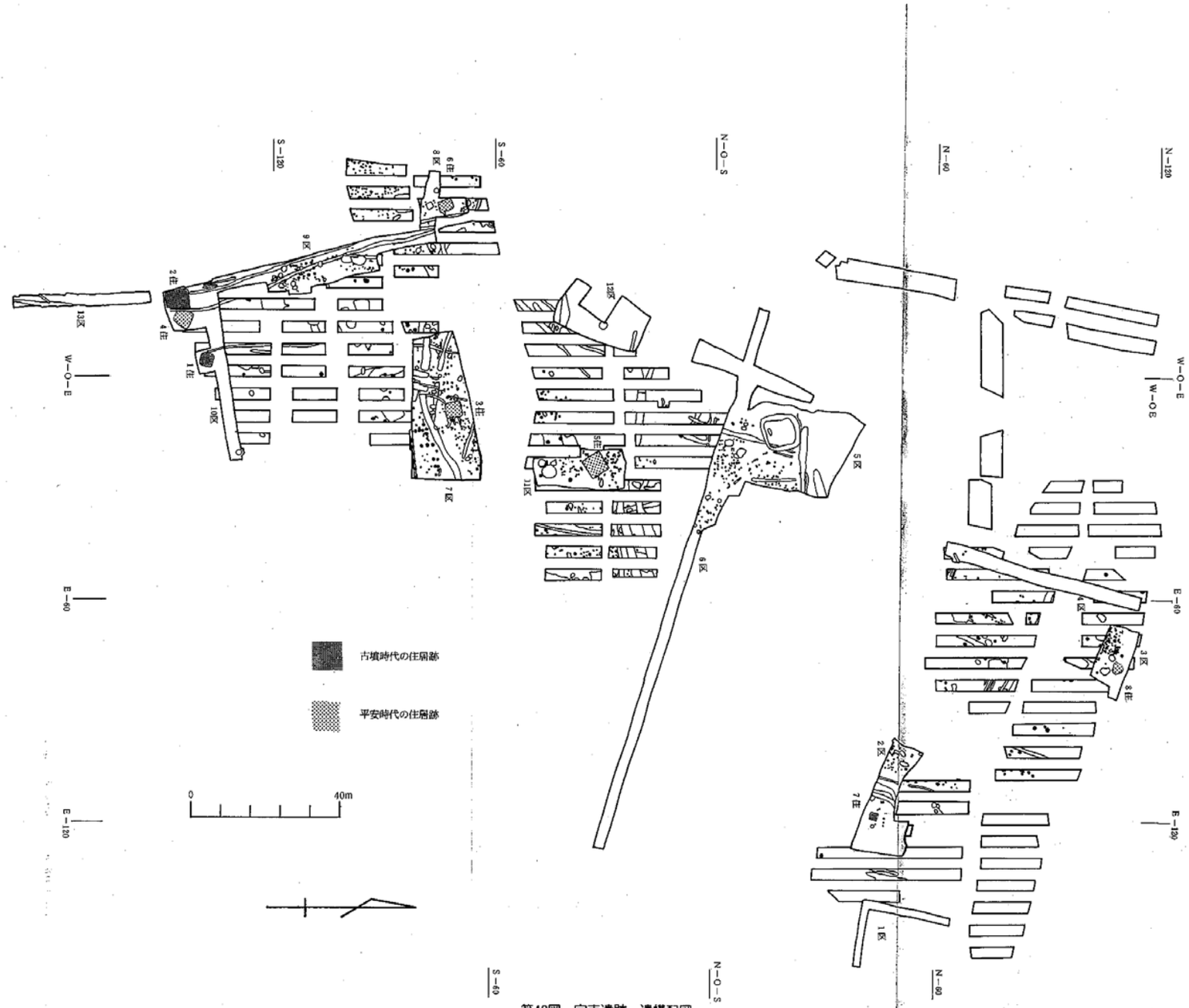
藤沼邦彦（1971）：「大橋遺跡」東北自動車道関係遺跡発掘調査概報・宮城県文化財調査報告書第24集

藤沼邦彦・白鳥良一・高野芳宏（1971）：「東山遺跡」東北自動車道関係遺跡発掘調査概報・宮城県文化財調査報告書第24集

宮城県塩釜女子高社会部（1969）：「宮城県桃生郡矢本町平田原貝塚発掘調査報告書」貝輪５

山内清男（1964）：「日本原始美術Ⅰ」講談社

藤村東男（1978）：「九年橋遺跡第４次調査報告書」文化財調査報告書第23集（北上市）



第40図　宇南遺跡・遺構配図

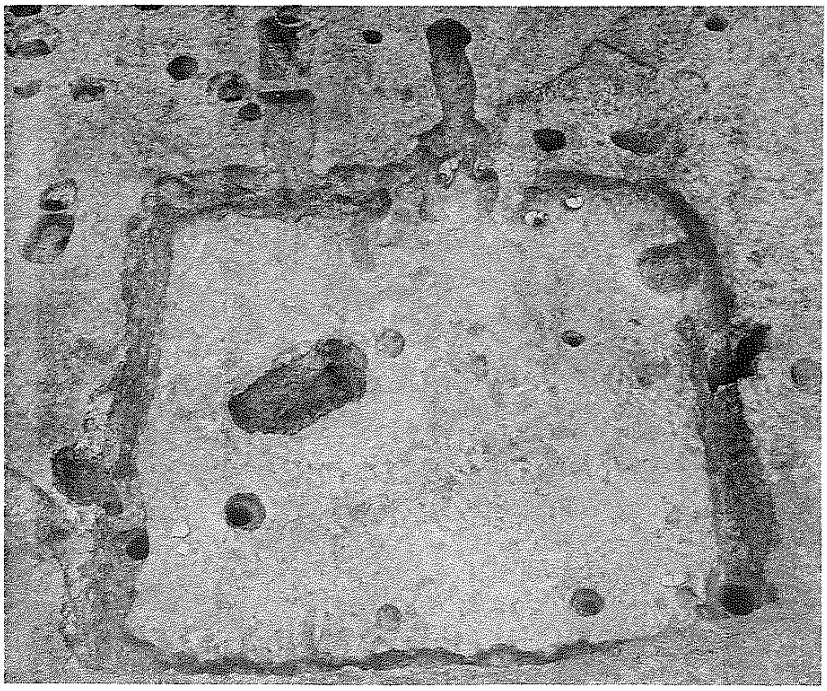
破片集計表

種別	器種	部位	調整	合計
土師器	坏	口縁部	ナデ―ナデ	1
			ケズリ―ナデ	1
			ロクロ―ミガキ	10
			―ロクロ	2
			―ナデ	2
			―ミガキ(黒色)	25
			ロクロ―ナデ―ミガキ(黒色)	1
			―ミガキ	1
		体部	ミガキ―ケズリ	1
			ケズリ―ナデ	45
			―ミガキ	1
			―ミガキ(黒色)	3
			―刷毛目	3
			ロクロ―ロクロ	3
			―ミガキ	8
			―ミガキ(黒色)	23
			不明―ミガキ	1
			―不明	2
			ケズリ―ロクロ	2
			―ミガキ(黒色)	1
			ヘラキリ―ミガキ	1
			―ロクロ	1
			ロクロ―ミガキ(黒色)	1
			ロクロ(糸切り)―ミガキ(〃)	1
			糸切り―ロクロ	1
	小計			141
	甕	口縁部	ナデ―刷毛目	1
			―ナデ	20
			ケズリ―ナデ	13
			刷毛目―ナデ―ナデ	1
			ミガキ―ナデ	1
			ロクロケズリ―ナデ	2
			ロクロ―ナデ	1
			不明―不明	2
		体部	ナデ―ナデ	4
			ミガキ―ナデ	7
			ケズリ―ミガキ	1
			―ミガキ(黒色)	7
			―ナデ	346
			―ロクロ	1
			―刷毛目	17
			―刷毛目(黒色)	11
			不明	10
			刷毛目―ナデ	35
			―不明	2
			ロクロ―ナデ	8
			―ロクロ	11
			不明―ナデ	36
			―不明	36
		底部	ケズリ―ナデ	4
			―刷毛目―ナデ	2
			―ナデ(木葉痕)	3
			―不明	4
			木葉痕	1
	小計			552
	甑	口	ナデ―ナデ	1
	小計			1
須恵器	坏	口縁部	ナデ―ロクロ	1
			ロクロ―ロクロ	43
			ヘラケズリ	1
		体部	ケズリ―ロクロ	1
			ロクロ―ケズリ―ナデ	1
			ロクロ―ロクロ	26
		底部	ケズリ―ロクロ	2
			ヘラ切り―ロクロ	1
			ヘラケズリ―ロクロ	4
			―ナデ	1
			ロクロ―ロクロ	1
			―不明	1
			糸切り―ロクロ	1
			糸切りロクロ―ロクロ	2
			―不明	2
	小計			87
	甕	体部	ナデ―ナデ	4
			ケズリ―ナデ	9
			―ロクロ	6
			波状文―ナデ	1
			タタキ目―ロクロ	3
			―タタキ目	1
			―ナデ	5
			平行タタキ目―ナデ	2
			―ロクロ	1
			―青海波文	5
			―不明	1
			斜行タタキ目―青海波文	2
			格子タタキ目―ナデ	1
			ロクロ―ロクロ	11
			―ケズリ	1
			―青海波文	1
			―ケズリ―ナデ	1
			不明―ナデ	1
			―ロクロ	1
			―不明	1
		底部	ケズリ―ナデ	1
	小計			60
	高台付坏		ロクロ―ロクロ	1
	小計			1
	蓋		ロクロ―ロクロ	2
	小計			2
赤焼土器	坏	口縁	ロクロ―ロクロ	1
		体部	ロクロ―ロクロ	1
	小計			2
中世陶器	甕	体部	ロクロ―ロクロ	1
	小計			1
			計	846

図版１　遺跡遠景（航空写真）

第 1 号住居跡

第 2 号住居跡



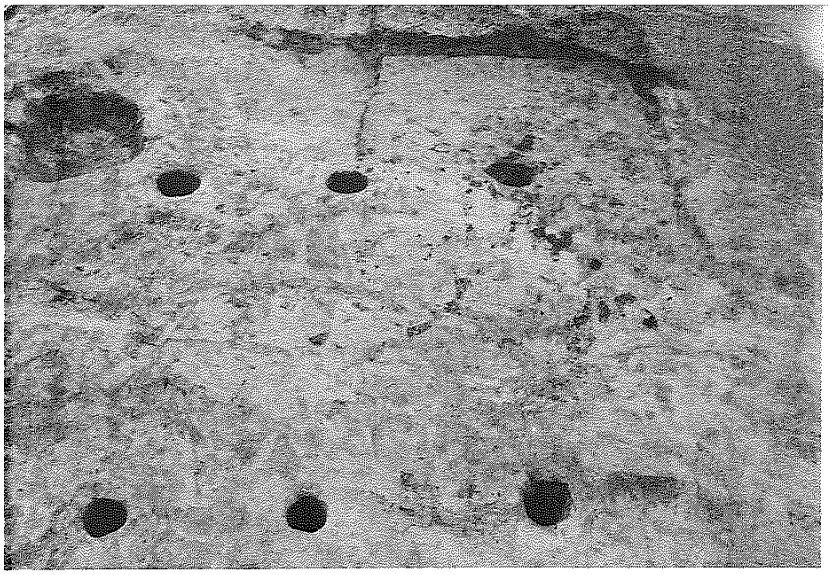
第 3 号住居跡

図版 3

第 4 号住居跡

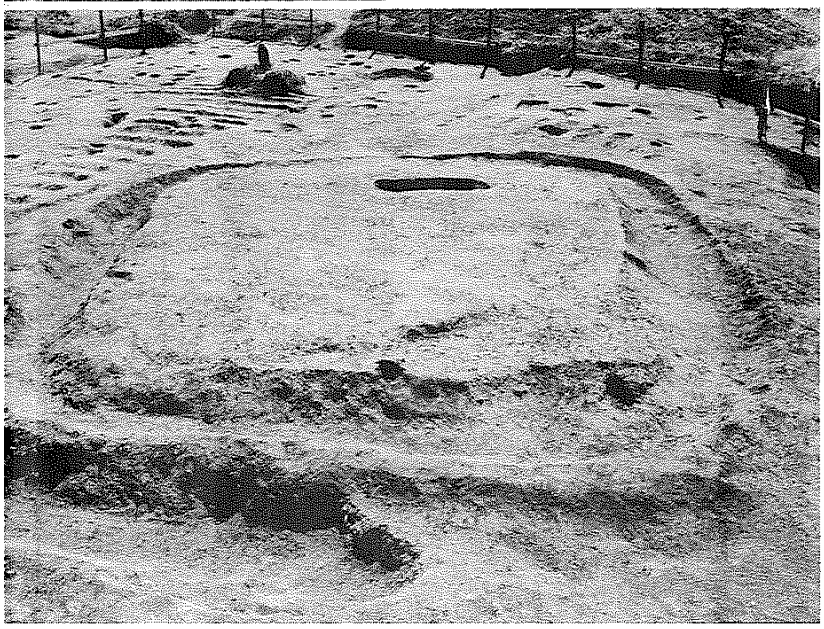
第 5 号住居跡

第 6 号住居跡



第 7 号住居跡

第 8 号住居跡



方形周溝

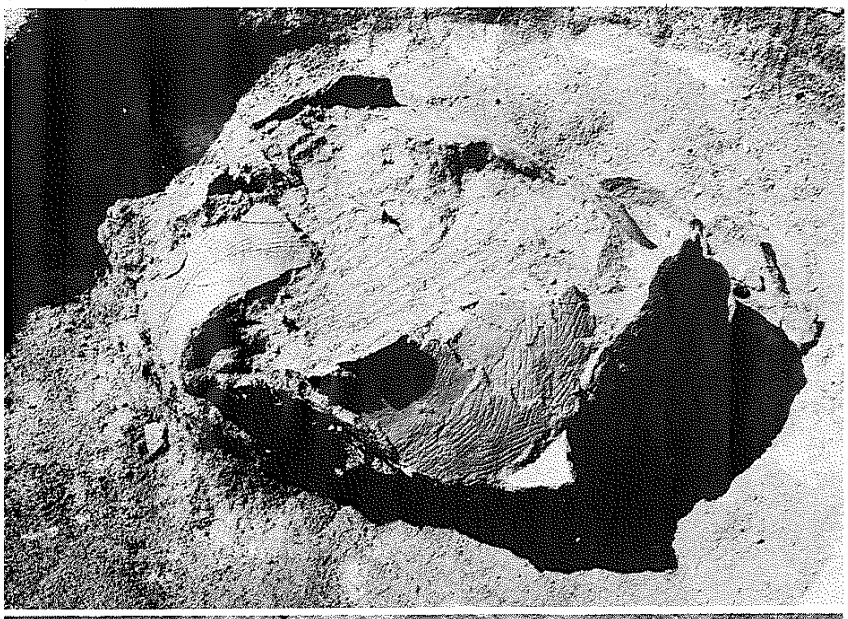
図版 5

第1・2
焼土遺構

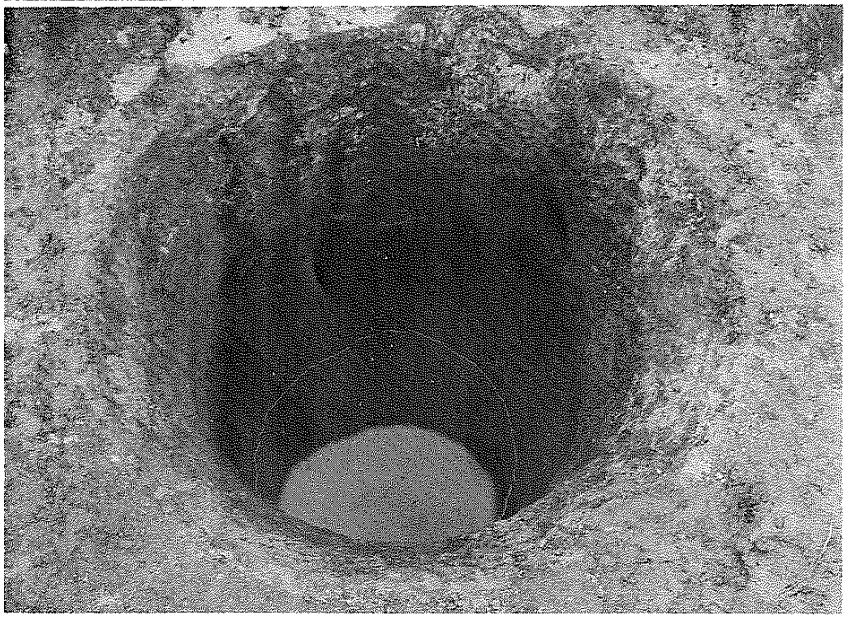
第7区
1号掘立柱建物跡

第9区
2号掘立柱建物跡

第 2 区
土壙 5

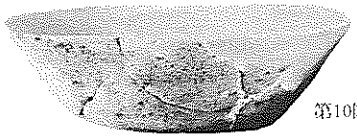


第 2 区
土壙 5

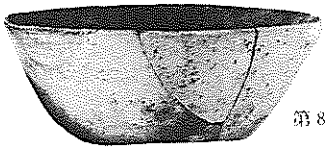


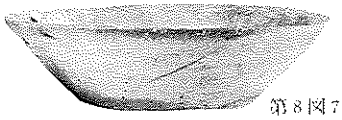
第10区
1 号井戸跡

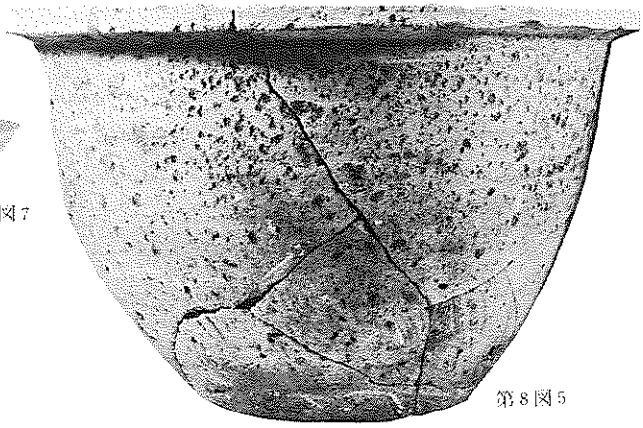
第8図6

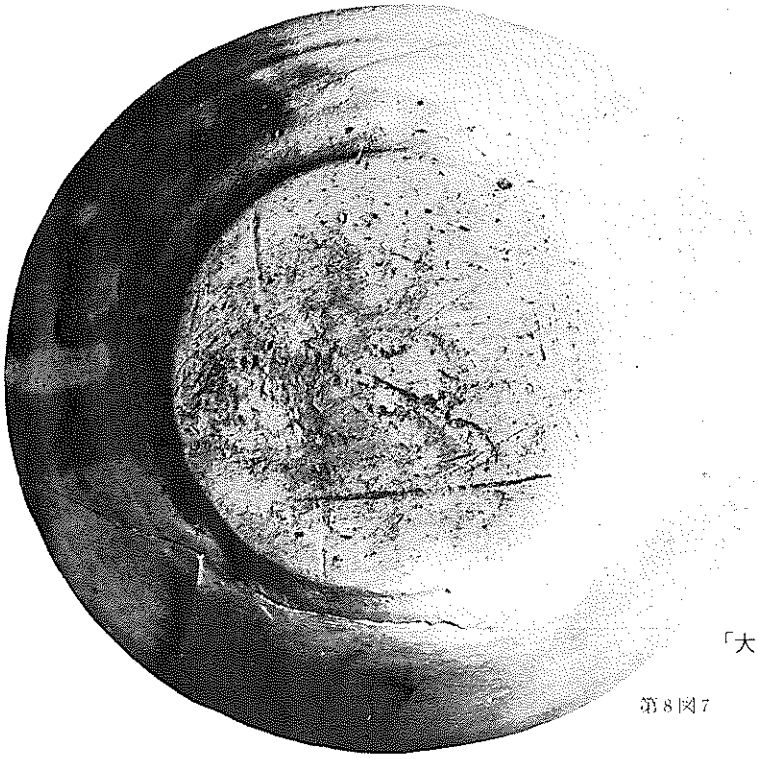

第10図7

第8図8


第8図1


第8図7

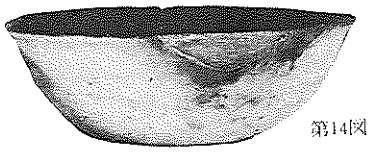

第8図5


「大」

第8図7

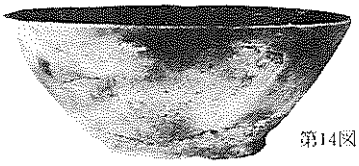
図版7　出土遺物

第16図 5



第14図 1

第16図 4

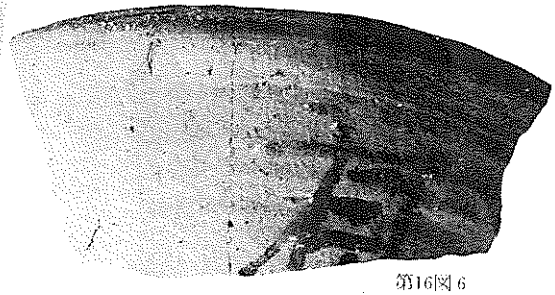


第14図 8

第16図 7

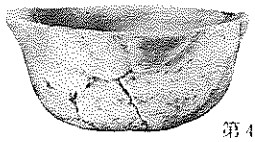
第14図10

第15図 1



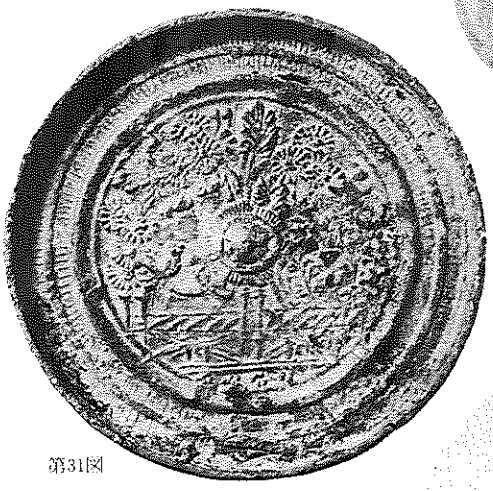
第16図 6

図版 8　出 土 遺 物

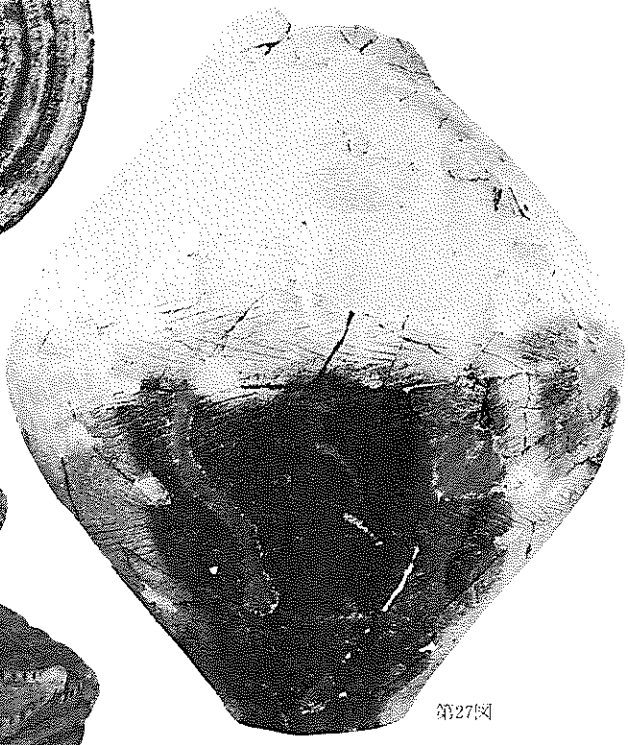


第4図1

第6図1



第31図



第27図

第28図

図版9　出土遺物

宮城県教育庁文化財保護課職員（昭和 53 年度）

課　　長	氏家和典	調査第１係係　　長	高橋多吉	調査第２係係　　長	佐々木茂楨
課長補佐	佐藤　茂	技術主査	早坂春一	技術主査	平沢英二郎
〃兼管理第２係長	扇　正人	技　　師	小井川和夫	技　　師	佐々木安彦
管理第１係　　長	加藤忠雄	〃	高橋守克	〃	加藤道男
主　　事	佐藤信子	〃	丹羽　茂	〃	遊佐五郎
〃	三浦正義	〃	斎藤吉弘	〃	森　貢喜
管理第２係主　査	中田悌子	〃	千葉宗久	〃	太田昭夫
〃	渡辺正憲	〃	真山　悟	〃	阿部　恵
		〃	阿部博志	〃	手塚　均
		〃	小野寺祥一郎		
		〃	小川淳一		
		嘱　　託	熊谷幹男		